

5226  
梅 花 郎

述 譯 史 小 香 淚

京 東

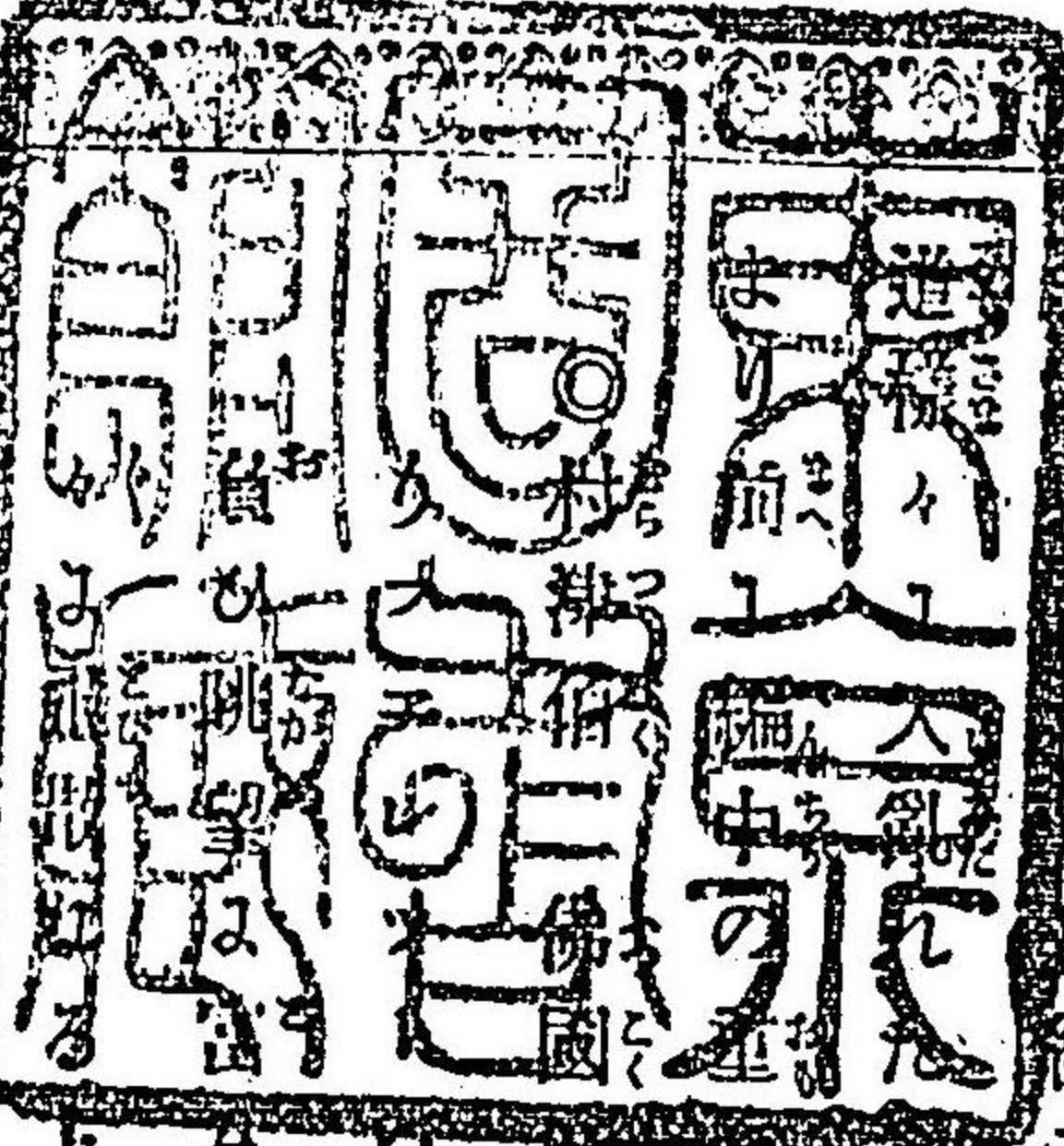
堂 進 明

梓



5  
360

W 470 / 23



凡例

本説起すの最組入りたる物語りにして人情又渉り犯罪も渉り

故成る可く讀者の意も落ち易き様よと先づ本文なる人物と必要なる廉々を説明し置かん

里の貴族よしてフェレットと云へる所も別荘あり我國よて云へば大磯の如き所あり海よ向て山を

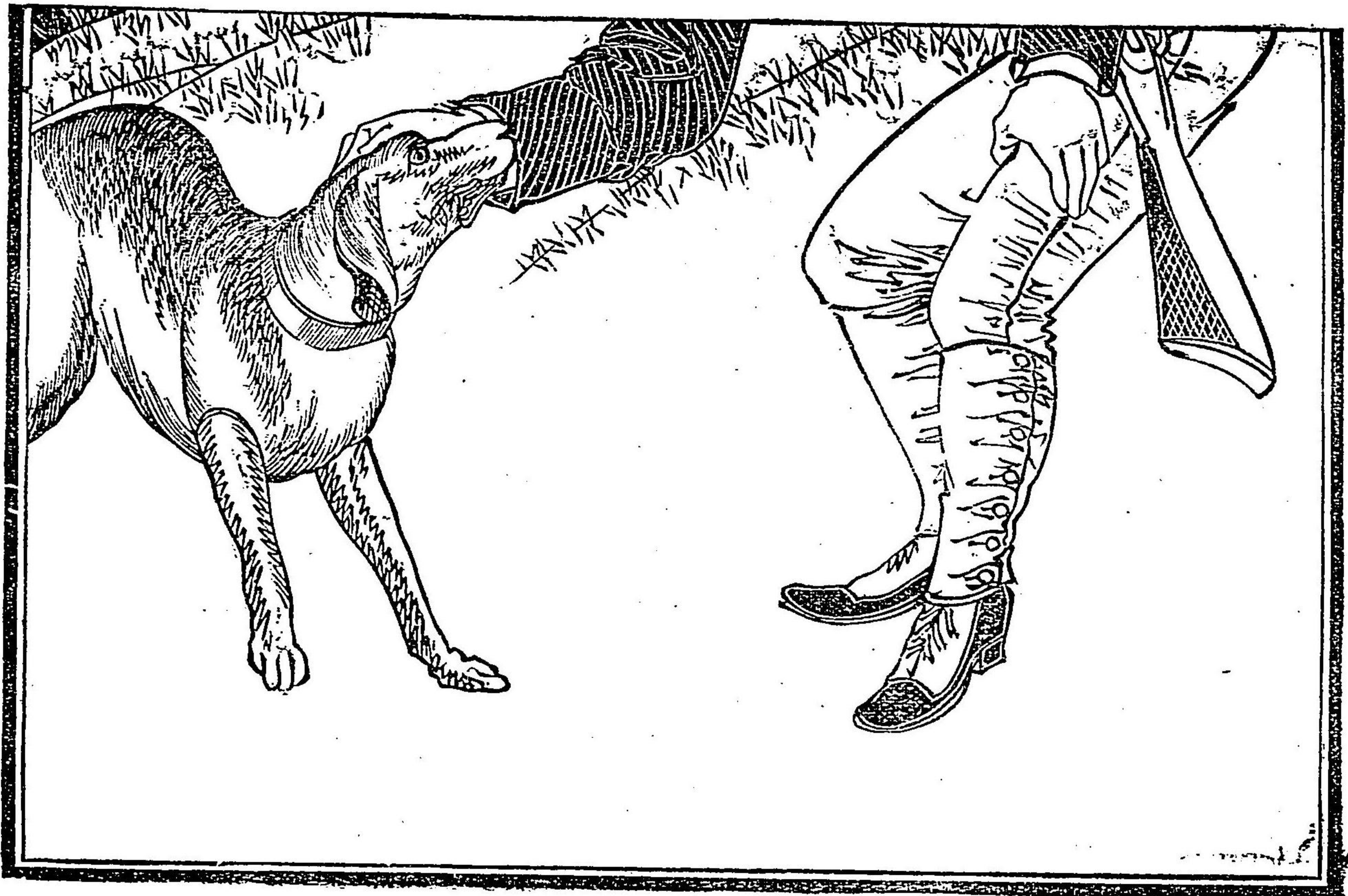
夏殊又涼しき土地あれが貴顯紳士の別荘も所上納涼の爲も集ふ人も多し

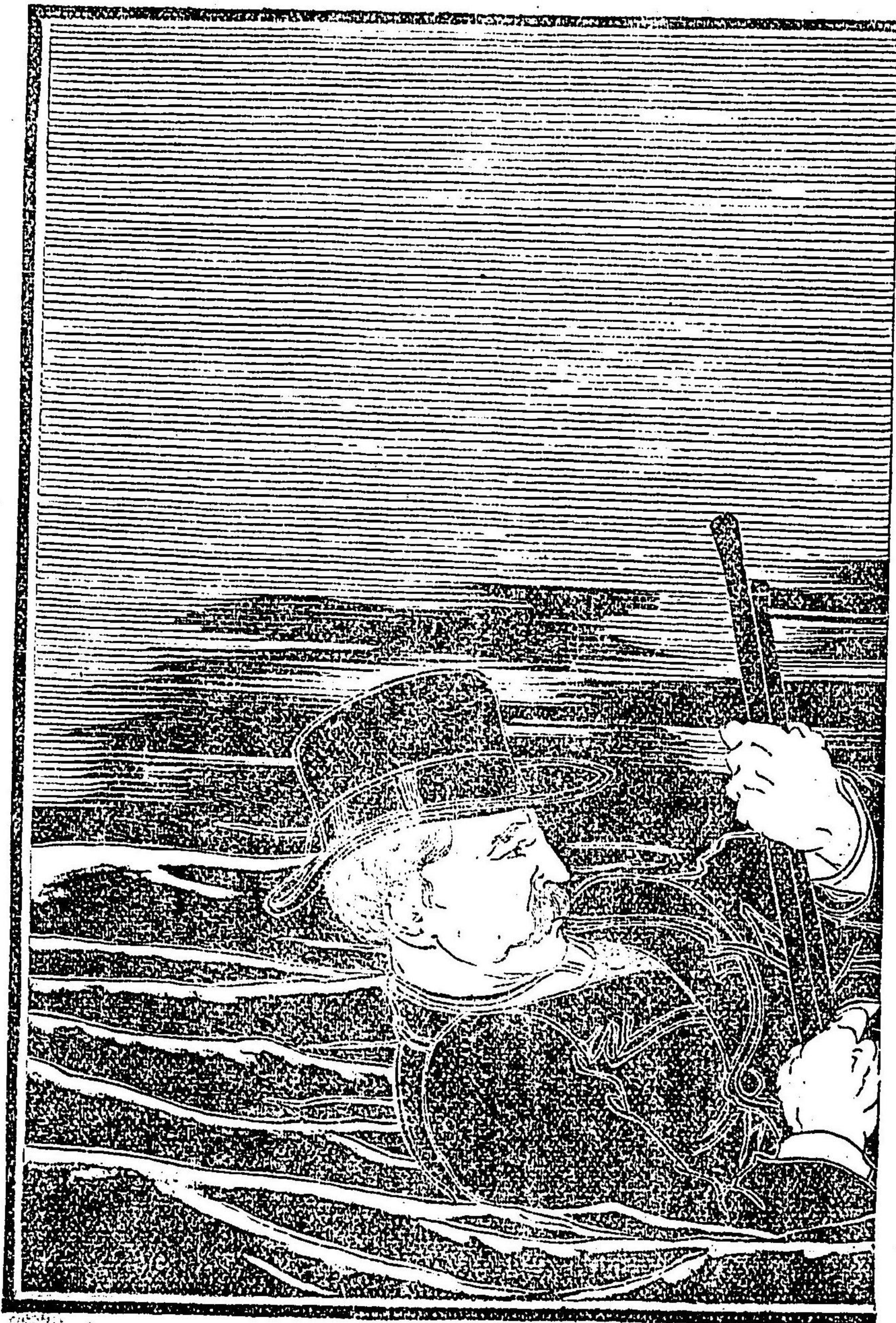
◎別荘 村津伯の別荘の小山の背後なる最物静かある所も在り當

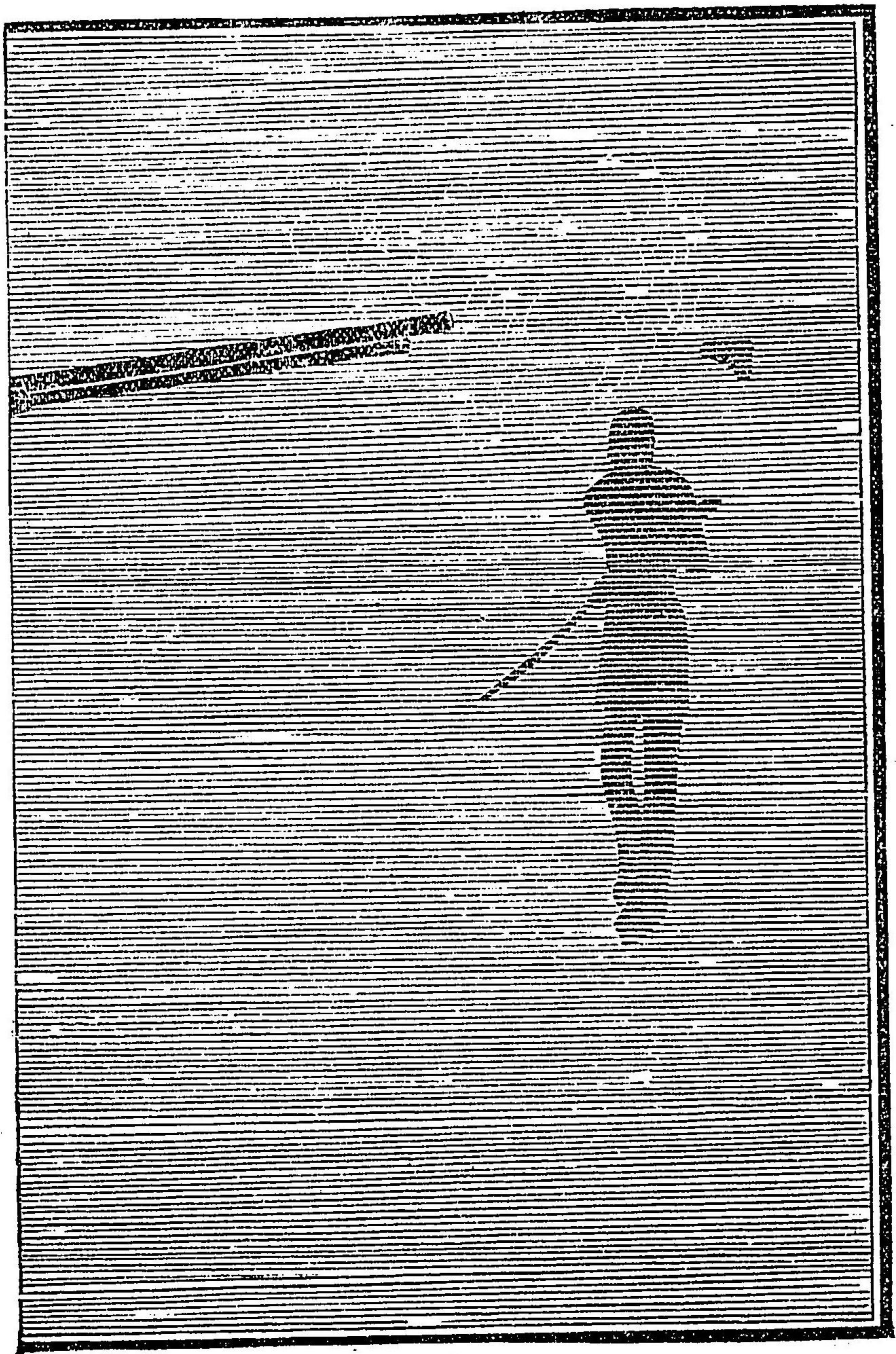
よの樹木多く生茂り樵夫あどの外も多く通らざる所あり伯の此

◎令嬢 二人あり異母の姉妹あり姉を初音嬢と云ひ妹を小枝嬢









と云へり姉初音嬢の先妻の子よして妹小枝嬢の後妻の子なり姉  
妹の氣質より人柄さどの本文よ讀み入れば自ら分る故茲よの記  
さす先妻後妻ともよ早く黄泉の人と爲り初音嬢も小枝嬢も同じ  
く亡母兒あり初音嬢の二十一歳小枝嬢の十八歳あり

◎迎賓館 個の一個の料理店よして村津伯の別荘より一里ばかり  
離れ小峯一ツ隔てたる所よ在り村津伯の建てたる者よ非ざれ  
ど村津伯も其令嬢も常よ此迎賓館を借受けて宴會を開き或ひハ  
舞踏の會などを催ふす事多し

◎少年梅花郎 個の銘酒製造を以て有名あるポルドーと云へる所  
の豪家の子よして同じく此フェレットの海濱よ來り村津伯が別  
荘より程離し大旅館よ逗留せり知る人の引合せよて村津伯の夜  
會よ臨みし事も有り又伯の二次小枝嬢と手を取りて踏舞せし事

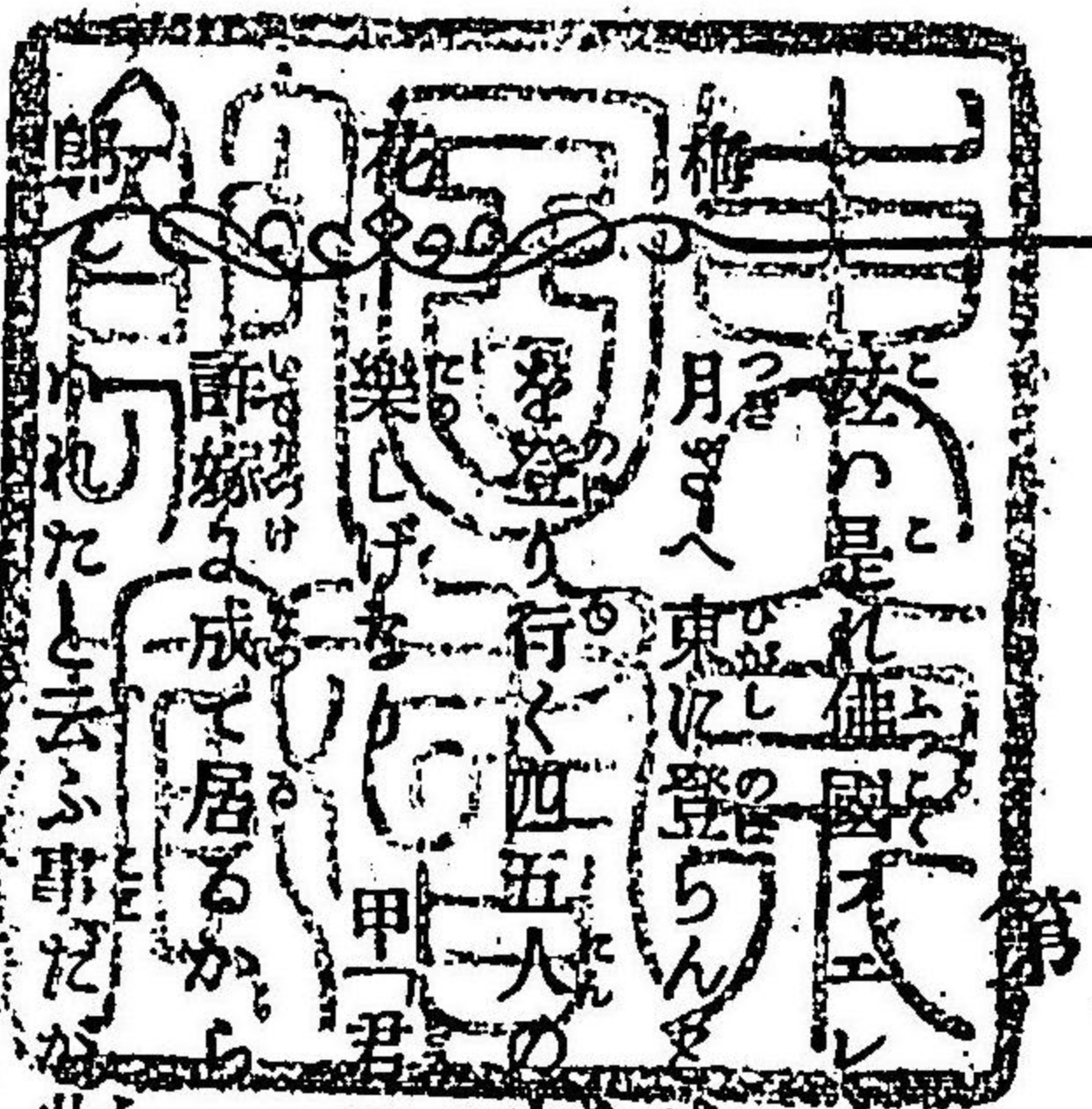
も有り去れど此土地よて初めて逢ひ知りたる者あれば極めて懇  
親の間柄と云ふよ非ず唯旅の道連とも云ふ可き位の交際を爲  
せるなり年齢の二十五歳あり

◎少年蟬澤 個の梅花郎と同じくポルドーよて生れ梅花郎と同じ  
く豪家の息子なり又學校も梅花郎と同じ所よ入りて教育を受け  
今また梅花郎と共に此地よ來りて共に大旅館よ宿を取り村津伯  
よ招かれて迎賓館の宴よ列なりし事も有り年齢の二十七歳あり

◎森川子爵 個の巴里の貴族よして今年三十歳あれど未だ定まれ  
る妻の無し又此地よ來らざれど村津伯が巴里よ在る頃ハ常に  
親しく伯の家よ出入したり去れど放蕩の爲よ殆んど身代を失な  
ひ負債山を爲すとの評判なり唯だ村津伯の愛を受け伯と親しく  
交はるが爲めよ猶ほ幾何か世人の信用あり

梅花郎

淚香小史譯述



一回

◎名前 右に記せる人物の名前の總て呼び聲の似寄りたる者或ひ  
 の意味の近き者等を無理に留儀たる者なり本篇の終りに至りて  
 一々原名と對照す可し猶ほ此外も多少の男女あれど夫等の總  
 て其時々々記す事とし茲より略す又本篇を梅花郎と名附し  
 此編の眼目たる少年梅花郎の名前を其儘掲げたる者なり

淚香小史述

月入東に登らん今宵の山手の迎賓館に於て村津伯の催ふせる夜會ありとて  
 少年紳士あり登りながら口々語り動搖めく様の傍目を見るも  
 甲「君の初音嬢の事ばかりか言て居るけれど彼れの駄目だぞ森川子爵と  
 乙「ナニ許嫁でい無いのサ成る程巴里に居る頃互に想  
 替つたのサ 丙「戲談の扱置でサ、アノ初音嬢の事よ就き最新の艶聞を君達の未だ  
 知るまい 甲乙「艶聞とい 丙「夫だから困る好男子を氣取る者が此艶聞を知ると  
 どノ一ツレ此頃大旅館に泊つて居る背の高い奴が有るだらう 甲「アレハ蟬澤と云  
 ぶ造酒家の息子よ 丙「爾サ其蟬澤と云ふ奴が初音嬢を見初られて此頃でハ毎夜の

(一十)

様は村津伯の別荘へ入込むと云ふ事だぜ 丁「夫は大違ひ蟬澤が自分で其様な事を言ひ觸すのだ蟬澤と云ふ奴の成る程別荘へも入込み又度々迎賓館へも行くけれどナニ初音嬢も見初められた譯じや無い彼奴の非常な歌牌が上手で伯の金を捲上り行くのサ先ほど僕が迎賓館へ行つた時も彼奴の伯爵と勝負をして最ふ二千圓ほど勝たら徐々歸ると云つて居た 丙「イヤ君の其一を知て未だ其二を知らずだ成る程伯と歌牌もやるけれど初音嬢も見初められて居るのだ 甲「夫の爾ど今日の宴會よ初音嬢も出るだらうか 丙「イヤ今日の初音嬢も其妹の小枝嬢も別荘に閉籠り迎賓館へは来ないと云ふ事だ夫だから蟬澤が歌牌は勝つと直に迎賓館を立去るのサ 丁「ナル程迎賓館を立去つて別荘の方へ忍び行くのだ 丙「先ア其様な事サ」と斯く語り行く背後又一問ばかり離れて此話を聞きながら従がひ行く一人の少年あり年の二十四五なる可く容貌の美して且男らしく目鼻達より口許に至るまで女もして見ま欲さ優しさの中より男らしき凛然たる氣象を込めたり是れ此話しの梅花郎あり梅花郎の我無二の友たる蟬澤の評判を聞き又人々が初音嬢を浮氣者の如く言ひ爲すを聞て

心よ面白からず思へども我意中もある小枝嬢の評を爲さるゝ故知ぬ振よて聞流せるなり斯て一同が二三町も進みし頃横道の方より徐々と歩み来る男あり早くも梅花郎の姿を見認め其傍に進み寄り「オ、梅君か好い所で君も逢た僕も今迎賓館から歸る所だが君も少し預け度い者が有る」と云い是れ今しも評され居たる我友の蟬澤あるば 梅「預る者とい 蟬「大金だナニサ大金と云程でも無いが僕も今日村津伯から二千圓程勝て今其金を持って居るが是から少し外へ行くから君預つて居て呉れたまへ」 梅「二千圓位なら自分で持て居ても好じや無いか」 蟬「イヤ此頃の物騒で歌牌も勝た奴が追刺さど逢ふ事も有るから其中は銀行爲替だけ手帳へ挟んだ儘で君も預けやう金貨の二百圓ばかり有るが是れ入用が有るかも知ぬから僕が持て居る」 梅「預つても好いが君の何所へ行く」 蟬「其行く先が僕の秘密だ君も話す事出来ない」 梅花郎の先程人の評に聞きし事も有れば若し蟬澤が是より村津伯の別荘へ行く積りの有ぬかと思ひ 梅「君の山の中へでも行くのか」 蟬「爾う悟られては仕方が無い實の山の中さ山の中よ僕の秘密の投書函が有て其中へ時々貴女が手紙



を入れて有るから子是から其國を開きよ行くのだ」梅君の云ふ事ハ僕ハ分らぬけれど君止したまへホンに山の中ハ物騒だぜ」蟬「物騒でも大丈夫最ふ慣て居るか」併し此金の君預ようどて」數さへも檢めず爲替帳を其儘梅花郎の衣袋に突入れ山の方入り行きたり梅花郎ハ其後ハ暫し行みて考へしが口の中よて呟くやう「フム彼奴何ふも不思議だテ評の通り夜々別荘へ忍び行くのか山道ハ随分動香事が多いから若し賊までも逢ふと氣の毒だ彼奴色男ぶつて平生短銃をどの持ぬから此様な時ハ不用心だ呼返して己の持て居る此短銃を借て遣らふかイヤ夫よりの彼奴の後を見へ隠れよ從て行き方一の事が有た時ハ馳け附けて加勢して遣るのが友達ハ義務だらう好々」と獨り考へしが腰の邊を探して短銃を取出し其彈を檢めつヨ「六連發の所を先程海岸で徒らハ海鷗を射たから一發ハ空よ成つて未だ五發まで殘つて居る五發あれば賊を五人まで仕とめる事がイヤサ真逆其の様事もあるまいが夫でも先づ從て行て遣らふ胸ハ問ひ胸ハ答へつ先づ短銃を腰に納め遙かハ彼方を透し見れば猶ほ山よ分入る蟬澤の後影月明りよ見る故獨り首肯きて其後ハ從

ひ行けり是れ即ち梅花郎が身よ幾多の災難と幾多の波瀾を起し來る許なりとい後よぞ思ひ當られける

涙香曰く此話じよ就ての凡例を掲げ置きたれば人の名前及び身分など總て凡例よ引合して讀まば分り易かる可し

第 二 回

世よ男女の情ほど不思議あるいあらじ昔の人の之を戀と云ひ今ハ之を愛情とも情愛とも云へり世の中の喜びも悲しみも此愛の情より出る事多し梅花郎が短銃を腰に着けて其友蟬澤の後に從ひ行くも友達を思ふの情とい云へ實ハ又愛の情も籠れるあり梅花郎ハ曾て迎賓館に招かれ村津伯の二女ある小枝嬢と手を携さへて躍りし事あり今宵其小枝嬢が別荘に残り居る事を思へば何と無く氣の向ふ心地せられ蟬澤が其別荘の近邊へ行くと聞き半ハ友達を氣遣ふの心半ハ小枝嬢を思ふの情素より今宵小枝嬢よ逢れる事とい思ひねど浮々と蟬澤よ從ひ行けり別荘ハ山の奥へ一里も入込みたる所あれば坂を攀ち谷を潜りつ進む中ハ夜ハ早や八時過九時近くありぬ夏の空とて月

の有れど海の方より吹來る潮風は幾々と断續く雲は隠され忽ち明るく又忽ち暗くされり頼て別荘近く進みし頃眺め見れば二階の一室は燈光の明り薄暗く窓は差せるの小枝嬢か初音嬢か猶ほ眠らずに在る者あらん此明りを見るに就けても梅花郎の心の裏安からず扱て彼の蟬澤愈々人の評は違はず姉嬢初音嬢の許へ忍び行く者なるか斯る事よの抜目無き蟬澤されば若しや姉嬢よのわらで其妹小枝嬢を目的とするよりあらぬかイヤ〜蟬澤の僅々酒屋の息子あり何とて都ある貴族の令嬢と思ひを寄せらるゝ事あらん左すれば兼て此別荘は奉公すると思さし下女撫子と忍逢ふ者あるか蟬澤に下女の戀こり似合しけれ令嬢を迷す可しと思はれず併し酒屋の息子と云へば我も亦同じ身分なり貴族の令嬢として酒屋の息子を愛せぬと限りあし扱も氣の揉る事かなと獨り心を碎きながら猶も蟬澤の舉動に目を附くるよ彼れ別荘より十四五軒も離れたる所の最老き松の木の下許に至り兩の手を舉げて其木の皮を探り初めたり梅花郎の益々合點行かず彼れ松脂蠟燭は有らぬ身の何故と松の幹を探るよ昔より戀人が松の樹を探りて思ふ女よ合圖するなど、の聞きし尋みし何故ぞ如何ある仔細

ぞ空しく心を搾りあがら瞬澄もせず見て有る中不思議や就れにてかドンと一發短砲の音したるが是ぞ正しく何者か彼蟬澤を狙ひ打たる者あり狙ひ違はず其音と共蟬澤の苦と叫びて樹の許は踏反倒れりア、梅花郎の此有様を見て夢かどハかり驚きたり我知らず足を進めて蟬澤の倒れし傍へ馳寄たり「コレ蟬澤、蟬澤氣を確よし」と抱起せど蟬澤の正よ心の臓を射貫れたる者あれば其甲斐も僅よ虫の音の如き息にてウーンと物凄くうめきたるが是ぞ此世の分れ其儘死せり息絶たり黄泉の人と爲り了れり梅花郎の驚き如何よぞや驚き餘ッて暫しが程の爲す事さへ知らざりしが斯て有る可きよ非ざれば兎も角別荘を叩き起し下女よありと此死骸の番を頼み置き直様海岸よ歸りて巡查おと連れ來らんと漸く心よ思案を定め先ず別荘の入口の方より行き力を限りよ戸を叩けど中よ何の返事も無し「頼みます〜モシ頼みます」呼ぶ聲の空く木屐に響きて消へ幾度音づる、も無益なれば仰て二階の窓を見るよ先程の薄燈りの猶ほボンヤリと窓よ差せり思ふよ是れ洋澄の心を引込めて美人其影も眠れるなん聲も無し音も無し詮方盡きて裏口よ廻り行き又も幾度か呼び起せど返事なき

事前も同じ今い早や施す手便も盡きたれば兎も角死骸をば此儘も置き海岸も走り歸らんと再び別荘の前より出来れば怪しい哉、何者とも知れざる人影彼の蟬澤の死骸の上へ俯向きて其衣囊の中を掻探れり抑も蟬澤が衣囊の中より歌牌も勝たる二千圓の中銀行爲替の梅花郎に預けたれど猶ほ残る二百圓の金貨あり曲者の此金貨を握り取りて己が衣囊に入れつゝあり梅花郎の之を見て如何よなすや

第三回

今しも蟬澤が死骸の上より曲者の俯伏きて其衣囊をば探れるを見て梅花郎の火と怒り己れ曲者我友と殺せし上も我が茲も居るを知らずして其金をまで奪ひ取らんと探り寄りし太々し逃やうとて逃さんやと其儘邊より走り行けば曲者の足音も打驚き逸足出して逃去りたり梅花郎の其後を追ひたれど彼れの山路も慣れし者か早くも十間ばかり離れしかば此上追ふとも無益なり短銃もて打留めんと手早く我腰を探りて短銃を取り出し足場を定むる暇さへ無く狙ひ打り打放てり梅花郎の日頃物射る事も巧みなれど此時宛も月雲も入りて俄も暗くありたれば狙ひの外れし者と見へ曲者の倒れ

もせず其儘逃げて影さへも見へずなれり此上追ひ行くとも詮なけれは仕損じたりと眩やさながら又も死骸の傍も返り若し猶ほ虫の息も通ひいせぬかと胸の邊りも手を置き見れど動氣も早や打止みて全く此世の人に非ず見れば蟬澤の襦袢の衣囊裏返し返りあるの彼の曲者が其中を掻探りて金貨を握み去りし者ある可し左すれば彼れの金を目當に蟬澤を殺せし者なり我れ今より如何よせば好らんか再び別荘を叩きたりどて起出る人の無し直も海岸も行き巡査を呼來るの當然あれど去ればどて死骸を此儘も置き置くの氣掛りあり夫とも暫く茲も在りて村津伯が迎賓館より歸り來るを待受けんかと思案も未だ附かぬ中忽ち背後より我兩の肩を無手と捕へ「コレ起上れ」と引起す者あり扱ひ曲者又も同類を引連れて此反罪を認めたる我が命を奪はんとて立返りし者あるかと早くも身構へして背後を向けば個は如何も曲者より非ず警察官あり其數都合三人もて孰れも梅花郎を曲者と思ひし如く鋭き眼にて其顔を眺めたり

梅「先づお放しあさい私し逃る者で有ません」と云へば警官の一人の同僚も向ひ「此奴未だ短銃を持って居るぜ夫を取上げ給へ」と云へり梅花郎の「イヤ其手數

「及びません」と云ひながら持つ短銃を地に落せば一人の早くも拾ひ上げたり梅花郎の警官が我を疑へる事を悟りたれば言葉を改めて「貴方等の何故私しを罪人の如く取扱ひます様子を分りませう 警見掛ばかりが當りある者か 梅「イヤ私しの悪ルヤ」の地主です造酒家です梅花郎と云ふ者です決して罪人と見違へられる者で有りません」警官の最冷き聲言よて「地主だか造酒家だか知らぬけれど兎も角死骸の傍に雨露ついて居たのだから捕押へるのが警官の職掌だ 梅「でん私しを人殺しと認めますか 警「無論の事と現行犯と同じ事だ反對の證據が有るまでの其方の外に疑ふ者の無い見見ろ其方の持つ居た短銃の未だ筒に温まりが有るで無いか今し方確か短銃の音がしたから来て見たのだ筒の中も未だ燻ぶって居る 梅「此の怪しからん事を仰有る成る程唯今此筒を放しましたがアレハ曲者を射たのです射たけれど狙ひが外れ曲者の林の中へ逃込みました私しを詮議するより早く何方か林の中をお探し爲い 警「其方の差圖を受けぬコレ白状しろ何故よ此紳士を殺した 梅「イエ殺しに致しません此者の私くしの無二の友です同郷の者で蟬澤と

申「ます 警「夫の知て居る蟬澤と云ふ博奕打だ今日も迎賓館で歌牌に勝ち大金を  
持つて居るから其方の其後を踪て来たのだ 梅「成る程後を踪けて来たよの相違あり  
ませんがナニ殺す積りで有りませせん先日も歌牌に勝た歸り道で殺された人が有る  
と聞きました故若し其様な目よ達て成らぬと友達の情で従て来ました 警「黙れ  
此頃其方の様な奴が有るから今夜も此通り見張って居たのだ是から海岸の警察へ拘  
引する 梅「夫の御無理で 警「無理でも何んでも職掌だ併し先づ充分に現場検査  
をせねばならぬ幸ひひ茲の村津伯の別荘だから別荘の一室を假て取敢ず其方を取調  
べる」と云ひながら残る二人の警官は向ひ「一人の此より直に海岸へ行き憲兵本部  
へ此事を通じて貰はふ又一人の茲に居て此罪人の番を頼む拙者の直に別荘を叩き起  
し其用意は掛るから」と云へ一人の心得て海岸の方に行き一人の確に梅花郎の手  
を取りたりア、梅花郎計らぬ事より人殺の疑ひを受けたる上場所も有ふ村津伯の  
別荘よて其調べを受けんとす別荘の是れ我が思ふ小枝嬢の住居あり嬢若し我身が斯  
る汚らばしき疑ひを受けたりと聞かば我身を何とぞか思ふ可き斯く思ひ見れば身を切

らる、より猶ほ幸し梅花郎が心の中思ひ遣る可し

第 四 回

梅花郎の村津伯の別荘にて取調べを受くると聞き心も非ず小枝嬢若し我身が罪人の如く取扱はるゝを見れば我を何ぞか思ふ可きと夫のみ心は苦しければ大膽も警官は打向ひて「イヤ彼の別荘で取調べを受ける事ハ堅く御免を蒙ります 警」其様を我儘な事ハ聞届けられぬ 梅」でも私ハ断然拒みます 警」拒むと有らば腕力を以て引摺り込むだけの事だ」とて動く景色も有らざれば 梅」夫ハアノ別荘でハ最ふ皆寐て居ますから叩いても無益で有ります 警」夫を其方が何ふして知て居る梅」イヤ只今私しが強く戸を叩きましたたが誰れも起しません 警」何故ハ戸を叩いた梅」イヤ誰れかハ此死體の番を頼み直様警察ハ届ける積で」此時警察官ハ別荘の方を眺め又も梅花郎ハ振向きて「嘘を云ふナ別荘でハアノ通り未だ起て居るぞ貴様ハ叩いても返事をせぬと云ふ筈が無ハ」梅花郎ハ怪しみながら別荘の方を振向き見れば個ハ如何ハ先程まで二階の窓唯一ツより薄暗き硝燈の影の差すのみなりし彼の

別荘今ハ宛も下座敷ハ宴會でも有るかと思へる、ばかり下ノ窓より悉く燈光の影見ゆるよ由り「オヤ之ハ」と云ひたるのみ答ふる所を知らず警官ハ此時梅花郎と同僚ハ渡し置き別荘の戸を叩かんとて彼方へと進み行きしが折柄海岸の方より急ぎ足よ歩み来る人影あり警官ハ之を見て別荘の下僕と思ひしか三四間其傍よ進み寄れば下僕ハ非ずして年若き女あり其姿ハ此別荘の下女と知らる 警」コレ女其方の此別荘の下女でハ無いハ」女ハ驚きたる風にて警官の様子を眺め「イヤ、エ別荘の下女でハ有りません此別荘の小枝嬢ハ使れて居る腰許の撫子とヤす者で」 警」フム腰許でも何でも好ハ此夜深ハ何をして居た」撫子の極て氣散な女と見へ口さへ軽く「情人と一緒ハ海岸迄買物ハ行て居ました夫が悪ハいんですか」警官ハ最不興氣ハ惡いと云でハ無いが此山中を夜分ハ出歩くハ浮雲ぞ」と云へば撫子の聞流しオヤ夫だけの用事ですか」と云ひつゝ、早や別荘ハ入らんとす警官ハ又も呼留めイヤ未だ用事ハ有る今夜此別荘の下の間へアノ通り明の附て居るのハ來客でも有るのか 撫」イエ來客ハ有ませんが最ふ村津伯が迎賓館から歸つて來る刻限ですから下僕が燈火

を黙たのでせう。警「夫ら暫し御用を以てアノ室を借りたいから下僕も爾云て呉れ  
 撫「アノ室の球突みどの室ですや夫を借て何成さる。警「イヤ取調る事がある  
 から借るのじやナニ永く掛らぬ若し其中主人が歸れば此方より其旨を述て斷る  
 から心配よの及べぬ」斯聞て撫子の怪みながら「オヤ調べるどの誰か罪人でも有の  
 ですかア、彼の松の木の下居るのが爾です一寸と私し見せて下さいナ」とて  
 早くも彼の蟬澤が死骸の邊りに歩み寄りしが其有様を見て肝を潰し「オヤ先ア死で  
 居る」と言ひつゝ、一步退きたり此時月影雲を離れて又も明くなりしかば警官の死骸  
 を指さし「其女の此顔を知て居るか」撫子の情々見て又も驚き「ア、此の蟬澤さん  
 です一二度此別荘へも来た事が有りますアレ衣籠が彼の様も裏返つて居るのの必と  
 殺した奴が探したのですよオヤ未だ一ツ彼所も金貨が落ちて居ます」と云ひたれば警  
 官の早くも之を拾ひ上げ「フム之も一ツの証據物だ」と云ひながら同僚も渡したり  
 警官の又も撫子に向ひて梅花郎の顔を見せ「此者を知つて居るか」と問ふは撫子の  
 月よ透して充分梅花郎を差のぞき「ハイ先日小枝嬢の供をして迎賓館へ行た時其入

口で此方が嫌疑は辭宜をいたしました其外よの見た事が有りませせん。警「名前は何と云  
 ふ。撫「名前など知やア仕ませせん。警「フム夫で宜いから早く別荘へ行て書物です  
 る様紙筆などを揃へて置け」之にて撫子の別荘の方へ進み行き衣籠より鍵を取  
 し其戸を開きて内へ入れり警官のやをら梅花郎を引立て同僚の番を爲さし  
 め置き續ひて別荘の中へ入れりア、梅花郎の終に拒む由なくして小枝嬢の住へる  
 別荘の一室よて取調を受る事といなれり

第 五 回

梅花郎の厭々ながら終つて村津伯の別荘なる球突の一室よて調を受くる事といなれり  
 話替りて下女撫子の直に二階ある小枝嬢が室へ入行たるは嬢の猶ほ寐も遣らず卓子  
 へ倚りて物の本を讀み居る故撫子の優やか其傍に寄り「オヤ嫌疑未だお思ひよ  
 成りませんか一唯今歸りました」と云ふは嬢の心重げは此方向き「チ、お歸りか  
 今夜の風が吹くから心配してお前の歸るを待て居た一何も變つた事無つたの撫  
 へイ何も別よ一。小「アノ先程何だか此下で人の騒ぐ聲がしたから何事かと思つ

たがお前の来る時誰か居なんだかエ」撫子の斯の騒ぎをば娘が耳よ入る、も従ふ驚かしむるのみよて何の甲斐も無らんと思へば殊更は何氣なく「居た事、居ましたかナニ別に 小」お前顔の色が變つて居るよ恐い者でも見なのだらう 撫「イエ何も見の致しませぬ最ふ十二時ですお息み遊ばせ 枝「何も見ぬ事、無いよアレお聞お今も下で人の聲がするで、無いか」此時警察官が誰よか語る如き聲薄々と聞へたれば撫子も今の包み得ず「ア、彼ですか彼の貴方林の番人が若い男を捕へたので、います 枝「若い男を、何の罪で捕へたのだらう 撫「何かの間違ひでせう此前歌牌は勝た方が追剣と逢つたとやらで其後の手當次第と捕へます 枝「捕へられたら何の様な人だエお前の知れた人で、無いか」斯く問われて我主人を欺くの罪深しと思へば 撫「ハイ先日迎賓館へお供致して参つた時門の方で貴方は辭宜をした方と能く背て居ますよ 枝「私しは辭宜を、オヤ私しの知て居る人か知らん」益々深く問詰られ當惑と思へとも強て隠さん心も無く 撫「爾かも知れませぬ其時貴方もお辭宜を成つた様でした 枝「シテ人柄、何の様な 撫「背の高い立派な方ですよ何でも

ボルドーか何所かの人でせう巴里よ、アノ様お立派な方の有りませせん」立派と聞き小枝嬢が心の中より第一は先づ「若しアノ人よ、有ぬか」どの疑ひを起したり去れど其色の顔も見せず「夫が何ふして捕まつたへ 撫「能く存じませせんが私が歸つた時巡査だか何だか其人を捕へて是から詮議をするのだから下の室を貸して呉れと申しまして 枝「夫で、今下の間で詮議をして居るのだね 撫「其の様事事でせふ何んでも之れから憲兵を呼び遣るとか其の様事事を言つて居ました」娘の暫らく考がへて「憲兵、時々憲兵おどが来る様で、大變な事と見へる 撫「爾うか、知れません何んだか短銃を放つたとか短銃で打たれたとか申して争うつて居りましたから」胸よ思ひある小枝嬢が身よ取りて、一々氣よ掛る事のみあれば今更の心ろも安からぬど何氣なき様子を作り「ア、其様事事、聞き度くない最ふ寐ませせうお前も居間へ行つてお息みな 撫「ハイ夫で、お召換を致ませう 枝「ナニ夫よ、及ばぬい獨り、着換ます」と云ひながら坐を起たれば撫子も身を起し「夫で、お休遊ばしませ」と云ひ置きて退きたり小枝嬢の寐巻を取上ながら暫し眉を蹙めて考へ

しが立派な人と云へるの我思ふ梅花郎の外より非ず如何なる疑ひよりて斯る詮議を受くる者もや私に降り行きて其様子を聞んかとも又も寐巻を傍に置き只管ら耳を澄せども詮議の言葉の更も聞へず今心打定めたれば忍び足して我室を出で密かに楷子段を下り行けり抑も梅花郎と小枝嬢との如何なる問柄なりやと聞くも只だ是れ迎賓館の夜會にて二度ばかり手を引きて共躍りたる事あるのみ其外に何の交りも無く染々と話しせし事さへ無けれども其時よりして嬢が心ろよ何と無く外の少年と躍りたる時より更も心ろ軽く氣の進む想ひを爲したり我心も眞實の愛情ありて梅花郎を愛せるや或の眞實の愛よりあらぬや夫すらも知らざれど唯梅花郎の事とし云へば自から氣掛り今しも若き男捕れたりと聞きて第一は梅花郎の事を思ひ出せしあり唯夫のみの事あれど平生の内氣も似ずして自ら我心を制し止むる事さへ叶はず我もあらで浮々と我室を忍び出で下り降りて人知らず彼の球突室の入口に忍び寄り恐々ながら合の垂幕を掻き分て其中を覗きたり此くあらんとし思ひし身も此時の驚ろきハ夫れ如何ばかりぞ

第 六 回

小枝嬢の垂幕を掻き分て覗き見るに裏より二人の警察官あり其一人の衣服も立派よして警部とも思しく今一人の通例の巡查なり(此巡查の蟬澤の死骸と番せよと言附られたる者なり死骸を戸の口まで持来り今しも茲に入りて取調へを聞く者ある可し)警部の前も悄然と頭を垂れ調べを受くる一人の少年の絶へず小枝嬢が心の裏もある梅花郎あれ嬢の今更の如く打驚きて其の問答を聞き居るは警部の一際聲を厲まし「夫で其方幾度も此所の戸を叩いたと云ふのか 梅」ハ幾度も叩いて呼起しました「立開く小枝嬢の心の中よア、今方叩いたの彼の郎で有たのか爾と知れば下僕でも起して戸を開かせたものを」と思ひたり 警「併し幾度も叩いたから誰も返事をせぬ筈が無い 梅」筈が無いと仰有つても夫の私しの知た事では有りません全く返事が無つたから無つたのです 警「併かし叩いたから叩いたと云ふ証據が無くていゝらぬ此様な容易からぬ事件だから疑はれて居る其方の言葉ばかりを直も眞事を認る事ハ出来ぬ」小枝嬢が心の裏「オヤ疑はれて居るとい可愛相も何



を疑はれて居るのだらふ」警官の猶も言葉を續ぎ「コレ唯事での無いぞ人殺しの嫌疑だぞ人の命を取たと云ふ恐ろしい疑がひだぞ」此一言より小枝嬢の宛も胸を努める、想ひを爲し驚きの餘り倒れんとしたれども漸く傍の柱よ身を支へたり此時梅花郎の落着きて「固より其嫌疑の存じて居ます私しの逃る曲者と認めて追掛けましたか追附く事が出来ませんから切ての身軀へ傷を負せ逃る事の出来ぬ様よして遣らうと存じ一發短銃を放ちましたが生憎狙ひが外れました私しの無二の親友が殺されたのですから友達の義務として何とか其曲者を捕へ度と思ひました」警官のせ、ラ笑ひ「旨い事を言ふコレ其様な餘計な事言はず充分説明して見ろー我身も疑ひの掛らぬ様」梅説明す丈の事既に説明しました」警官の梅花郎の短銃を檢めて「方曲者を狙つて何發射た」梅「マツマ一發です」警「ソレ見ろ夫が第一怪いのじや其方の短銃を檢めるよ彈が二ツ脱て居る一發射たら二ツ脱る筈が有る舞いコレ見ると目の前は差附たり梅花郎の答ふる所を知らず暫しの自から疑ふ如く唯眼をのみ動かしたりア、梅花郎の先は海岸に在りて戯れ一羽の海鷗を射たる事あり今の

餘りの驚ろさよ其事を思ひ出し得ざるあり警部の早くも其顔を見て取つ是ぞ屈強の証據と見認し如く傍なる巡查に向ひて「サ被告の此問に返事が出来ぬ早く其旨を書取なさい」と命じたり梅花郎の此時漸く海鷗の事を思ひ出せしかば「イヤ答への出来ぬ事有りません今日晝の中海岸を散歩しまして其時」と半ば言ひて其言葉の未だ終らざる折から入口の戸を遽しく推開き荒れ荒れ入來る人こそ有れ是れ誰れぞ別荘の主人村津伯あり梅花郎の斯る處かしき有様を伯に見られ消へも入り度き心地したり親き居たる小枝嬢も同じ思ひよ心を痛め「オヤ悪い所へ父上が父上の譯を知らぬ故直よ彼の人よ罪が有ると思ふたらふ是切りで最ふ彼の人を寄附ぬ様よしやア仕舞いか」と空く胸を苦しめたり村津伯の今しも迎賓館より歸り來て我下部より警官が球突室へ罪人を引入れたる事を聞きしかば火ツと怒りて入來りしきり伯の警官の顔を見るより早く目を見開きて其傍よ進み寄り「君の何者だ見れば警部の服を着けし實は怪しからんでい無いか茲を警察署と間違へおさつてたかコレ役人茲の拙者の別邸だよ如何ある權理を以て拙者の承諾も無く夜中に茲へ亂入おさつた」警

部の最と殿めしき聲音にて「亂入といひての外に拙者の司法官の職權を以て茲へ來たのじや」伯の益々猛り「ナニ司法官へん小癪か一夜廻の撥る風を仕て 警伯爵も嗜みさされ 伯「イヤサ夜廻りだか司法官だか知ぬが假令ひ大審院の判事長もしろ拙者の承諾を得ずは茲へ入込む筈の無い茲の上等の球突室だ球臺の上へインキを載せてサアタツた今明渡して貰ふ謝べるなら外で翻るが好い」斯く賤められて警部も益々怒り若し此儘に拾置きて二人櫻み逢ふも至り兼まじと思ひれたり居合す 巡查何某の兼て村津伯を知る者なるが見兼て割て入り「イヤ伯爵御立腹の尤もですが實に今夜御別荘の外で人殺が有りまして我々の職務として現場の取調書を作らねばなりません夫で斯様に失禮をも願みず暫く此所を拜借致したので有りませから何ふぞ左様に仰有らず今二時間の御堪辨を」と物柔らかに仲裁口も根が人善の伯爵なれば直よ心も打解けて「イヤ爾う事が分れば言ふ事無い成る程月夜でも外での調書の出来ぬ筈じや兩詳しく言へば好いので下部の者が譯も言はず唯警察官が罪人を殊突場へ引入れたと知せて來たから實に一時は立腹したがナニ宜しい二時

間が三時間でも」と言ながら又も警部に向ひて「時お其被告と云ふは何所も居ませ」と問ひ掛けたり此時までも椅子は根を卸せし如く立も得遣ず空しく頭を垂れ居たる梅花郎の敬々しく身を起して伯爵に一禮をなし「イヤ被告人と申すの私しです斯く申す梅花郎です

第七回

「被告人の斯く申す梅花郎です」と聞きて村津伯の驚きて飛揚り「オヤ君、君、君が君の梅花君じや無いか先日拙者の親友小西男爵が引合せたのの君だらう」と言ひたり小西男爵の梅花郎の親戚も當る人まで村津伯との別懇の間柄ある故此人が梅花郎とば初めて村津伯に紹介せしき梅花郎の敬々しく「如何にも小西の紹介を以て先日御面會を願つた梅花郎です 村「君が今嫌疑を受けて」 梅「ハイ御覽の通り追刺と人殺しの嫌疑を受まして 村「夫の怪まからん其様を筈の無い素より君の素性の詳しく知らぬが兎も角親友小西が親しく交る人だから其様を疑ひを受させてい拙者が小西に對して相濟ん追刺あとする人なら小西が拙者よ紹介する筈の無い」と

候氣出して憤喝たれば梅花郎の云ふよ及ばず立聞せる小枝嬢も重荷を卸せし心地し  
 たり村津伯の更よ言葉を柔けて警部に向ひ「コレ法官先程足下と對し此所を明渡せ  
 などと言たれ拙者の疎忽で有った幾重もお詫する一併し此梅花郎と云ふの決して  
 疑ひを容るゝ縁者人での無い拙者も萬更の他人どの思ひぬ故何んか此調べの席へ拙  
 者を立合して貰ひ度い 警「イヤ夫の掟も負きます假令は貴方の親友で有らふとも  
 貴方を立合せて取調べをするなど、云ふ事の出來ません 村「イヤサ六ヶしく掟な  
 どと掟を出せば成る程足下の言ふ通り他人を立合せる事の出來まいが茲の何に拙者  
 の家だ其様な掟沙汰の御免蒙るナニ拙者が一人立合つたからとて夫が爲めは足下の  
 職務を妨げると云ふ筈も無いサア拙者の居る所で調べ給へ一時は其殺された云の  
 の誰だニ誰が殺されたと言ふのじや 警「今夜迎賓館で歌牌は勝つた客人です村  
 津伯の又も驚き「ナニ今夜迎賓館で歌牌は勝つたと云ふの蟬澤の外は無いがサア警  
 サア其の蟬澤が殺されたので 村「夫れはますく容易あらぬ一併し足下の此の梅  
 花郎が其の勝た金を奪ふ爲めは蟬澤を殺したと云ふの、か夫れの嘘だ全たこの間違

ひだ」と警部の言葉を碌よ聞かず我が思ふ一存よて推貫さんとする此の勇ましさ  
 言葉を聞き隠れ居る小枝嬢の殆んど走り出で父が膝を抱き附かんと思ふ程又喜び  
 たり警部の最冷たき時よて「何の様か人でも罪を犯さぬと云ふ事の出來ません村  
 併し拙者が確く保證する蟬澤と梅花君の親友だから遺恨の有る筈も無し夫かと云ッ  
 て金に目が呉れ友達を殺すと云ふ様を其の卑劣な梅花君での猶更ら無い 警「併し  
 此位の年頃での女を争うふ嫉妬から及物三昧よ及ぶと云ふ例しも随分世間よ有る  
 ことですから」女を争うふ嫉妬と聞き村津伯の二人まで年頃の娘を持つ身あれば  
 何か心よ當る事でも有りしか一寸と眉を蹙めて考ふる躰ありしが其の疑ひも直ちよ  
 解けしと見へ又も警部は向ひ 村「イヤ孰れよしる梅花君に罪が有れば其の罪の有  
 ると云ふ證據を足下の方から擧ねばならぬ何も梅花君から罪の無い證據を擧るよ  
 及ばぬ筈じや一シテ足下の現在梅花君が蟬澤を殺す所を見たど云ふのか 警「イヤ  
 殺す所の見ませんが梅花郎が未だ温かい短銃を持って蟬澤の死骸を探して居る所を認  
 めました何ふしても衣袋の金を探して居たよ相違ありません 村「其様を筈の無い

併し愈々爾と云ふから第一は梅花郎の身軀を檢めれば知れる道理だ若し其金を持って居無い時の無論無罪と云ふ者だ 警「イヤ假令ひ持て居なくとも夫れを無罪の證據といひません探り取て何所かへ隠したのかも知れぬから 村「併し現在死骸を探つて居る所を足下が認めたとあらば外へ隠す暇が有る舞い一蟬澤の持て居る金の拙者が覺へて居る金貨が二百圓ばかりは銀行切手が千圓餘り皆拙者の手から出た者で切手の孰れも百圓の爲替で黒い皮の手帳へ挟んで居たサア檢めて見たまへ 警「イヤ檢めた所が今夫を持て居る筈の有りませぬ直又何所かへ隠すのが曲者の常ですから 村「併し夫を持て居るなら何も證據の無いで無いか證據の無い者を疑つて拙者の家で詮議するといひ拙者も於て承知が出来ぬサア檢め給へと嚴しく言ひたれの警部の澁々立てて巡査は合圖し梅花郎の衣囊を探るゝ個の如何も其中より黒き皮の手帳は百圓の爲替を十餘枚挟みたる者出たり殊々表紙より金字を以て蟬澤の姓名を記しあり蟬澤の手帳は相違あり梅花郎の先刻特々蟬澤より此手帳を預りたれど今まで意外の事のみ續きし爲め自ら其事を忘れ居たり今斯く引出れて始めて思ひ出し早く

第 八 回

も我辨解の出来難きを知りたれば顔色の代るまで打驚きたり警部の最誇り顔も其手帳を持て伯爵の前より出し「ソレ御覽じろ此通りです」と云へば伯爵も唯呆るゝのみ言葉さへなし此時梅花郎の漸く心を取鎮めつ警官は打向ひ「イヤ夫の先程蟬澤が私しよ預けました夫を今までツイ忘れて」 警「フム死人に口が無いと思つて好加減の事を言ふナ」と叱り附けたり今まで熱心は梅花郎は最負したる村津伯も今の疑ひの雲は包まれ「ア、汚らひしや」と云ひぬばかりの目附にて梅花郎を眺めしが又も警官に向ひて「警官今の何とでも足下の職掌通りとするが宜しい拙者の最早や此様か人は關係の有りませぬ」と云ひ切りたり此時横手ある垂幕の後まで誰やらん女の氣絶する如き聲「ワン」と聞へ續いて其身軀の倒るゝ如き音トシント響きたり

垂幕の後に氣絶して倒れたる女の誰ぞ言はずとも知る小枝嬢なり嬢の先程より梅花郎の身の上を氣遣ひつ息を凝して調べの様子を伺ひ居たるも今梅花郎の衣囊より蟬澤の手帳の出るを見又今まで梅花郎を辨護したる我父までも之に驚き梅花郎は關係

さしと云ひ切りたるを聞き餘りの事と思ひ迫りて我知らず氣絶したるなり斯く嬢が倒るゝ物音人々の驚きて振向きしが中にも警部の聞耳立て「ヤ、彼の垂幕の後ろに誰か立聞を仕て居ますと言ひたり」村津伯の座を起ちて垂幕の所へ行き「オヤ誰かと思へば小枝嬢か」と云ひつゝ膝を抱き上げて「コレ小枝何ふしたのだ」と呼返す聲の通じたるか嬢の愛らしき目をバチと見開き怪げ又邊りを見て先づ其眼を梅花郎に注ぎしが此時心の猶ほ夢中な在りて見へ我を忘れて聲を發し「イヤ阿父さん彼の郎でありませんアの人罪の無いのですと云ひたり」此有難き言葉を聞き梅花郎が心の裏に如何ぞや我身も纏へる恐ろしき疑ひの打忘れ宛も天よも登る想ひすあらん伯爵の娘を痛める一心をれば此言葉の氣も遣かずコレ「誰れか居ないか下女に何した撫子の何して居る」呼立つれど撫子の既に床臥入りしと見へ返事さへなし巡查の此有様を見兼し如く「イヤ私が呼で参りませう」と云ひながら垂幕を掻き分けて其内に飛入らんとするも此時内より殆ど突當らんばかり又出来る者こそ有れ誰かと思れば此小枝嬢が異母の姉として今年廿歳と聞えたる彼の初音嬢あり嬢

の驚き迷ふ人々に其の見向きもせず先其鋭き眼は梅花郎の顔を信と眺めたり抑も初音嬢の小枝嬢の姉とい言へど其母の異なるだけ又姉妹の親み薄く日頃二人の間柄の好らぬ事の梅花郎までも既に聞知れる所あれば梅花郎の今鋭き眼は見詰られ早くも一種の恐れを抱きア、初音嬢の其妹を憎むの餘り我れを迄も憎むと思ひ此時を幸ひとして我と小枝嬢を辱しめん爲よこそ斯の出来りしなれど心の裏に安からねど詮すべとて無き折あれば頭を垂れて黙然たり此時の有様を書き書くも寫し難し初音嬢の猶も梅花郎の顔を眺めたる儘もて其父の言葉を掛「阿父さん何事です」と問 村「何事して見れば分るだらう小枝が病氣も成たのだ」初音嬢の賤みの調子もて「オヤ小枝が茲に何して居ました私に最ふ疾くも寐た事と思ひました」小枝は此際信度心を取直し「ナ、阿父さん病氣でも何でも有りませんよ」と云ふを初音の開答がめ「オヤ病氣で無ければ早く居間へ歸つてお寐なさい此夜更は何しよ来たへお前の来る所での有りません 小「何だか騒がしい聲がしたから何事かと降て来て垂幕を開いて見たら此有様で喫驚しました」と云へば初音嬢の口の中にて「へん喫驚する

風か」と呟やきて又聲を高くし「お前此方どの唯一度か二度か一緒に踏舞をした丈  
 での無いか夫れたのは氣絶する程驚くとい先ア一實がある事子オホ、」と笑ひたり  
 笑の裏も劍ありどり是等をや云ふならんと梅花郎の人知れず心の裏もて戦きたるも  
 外の人々の別も氣も附かず唯小枝嬢の氣絶に心を奪われ互に顔を見合すのみ其中も  
 も警部の又悪い所へ令嬢の出來りし者かな其入行くを待ちて再び詮議を初めんとて  
 手持無沙汰も待ち居たるが初音の猶も四邊を見廻し「餘り騒がしいから多分此様お  
 事だらうどい思ッたが來て見れば」と言差して後言のす伯爵早くも其言葉の尾  
 よ續きて「騒がしいとして今夜此別荘の外で非常な犯罪が有たのだ一發短銃を放たど  
 云ふから其方よ其音が聞へ相お者だのよー」初「オヤ一發ですか私しの二發聞か  
 ましたよ」との様子ありげな言葉あり 伯「フム二發聞た夫での驚いて誰かを呼起  
 す等での無いか 初「呼起えたとして仕方が有りませせん皆な留守です者夫よ山の中で  
 夜中よ鉄砲の音のするの度々ですから又山番が月夜よ寐鳥でも射つのかと思ひまし  
 た警部の之を聞きて進み出で「貴嬢に全く二發も聞かされたよ相違ありませせんか

初「ハイ全く二發聞きました其間が凡う十分も有りましたかー尤も初めの二發が鳴  
 て間も無く誰だか強く戸を叩く音が仕ましたから何事かと思から首を出しましたか  
 其人の擔牙は隠れて見へませせん其内は叩き止まりましたから又素の椅子は歸りました  
 が暫くして二度目の音が聞へました 村「夫から起て御て來たのか 初「イエ夫か  
 ら暫くすると貴方の歸った車の音が聞へ引續いて下僕の者が參り唯今球突場へ罪人  
 を引入れたと申ますから何事かと思つて降て來ました私しの小枝が竝居る事どい思ひも  
 寄らず殊に此方（梅花郎）が調べられて居やうどい思ひませんでしたーエ阿父さん何  
 の調べです 村「其方もアノ蟬澤と云ふ人を知て居るだらう；アノ人が殺されたの  
 サ」初音のびっくり「へ、蟬澤さんが殺されたのですか」と驚きたれど唯純粹の驚  
 きよて別は悲しむ様子の無き故梅花郎の心の中よて扱ひ蟬澤が初音嬢は悪想され居  
 たりなど云へる風説の全く偽りあらんと思ひたり初音嬢の又も問を起し「オヤー」  
 夫で此梅花さんが人殺しの疑ひを受けたのですか其様な馬鹿氣な疑ひが有りませす者  
 か」此意外なる言葉を聞き梅花郎の驚きと嬉しさを震ひ上れり梅花郎の先程より初

音嬢が定めし我を憎み我罪の益々重く爲る如き事を言出すならんと思ひしよ左の無  
 くて其言葉我を助けんとする様あるの如何なる仔細ぞ深き心の分らねど兎も角我爲  
 めよの得難き一言と疑ひあがらも喜びたり聞き居る小枝嬢も同じく怪み日頃意地悪  
 き我姉が斯る事を言出すとの深き計の有りはせぬかと私かよ恐れを抱きし無理も  
 無き次第ぞかし初音嬢の梅花郎と小枝嬢の様子よの氣も留めず猶ほ何やらん云ん  
 とする如く警部の前へ進み出たり

第九回

姉ある初音嬢の猶も警部の前へ進みて「警部さん此方(梅花郎)の名譽ある貴族から  
 父伯爵へ紹介の有った紳士です斯様な紳士を捕縛するよの定めし仔細も有りませう  
 が併し夫の間違ひです其譯を申しませうか」夫又貴方の私しが二發短銃の音を聞た  
 のを疑ひますか「警部の且驚き且怪しむ様子よて「へい先ア疑ふ様者者有ります  
 梅花郎の曲者を見認めて唯一發放つたと云ひますが併し其曲者を見た人の無いの  
 ですから」眞實外よ曲者が有たのか夫ども自分が曲者か分りませせん 初「イヤ其曲

者を見た者が有りますとも現し私しが見ましたので「丁度窓を明けて見て居る中曲  
 者の林の中へ逃て行きました」意外の言葉よ警部の驚き「ヤ夫の全く確かな事です  
 か 初「固より相違ひ有りませせん 警」での貴嬢の其時此梅花郎をも見ましたか  
 初「イヤ梅花さんの前云ふ通り見へませんで 警」シテ曲者の何の様も身姿をして  
 居ました 初「月明りの事ですから身姿など分りませせん夫よ迂闊りと見て居たの  
 で唯其後姿を見た丈けです」嘘か誠か知らされど警部の争ふ言葉も無く最不満足  
 の躰たらくよて「併し私しよ左様仰有つた丈けの了ません貴方の判事の前で夫だけ  
 の言立が出来ますか 初「出来ますとも判事の前でも大統領の前でも見た事を見た  
 と云ふのよ少しも憚りの有りませせん何時でも呼出が来れば直よ出て行きます」とい  
 男も及ばぬ氣象と知らる此言葉を聞き先程より梅花郎を疑ひ初めし村津伯も其疑ひ  
 稍や解けし如く口の中よて「フム夫の初音の云ふ通りだ外よ曲者が有るのだらふ小  
 西が己よ不正の人を紹介する筈が無いテ」と眩やきたり 警「イヤ夫でも未だ一ツ  
 大切の証據が有ります輝澤の手帳が銀行爲替を挟んだ儘で梅花郎の衣囊よ入て在る

と云ふのが第一、怪しいと云ふ者だ。伯「だッて夫の蟬澤が自分、預たと云ふで無いか。警「夫が死人よ口おしで、併し梅花郎の眞實預かつたのゝら蟬澤の後を踪けて来る筈が無い」此時梅花郎の口を開き「イヤ蟬澤の身の上を氣遣ッて若も事が有れば助けて遣な積りで踪て来ました。梅「フン口賢く証據も無い事を、夫で其方蟬澤が茲へ来る事を知ッて居たのか。警「蟬澤の森の中で誰か、逢ふ約束を仕て有ると云ひました」伯爵の言葉と添へ「フム夫の爾だらう此山の中に、随分娘小見も有るから蟬澤の夫は逢ふ積りで来た所を其女の戀の敵は狙われたのかも知れない。警「併し戀の敵あら金まで奪ッて行く筈が無い蟬澤の衣裳は在った金貨だけの確か、紛失して居るのだから。伯「爾の云へ無い假令ひ戀の敵でも金の欲が無いと云ふ筈の無いから。警「併し左様な問答の無益です私し、最ふ梅花郎を判事は引渡すだけの職務です」判事は引渡すと聞きて初音嬢の又も進み出で「オヤ私しが現は其曲者を見た」と云ふのは貴方の未だ梅花郎を有罪と認めますか。警「イヤ賞嬢が曲者を見た」と云ふだけで、未だ証據は成りません。初「私しが曲者の名を言ても了

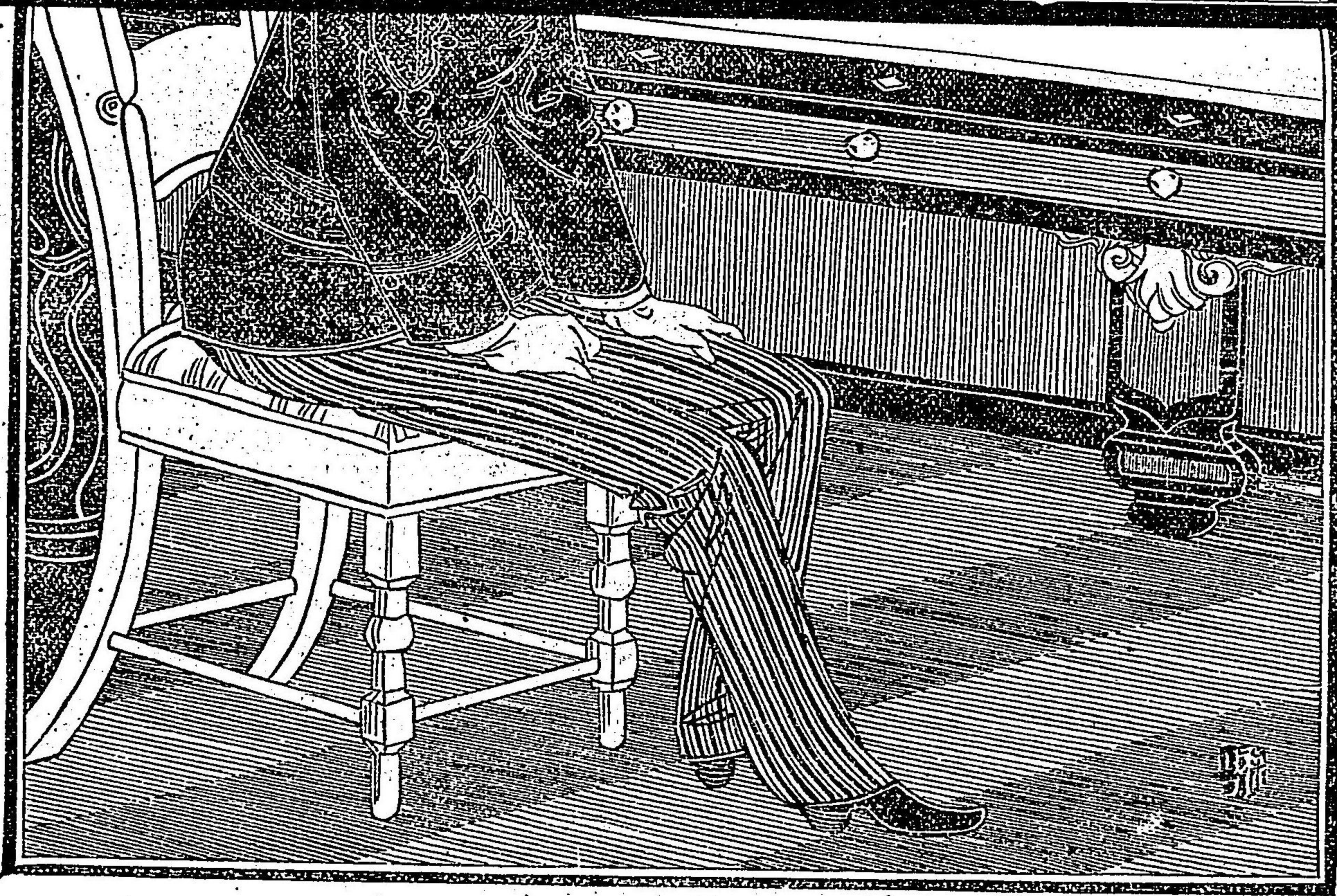
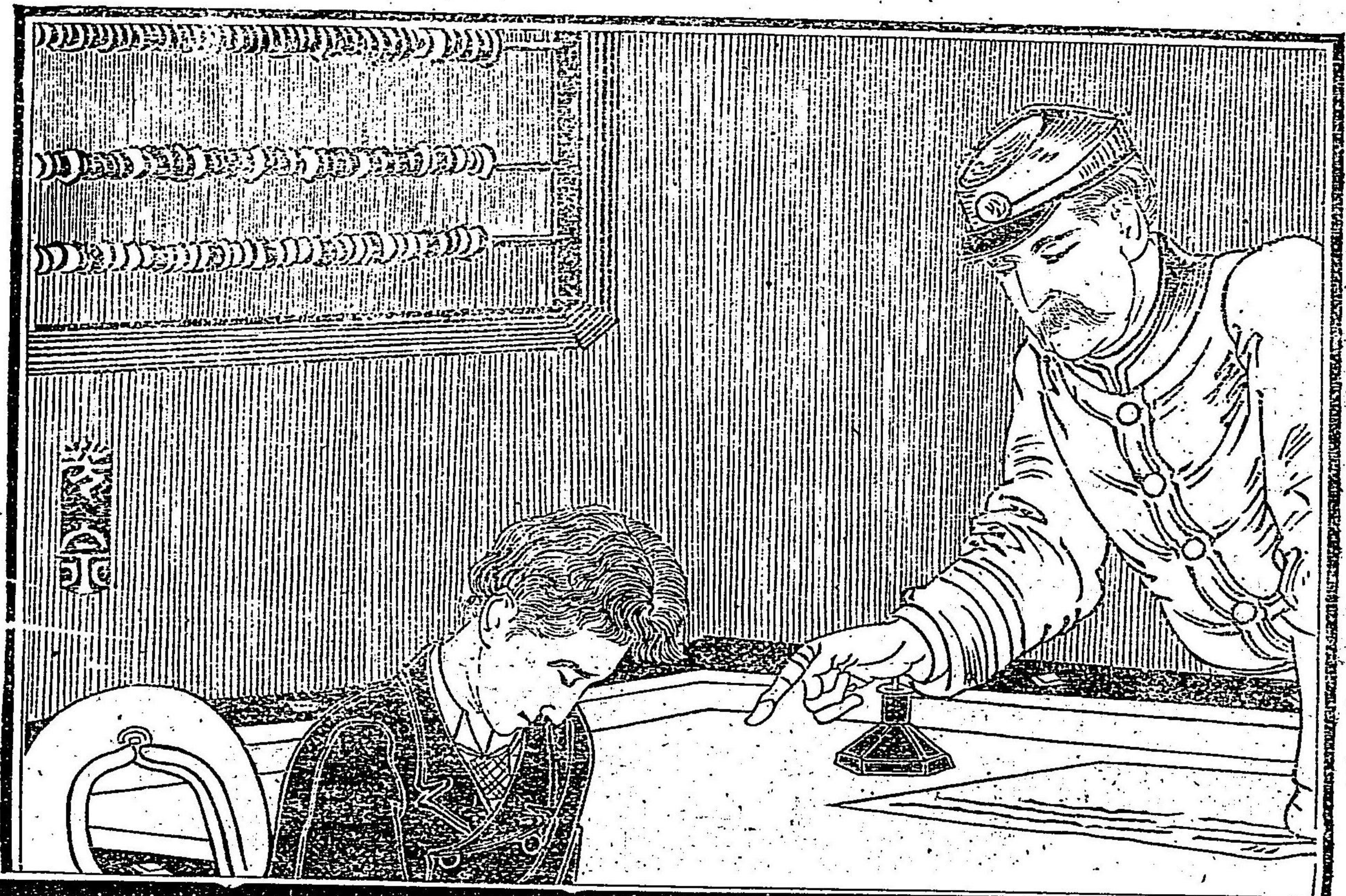
無いのですか。警「ハイ名前を言た、けで、了ません其曲者が捕られて愈々自分と相違ない、と白状した上で無ければ梅花郎の疑ひは解けません」初音嬢は猶ほ撓ます。「併し蟬澤と云ふ人の随分他人は悪まれ相を譯が有りませす若し警察官が其譯を知れば決して梅花郎を疑ひませすまい」と云ひながら又父又向ひ「阿父さん小枝を居間へお遣ささい此様な事を小枝に聞せて、能くありません」此言葉を聞き根が物柔らかき小枝嬢は少し氣分の快くありしを幸ひ自ら身を起しつ様子有り氣は梅花郎の顔をナラと見て其儘我室よ退ざたり此時若し小枝嬢が梅花郎の顔を注し眼の中の心を讀まひ「御身の罪なき清き心の妾能く之を知れり妾は永く御身を愛するぞ」と云ふ意味を含み居たり梅花郎は此意味を悟りて人知れず胸は嬉しさの溢るゝを覺へたり初音嬢又伯爵に向ひ「阿父さん小枝が居無いかから言ますがアノ蟬澤の小枝の腰許と密會て居るのですよ」伯爵は打驚き「腰許との撫子か。初「ハイ撫子の此山の奥に居る松脂臘の息子と許嫁は爲つて居ます夫だのよ其許嫁は負いて蟬澤などよ思ひを掛けた者ですから其息子が立腹して蟬澤を狙つたのです」實はや女の舌より劔



あり斯る容易ならぬ事柄を憚りなく明さま言出すと大膽と云ふも仲々あり伯  
 夫で其方確か其松脂取の息子とやらを見認めたのか 初「イヤ見認め仕ませ  
 んか撫子が夫と許嫁よなッて居る事も又蟬澤と忍び逢ふ事も全く確か有りますか  
 ら多分爾だらうと思ひます」伯爵の暫し考へ「イヤ其様事無の撫子の年似合  
 ぬ心榮の好い女だ」と云へば警部も其尾は續き「左様撫子と云ふ女の先程海岸から  
 歸りました私にも其様子を見若しやと思ひ死骸の傍へも連れて行きましたが決して怪  
 しい様子有ません若し蟬澤と譯でも有れば死骸を見て何と顔も現はします」斯  
 く問答は餘念も無き折柄此別荘の入口へ進み來る一輛の馬車あり馬車の外よて  
 進みを停め内より立出るは是れ警部の使ひも寄り此事を知りて海岸より夜中を冒  
 し現場検査に出張せし西村と云へる若き判事あり判事の馬車より降りて死骸の傍へ  
 立寄り暫く其様子を見たる末球突の室へ入來りしが此判事も兼て村津伯を招かれ迎  
 賓館へ出入せし事ありと見へ初音嬢と村津伯は向ひ丁寧挨拶したり判事此事件  
 を如何に取扱かふや

第十回

梅花郎の今入來りし判事を如何か人かと思ふは是れ我と同じボルドーの地  
 生れし人として姓を西村と云ひ幼き頃より隔てなく交りたる中なれば一入の安心を  
 加へたり西村判事の警部長は打向ひ「詳しい事の君の使ひも聞き能く知て居る實に  
 今夜判事長が來る所だけれと生憎判事長の昨日の朝公用を以て地方まで出張し當分  
 歸らぬと云ふ事だから僕が其代理もあつて茲へ來たのだ尤も來る道で判事長へ電報  
 を掛けて置たから明朝の判事長から何とか返事が有るだらう其返事は由ッて僕が此  
 事件を引受けるか夫とも判事長が歸ッてから自分で處分するか極るだらうと」云ひ  
 ながら更へ梅花郎は向ひ言葉軽く「併し梅花君、君は是から僕と一緒に海岸まで行  
 て貰ふ 梅「素より承知だ」警部長は西村判事が梅花郎を友達の如く取扱ふを見て  
 最不満の躰も「でも貴方未だ梅花郎を取調べる事が有りませう 西「イヤ何も角  
 も使ひの者から聞て知て居る殊も茲に此通り球突場だから茲で調べるの御主人の迷  
 惑だ早速歸らう」と云へば初音嬢は其親切を謝し「西村さん其御注意の誠は難有ふ



「います私しん最ふ確か又曲者が外に在る事を見たのですから梅花さんを疑ひませ  
 んお調べなれバ梅花さんの無罪の直に分りませうから其節に又梅花さんと御一緒  
 是非お話し入ッしやい 西「有難ふいいます私しも梅花郎との少年からの友達  
 で其氣質も知り又梅花郎と蟬澤の間柄も能く存じて居ますからナニ太した事件よ  
 成るまいと思ひます」村津伯の此問答を聞き西村判事の物柔かなるゝ感じ痛く満悦  
 の跡よて「イヤ最ふ拙者の親友から特別に紹介して来た人よ若し不正の事でも有て  
 い誠な氣まじい譯と思ひ獨りて心配して居たが足下の眼力で頓て曲直が分るだらう  
 是で大よ安心した」と云ひたれど其心の中よての初音嬢が未だ孰れども定まらぬ梅  
 花郎よ向ひ輕々しくも又話しよ来いと案内したるゝ穩やかならず思ふ跡見へたり伯  
 爵素より梅花郎を憎むよ非ねど兎も角其罪の未だ定まらぬ者よ向ひ直ぐよ話しよ来  
 れと云ふの貴族の令嬢よ有るまじき振舞ひなり去れば梅花郎も先程より餘りよ初音  
 嬢が我身を庇護ひ確かよ曲者を見たりと云ひ又直ちに尋ね来れと云ひ何か又附けて  
 我肩を持つ景色あるを不審よ思ひ若や其心の中よ深き仔細を蓄はふよあらぬかと

薄氣味悪く思ひたり斯て西村判事の警部と巡査とよ向ひて蟬澤の死骸をバ我乗り來  
 りし馬車よ入れ海岸よ送る可き旨を命じ一同の人よ別れを告げて此別荘を立出たり  
 梅花郎も其後よ從ひ立去らんとする折しも彼の初音嬢と摺違ひしに初音嬢の摺違ひ  
 様早くも梅花郎が耳に口寄せ「貴方登へて在ッしやいヨ私しが貴方を助けて遣まし  
 たよ」と細語きたり梅花郎の驚きて振向きしも初音嬢の早や知らぬ顔よて垂幕の中  
 よ隠れたりア、初音嬢の如何なる仔細あつて斯くも梅花郎よ力を入るゝや「助けた  
 事も覺へて居ろ」とい如何ある心ありての言葉あるや梅花郎の合點行かず且の心よ  
 危く思ひて初音嬢の兼て我が愛する小枝嬢を憎むと聞けバ若しや夫等の事よ付き心  
 の中よ深き巧みを蓄ふる者よあらぬかと空しく心を悩したれば問返さん様も無く  
 其儘判事と共に歸り去れり初音嬢の振舞ひよ如何ある仔細ありや又眞事の罪人の  
 誰なるや梅花郎の此より如何よあり行くや小枝嬢の此後何事を爲すあるや今までの  
 此話しの發端あり是より説出す所を見て此後の事を知り得可し

蟬澤の殺されたる夜より早くも十日の日を経たり其間梅花郎の彼の西村判事の掛り  
 よて式だけの調べを受けたるも外罪と爲る證據も無く唯蟬澤の手帳が梅花郎の衣  
 袋に在りたる隙のみの稍や疑ひしく思へども兼てより梅花郎の氣質と身の上と品行  
 どを知れる西村判事の梅花郎の言立も一理ある如く思ひ深く疑はぬ者も似たり  
 猶ほ蟬澤の死骸をも検査せし其心の臓より短銃の彈出て其彈と梅花郎の短銃の彈  
 どを較べ見るよ其彈の梅花郎の彈より一層小し是も亦梅花郎の疑ひを解く一ツと爲  
 り梅花郎の此次の裁判開期に於て更し判事長より取調べを受くる事と爲り夫までの  
 所保釋を許されて出獄したり去れど梅花郎の心の中樂しからず證據の充分ならぬ爲  
 め一時出獄の許されし者の次回の裁判に於て更し取調べを受くる事と有るからぬ我身  
 よ係る疑ひも全く晴れし者といふに難し殊に様子知らぬ世間の人は誠の曲者の捕  
 りる迄に我を疑ふ事必然なれば假令草木を分てありとも次回の裁判まで誠の曲者  
 を探し出すよ置く可きやと斯く心を定められたる其日より直に曲者穿鑿  
 の事を始めたり去りといふ云へ雲を捕む尋ね者何を手掛りよ如何ある方角を尋ね可き

や心よ一ツの當も無し幸ひよして今より十餘年ほど昔し我幼なき頃我父の許し奉公  
 せし長右衛門と云へる老人今一人の息子と共に彼の山の奥に住ひて松脂獵を業と  
 せり此長右衛門こそ山に住む人を殘らず知り殊に山の様子も詳しければ若し此者  
 よ相談せば意外の便りを得んも知れずと其次の日直ち馬を乗りて宿を出たり去れ  
 ども彼の村津伯の別荘の前を通る何とやら心に進まぬ想ひする故殊更らよ道を  
 曲げ外の所より分登りしが山の案内より諺からぬ身ある故人も有る間人者と四邊  
 よ氣を附けて分入る内彼方の樹影よて人の話し聲聞ゆるよ由り其方へと進み行く馬  
 の足音を聞附てか話し聲の息心と同時く其所より立出来る一人の若者あり年二十  
 四五ある可く兵隊よもして見まほしき太く逞しき男あり梅花郎の之よ聲掛け「此奥  
 よ長右衛門と云ふ者が有ると云ふが前知らなにか」と問ふよ若者の様子ありげ  
 よ梅花郎の顔を熟々見て「之を眞直よ十町ばかり行けば突當りの小屋が長右衛門の  
 住家です」と田舎者よ稀なる正しき言葉よて答へたり梅花郎の一禮して立去らんと  
 するよ若者の又も聲を掛け「旦那私しの長右衛門の息兒ですが貴方の何御用です」

梅花郎の聞きて驚ろき「おや先アお前が長右衛門の息子かへ成る程小さい時逢ッ  
 た一兵太郎殿が大層見違へた私のポルドーの梅花郎だ」若者も嬉しげに「何だか似  
 て居ると思つたから問ましたが一併し先ア存外お早く放免も成て誠にお目出度ふ  
 います」梅花郎の此難有からぬ言葉を聞き「ヤお前が已が半入た事を最ふ聞知た  
 のか」兵「聞知た所での有りません私くしも實の同じ疑がひを受け海岸へ拘引せら  
 れて昨日放免も成りました」梅花郎の先の夜初音嬢の言葉を聞き彼の小枝嬢の下女  
 撫子も許嫁の若者ありて其者の松脂取の息子なりとの事を覺へ居る故扱て此兵太  
 郎こそ撫子の情夫なるか然らば彼の警部必す初音嬢がアノ時の言立を聞きて此兵太  
 郎を拘引せし事ならんと思ひながら「爾か夫の奇妙併しお前も先ア早速放免され  
 たどの何よりだ」兵「イヤ何よりでも有りませんよ覺への無い事一週間も拘引さ  
 れて馬鹿くしい一實の子私しアノ夜アノ別荘の下女を連れて海岸へ買物へ行ッ  
 たのです夫で海岸の小間物店の主人が證人も成て此方の確かよアノ夜九時頃買物  
 へ来たと云ひ立て呉れたから助かつたのです左も無けりやア何時まで置れるか知れ

ぬ所ですと云ふ折しも又も物影より立出る女あり誰かと思れば下女撫子なり撫子の  
 既よ彼の夜より梅花郎の名前を知る者よて殊も氣散じある女あれば梅花郎の前に進  
 みて「梅花さん私しも此人と一所拘引されましたよ先ア警部さんと云ふ者の誰で  
 も手當り次第疑ひます事子エ」梅「夫の仕方が無い役目だから併し私のドレ是  
 から長右衛門の許へ行ふ」と云ひながら馬の手綱を取直せば撫子の其前へ廻り「イ  
 エ未だ貴方も用が有るのですよ」梅「私よ川どの向事だ」撫「アノ子旦那様(村津  
 伯)の最ふ此土地は飽きたから兩人の嬢様を連れてベリゴ一の別荘へ引移り其所よ  
 二月ばかり逗留して巴里へ歸ると仰有ります夫よ旦那も嬢様方も昨日貴方が放免さ  
 れたと聞き今日常りの尋ねて来さうな者だと評して待て居ますよ」梅花郎の令嬢が  
 我を待つと聞き心の嬉しさを堪へざれど撫子が一時の世辭と思へば「夫の不思議だ  
 私しを待つ筈が無いが」撫「アレ彼等事を仰有る旦那爾でも有りませんがお二人  
 の嬢様の貴方の事ばかり仰有つて居ますよ是非お歸りよお寄りささい」と云ひながら  
 少し言葉の調子を低くし「實の子初音様と小枝様と大層仲が悪くて夫で始終初音

様が小枝様をお宥めなさるのですよ夫で今度おとも若しベリゴ一へ引移れば小枝嬢が何の嫌も目もお逢ひなさるかも知れませぬ故私しハ夫が心配で一暇を遣ると云ふのを無理にお供を願ったのです私しが従て居れば大丈夫とい思ひますけれど私しとても女の事何の役も立ませぬ故何ふか貴方の様を嬢様の氣に入つた男の方が時々入しつて影身も添ふて氣を注いで下さつたら何れほど嬉しからふと存じます夫も嬢様も絶へず其事を仰有つてお出ですから貴方何ふぞ今日明日の中は是非いらしつて下さいませ嬢様のお爲ですよ夫も最ふ旦那も初音様も貴方のお噂をして居ますから貴方にお出よされハ何の様も喜びませう」と真心見せて言ひ立たり

第十二回

梅花郎の侍婢撫子より小枝嬢が身の危きを聞き且つ我來るを待つ由を聞き心の直よ嬢が許し飛びも行かんと思へども疑ひ受けたる身も耻ぢて明さまより返事も得せず人殺の本を見出し我身の疑ひを雪たる後より再び嬢が許を尋ねもせめと我胸よ思ひ定め兵太郎と撫子にハ好い加減は別れを告げて長右衛門が家を指し猶山深く分

入れり頼て十町も進みし頃兵太郎の云ひし如く突當りよ小屋ある故茲ぞ長右衛門の住家なりと馬を當りの樹に繋ぎ小屋の内は差窺けハ律義ある長右衛門の内より早くも見て取りつ白髪交りの頭を振立て「オヤ若旦那善く此の穢苦しき所へ入来いませした悴れ聞けハ貴方も飛だ疑ひを受け警察へ引れたとやら能く先ア早く出られませたナ 梅イヤ夫も就て實にお前に聞く事が有つて今日ハ特々尋ねて來たのだ」と云ひながら其家の中へと進み入れば 長お尋ねどの何事です 梅外でも無い私も放免よ成たけれど未だ疑ひが晴れたと云ふでハ無い遠からぬ中よ再び裁判を受ける筈夫までの内ハ誠の罪人を見出さねば第一何の様な事になるも知れず好しんば裁判所で無罪よなつた所ろが世間の人は何時までも私を疑ふ道理ゆゑ何と本統の罪人を見出たと思つてサお前ハ永く山よ住み詳しく様子を知て居るが若し心當りの有る舞いか」と云ふよ長右ハ呆れたる顔よて「ソリヤ若旦那私しハ心當りの有る筈が有ません町よ住む方々の山の者を荒々しい人ばかりと思ひ山の者の毎日鹿や猿を殺して居るから其傳で人を殺すだらふと斯様思ひますけれど此山よ住む者で人

を殺す様も悪人の一人も有ません 梅「イヤサ山の人を疑ふで無い唯お前も開けば山の様子を知て居るから此山への夏もなれば何の様も人が入込むとか或の又何も詮盤をすれば善いとか其邊の心得が分るかと思つて」「イヤ夫の分りません私しの探偵で有ませんから」と最不機嫌に返事したり梅花郎の早くも我身の過ちと悟り成程山に住む人も聞けばとて手掛を得る筈も無く徒爾ら此律義なる老人を怒らせし事の悔さよ切て其機嫌を取直して分れ去らん者として更言葉の調子を變へ「時よ今來る道で兵太郎は逢たが見違るほど立流な男も成たお前の好い息子を以て仕合せだ長右の稍や機嫌を直し「難有い事」皆様が爾云つて呉れます私も最ふアレの逢者な顔を見るのが楽しみで「エ旦那頃までアレも私し又負さつて居ましたが年頃と云ふ者の奇妙者で此頃の最う女を拵らへましたぜ女を「夫で其女と云ふが近々よ主人の供をして「ベリゴ」から「巴里」へ行くとかで兵太郎も其と一緒に都まで行き度と云ます「エ尤も女の方で」一緒に都まで行た所が屋敷の内に奉公して居れば時々逢れる者で無いから「お爺の傍で歸るのを待て居るが好い決して後よ着いて來るかと云ふ

相です「エ旦那女も感心な事を云ふで有りませんか 梅「夫の感心だ一緒に行たどて何も一緒に居られると云ふ譯で無い「夫は兵太郎も行れていお前が寂しからふ 長「イエなよ私し寂しい位ぬ厭ひません若し時から少し宛蓄へた金も有ますから愈々兵太が行くと云へば有つた金の旅費も持せて遣ります 梅「夫ほど子が可愛いのに結構だ世間より幾等も親子で仲の悪いのが有るから「長「可愛いッて貴方子ほど可愛い者の有ません「エ旦那子の爲めから私しの盗賊でも致します盗坊の悪か人殺でも厭ひません」と眞面目に成て述べたれば梅花郎の「ト奇妙なる心を起こし此老人若し蟬澤を殺せしよぬかと思ひたれど考へ見れば今まで律義一方を以て暮したる男と云ひ殊よ短銃など持つ筈も無く假令ひ我身を殺すとも他人を殺す者よあらぬ「忽ち又思ひ直し心の裏に一時たりとも斯る正直なる者を疑ひし事の恥かしく我れと我心を叱りつ話しを他の事に移し稍や時過ぎて分れを告げ又も馬よ乗りて此所を立去りたり是より再び復來し道を歸り行くも何と無く面白からぬば更道は變へ兼て此山の麓に在りと聞くカツヲの湖水へ此序も廻り行かん者と

馬の足を其方へ向け徐々と進む中にも猶ほ心よの罪人の事と彼の撫子が云ひたる事  
 氣は掛れば鞍の上へ頭を垂れ彼れか是かと考へながら四邊の風景よの心も認す空し  
 く馬の通くよ任せ置けうち忽ち向手の峯の方より矢を射る如く馳け来る馬の足音あ  
 り梅花郎の驚きて振向き見るよ一人の婦人駿馬よ打乗り此方を指して下り來れり見  
 れば其馬荒れ狂ひて其儘置かば我馬よ突當ると必然あれ梅花郎の道を譲らんかと  
 思ひたれと徒ら道を譲りて若し彼の乗れる婦人は怪我でも有ての氣の毒あり彼の  
 婦人能く馬を制むる力あるや否やの知らねと見た所での制め兼ねたる様子あれば早く  
 も自から馬より下りて十間ばかり前よ進み道を遮ぎって兩手を廣げ其馬の近づくと  
 待つ中よ馬の我方を正面よ狙ひて進み來れり馬の事よ慣れたる身なれば手早く其  
 轡よ飛附きて抑へ止めたり此時まで乗れる婦人の誰あるやの更よ心附かざりしが轡  
 を取りたる儘よ仰ぎ見れば個の如何に是さん村津伯の長女初音嬢なり我思ふ小枝嬢  
 の姉君あり

第 十 三 回

馬の上の婦人若し小枝嬢さらば梅花郎の喜びの如何ばかりあるや知れざれど小枝嬢  
 と仲悪き初音嬢の顔を見て唯驚くのみ別よ喜ぶ氣色も無し嬢の馬の上より聲を掛け  
 「オヤ貴方ですか梅花さんですか貴方の何故よ私しの馬を留めました」梅花郎の  
 返事よ困り「御免下さい實に此山路を浮雲と存じまして」初音嬢の聲を放って打笑  
 ひ私しが斯して乗て居ると何方も浮雲と言ひますがナニ最ふ幼稚い時から馬の轡古  
 をして居ますから此位の事ハ」と云ひながら廻りを見廻し「併し返って仕合せで  
 した若し平坦な道さらば貴方の唯だお遊なさるばかりで留てり下さいます舞が此様  
 赤所を乗て居たればこり斯ふして轡を取て頂く事が出来たのです」梅花郎の益々返  
 事よ困り「イエ何よ貴方」初「イエ言譯よ及びません其代り貴方を叱つて上る  
 事が有りませすよ貴方先ア昨日半をお出なさつたと云ふよ別荘へ一度も顔を見せぬの  
 酷いじやア有ませんか直よも入ッしやるだらうと待て居ましたのよ」貴方入ッし  
 やら無くて丁ませんよ」梅花郎の此令嬢と永く言葉を交ゆるを好まねど小枝嬢の  
 様子聞き且つ村津伯が我を何と思へるや夫等の事を聞き出すよ又と無き折なれ



此儘よて分るゝも好まじからずと己も亦我馬は乗り嬾の馬と轡を馴べたり 初  
 貴方は非入ッしやいよ夫は私共の明後日からペリゴアの別荘へ引移りますから  
 又ペリゴアの方へも遊び入ッしやい 梅「愈々明後日と定まりましたか夫で  
 の明日伯爵の許まで御機嫌を伺ひませう 初「イエ父の最ふ居ませんよ今朝ほど暇  
 乞の爲めポルドーへ行きましたから明日の晩で無ければ歸りません夫までの私し一  
 人ですハイ私共が別荘の主人です」梅花郎の少し驚ろきでも御妹子も在しやるでせ  
 う 初「小枝ですか 梅「ハイ 初「左様居る事居ますけれど私共の他人も同様  
 です妹どの云ふものゝ異母ですから子唯人前ばかり仲の好い様は作ッて居ますか不  
 断の私し口も開きません」私共の室へ来るかと云ふ事決して有ません」梅花郎  
 の心の中よて貴族の令嬢が斯る事を憚りあく他人の前よて云ふお驚ろきたれど左  
 らぬ躰を示して「爾ですか」と答へたるのみ 初「色んな小説と異母の姉妹が  
 互に憎み合ふ事を書いて有りすがホンに其通ですよ夫は私共の氣質が違ふ者で  
 すから何ふ云ふ譯か小枝の自分より目下の者を好みましてアノ侍婢の撫子を妹か何

その様は致しませす夫もナニ通例の侍婢なら好ののですけれど何ふもお多舌で困ります  
 アノ蟬澤の殺された事なども撫子が様々の事を言觸し蟬澤と小枝と譯の有た様事  
 などを云ふのですから小枝の爲も成せせん私共も異母どの云へ聞捨れ成りません  
 から早く暇を遣るが能らふと父も爾云ひましたけれど父の其様な事を知らぬ者で  
 すから」と云ひ來りて聲の調子を替へ「併し先ア後日はあれ此土地を引拂ふか  
 ら何の様事と言觸しても構ひません夫は小枝も近々の中婚禮をするのですから」  
 小枝嬢の婚禮と近々梅花郎の打驚き我を忘れて「ナニ婚禮」小枝嬢が「近々」 初「  
 ハイ近々」婚夫が出來ます私共も固より似合しい縁組だらふと思ひますし父も至極  
 善らふと云ひますから此上小枝が承知さへすれば最ふ明日も行ひます小枝よ未  
 だ其事を知らせませんがナニ知らせさへすれば先立派な貴族ですから小枝も喜ん  
 で承知するよ極つて居ます」梅花郎の是まで聞きて顔の色全く變れり初音嬢は梅花  
 郎が心の中を知らぬと見へ猶ほも話の歩を進め「貴方もペリゴアへ入ッしやれば其  
 小枝の婿夫も成る人引合せませふ其方最ふ交際社會で誰れ知らぬ者も無い程

ですから貴方も近附なれば心ず良友を得たとお思ひなさるゝ極つて居ます」梅  
 花郎の堪へ兼ね「シテ其方のお名前は何と仰有ります 初「森川子爵と申します」  
 森川子爵と聞き梅花郎の益々驚ろきたり兼て人の噂も聞くは森川子爵といふ放蕩な身  
 を持頼し貴族と云ふも名のみよて少しの身代さへも無く交際社會よても多くの人は  
 爪弾され今で唯村津伯爵唯一人親しく之を交際のみ殊より此人初音嬢が巴里に  
 ある頃嬢と思ひ想ひれし中と聞くは如何なれば初音嬢斯る人を小枝嬢の所夫と爲  
 さんとするや一旦我身の戀慕し者を我妹の婿と定んと深き仔細あくて叶はず夫  
 も通例の人ならんより別な氣遣ふ所も無ければ放蕩な身を持頼し世よも人も捨ら  
 れし汚らひしき此人は清き小枝嬢の生涯を托さんといはれ嬢が一生を過つ者あり争  
 でか之を其儘聞き過す可きか梅花郎の空しく心の中よていきまきたり

第 十 四 回

梅花郎の小枝嬢が近々又婚禮すると聞き殊も其婿君の人も有ふは世間又爪弾さるゝ  
 森川子爵なりと聞き此婚禮こり必ず初音嬢が小枝嬢を憎むの餘り其生涯を誤らせん

と計みし者は相違あり且の先程撫子嬢の身の上を氣遣はしげに語りたるも此事を  
 らんと心の中穩かならず何と加して影ながら力を盡し成る可く此婚禮をも遮り留  
 めん夫よしても猶ほ詳しき事を聞かずより後々の工夫を定め難しと獨り心を悩ます  
 うち初音嬢の又も聲掛「ですが梅花さん斯して徐々歩むほど退屈な者有りません  
 些と走らさふで有りませんか」と未だ梅花郎が返事もせぬ中早く馬の手綱を  
 弛め一散り馳け出せり梅花郎の之を機に歸り去らんかとい思ひたれど猶ほ聞き度き  
 事も有り此儀分るゝの禮は非ずと同じく馬を急がせて後より従ひ走り行くに實も初  
 音嬢の幼き頃より稽古せしと云ふ程ありて女よ珍しき乗手なり殊も山路に慣れし  
 者か崖を横切り倒れたる樹を飛越へあどして一散り進み行く其危きと云ふばかりあ  
 く暫くする中に左しもの梅花郎も六七町後より嬢の影を見失ひたり去れど指し  
 行く道の一筋よて彼のカッパの湖水に相違なければ其方より向ひ急ぎ行きし嬢は早  
 くも谷の底に至り馬より降りて木の根に腰掛け涼風を身洒せり梅花郎も下り  
 て「貴嬢の先ア何故アノ様よ走らせませす實も危ふまひますよ」と云へば嬢の様子も

りげさ眼よて梅花郎の顔を眺め「私しの貴方の心と試さふと思つてアノ通り走らせました貴方も危いのを厭はず私しは従て来ました子一ソレ誰れかの歌は有りませう我を愛すればこそ我後ま従ふなれと一貴方此句を眞事と思ひませんか」若し小枝嬢の口より斯る言葉聞ききたらば梅花郎の如何に嬉がる可き梅花郎の言葉は籠る無量の意味を知ぬ如く唯だ首を背けて「ア、何も好い風です事一 初「オヤ、貴方此句を好ぬと見へます子一人の心の様々だと云ますから夫も無理の有ませんが考へると悲しくなりますワ誰も私しの心を知る者の無のでも」梅花郎の唯禮を亂さず軽く其言葉は頷首のみ 初「エ本統ですよ母が無く成てからの私し獨り捨物です是から思と妹小枝の身の上が羨しいと思ひます小枝の森川子爵は慕れて一私しとどの其様も方も無く最ふ此世の中が詰らないと思ひます」梅花郎木石に非ず斯まで聞て何ぞ其心を悟らざらん悟りて見れば茲まで従ひ來りしを悔ひ其儘立去らんかと思へども今若し嬢を怒らせて其怨み必らず小枝嬢が身掛り取返し附かぬ事ともならん如何にせば好らんかと空しく首を垂る、のみ嬢の梅花郎が返事をき

を見て自分の遣ひを恐る、者と思ひしが更な言葉を添へ「私しの心の誰も通じませんよ父の私しが廿歳もあつて未だ婿夫を定めぬを見て初音の身分の高ひ人で無ければ氣に入らぬと見へるなど時々言ひますけれどナニ身分などの何とも思ひません我愛する人が我夫所だと思つて居ます巴里に居る時なども折々窓から往來を眺めて下々の若い女が木綿の被服を着ながら想ふ男と手を取て誰れ憚からず睦む相ま歩行いて居る所を見ると最ふ身分などの要ありと思ひます身分の有る爲は我思ふ事も人への通ぜず一私しから見ると未だ妹に使れて居る撫子でも餘ッぽと仕合ですワ松脂取の息子を我自由な婿夫と定めて一其婿夫は人殺の罪が有るかも知れませんけれど其様を事の構いの仕ません私しでも其通りです我が思ふ男あらば假令人殺しの疑ひを受けやうとも其外何様を罪が有ふとも私しに及ばずながら辨護も致しますナニ心は眞事の愛さへあれば世間の人が何と云はうが其様を事を厭ふ様私しでは有りませんよ一エ貴方貴方の爾で有りませんか」梅花郎の答る所を知らず如何なる罪あるも及ばずながら辨護すると云へるなどの敵而我身は打附けて悟れがしと擡

口説く者ぞとて思へど心無き身の何と返事を爲さる可き是にて見れば先の夜我が耳  
 よ口を寄せ、「私しが助けて上ましたよ覺へて在ッしやい」と云ひたるも此事なり其  
 心の御身若し妾を愛せずの妾直に御身が罪を訴へん」と云ふも同じ思へば恐ろしき  
 心かきと猶ほ顔垂れし顔を擧げも得やらず嬢の益々摺り寄ッて「貴方何故其様は黙  
 ヲ居ます何と仰しやいなエ貴方何も言ふ事が無いのですか」今のは是れ絶命絶命  
 なり梅花郎の思ひ切り假令ひ此後如何なる怨みを受やうとも一思ひは言斷りて充分  
 お叱嬌め呉れんと既よ口まで出たる折から彼方の山影より誰やらん乗來る馬の足音  
 したれば此幸ひと身を起し「貴嬢誰だか参りますよ」嬢も同じく其音を聞きしと見  
 へ「オヤ」と云ひて暫し其耳を澄せしが「此様を所を他人に見せるも及びません今  
 日の此切りでお遣と致しませう併し貴方必と入ッしやいな入ッしやらねば怨みます  
 よ」と云ひながら立て馬よ乗りたれば梅花郎の宛も虎の口を逃れたる思ひを爲し同  
 じく馬よ乗りて立分れたり

第十五回

誰やらん乗來る馬の足音に驚き初音嬢が立去りたる後又梅花郎も亦馬よ乗り其所を  
 立去らんとする折しも其人の早や彼方の山角を出て梅花郎が方よ進み來れり誰かと  
 見れば是も少年紳士として曾て迎賓館にて梅花郎と言葉を交したる事も有る人なり  
 左れば梅花郎の立去りながら二三間離れて其人は向ひ軽く黙禮を爲したるも其人  
 の宛も梅花郎との氣附ぬ如く知らぬ顔にて馬の進みを曲げ去りたり此方より禮を贈  
 るも先より答禮の有らざるに誰しも心持の好らぬ者あるも況て梅花郎の世間の人  
 猶ほ我身の罪を疑ひ居るからんと夫のみ心よ掛る身あれば取分て心を悪くしや、彼  
 れ我顔を知りながら知らぬ振にて道を曲げたるの我を汚らんとしと思ふ者あり個の彼  
 れ一人よの非じ世間の人皆我れを汚はしと思ふよ由るあり一人の行ひの以て世間の  
 様子を察す可しや、我れ等の間違ひより今の世間にて顔を背けらる、身と爲りしか  
 左りとの知らず今までも身よ罪なき事を頼みよし世間の評を聞かざりし事の鈍まし  
 く世間既よ此くどさらば村津伯も猶を我れを疑へると必然なり撫子と初音嬢の口先  
 を聞き伯が別荘よ尋ね行かんと迄よ思ひ居たるに返すくも我誤りあり此上の何の

顔上げて我思ふ小枝嬢の父君も逢る可き此疑ひの至く晴れ世間の人我を今までの清  
 き梅花郎ぞと思ふ迄に此蒼蠅き土地を去りて外國までも旅す可しと斯く思ひ結ばれ  
 つ勇氣も無く海岸の我宿も歸りたり既に外國旅行と定めしから一日も猶豫する事  
 なし今夜の中此地を立ち先づ巴里へ行きて夫より瑞西へ行かんものと胸の中思  
 案しながら我居間へ入り見れば卓子の上一通の書状あり手を取り上るさへ氣の  
 進まねど所在も無く取上て讀とも無く其上封を讀む梅花郎様伯爵村津より」と有  
 り村津の二字氣を取直し封切りて讀下すよー「梅君御身が無事と出獄せしを聞き  
 御身を知る者の一人として喜ばざる無き中拙者ほど其喜びの深さい無し拙者の  
 實も喜び極つて雀躍するあり拙者が一時殆んど御身を疑はんと爲したるに實は是れ  
 拙者が一生涯の疎忽今更ら御身も對し申譯さし御身の潔白の素より疑ふ所なし夫を  
 疑はんとせし拙者の罪を御身幾重も宥され度し心廣き御身のことされば既に拙者  
 の罪を赦せしからんとし思へど猶ほ拙者は安心せしむる爲め拙者の許し尋ね來れ拙  
 者の明日當地を出發してペリゴアの別荘へ移る故ペリゴアまで尋ね來れペリゴア

是れ御身を拙者へ紹介したる親友小西男爵の住む所非ずや拙者の別荘の小西の別  
 荘と隣り來れ必ず來れ家内一同御身の來るを待つ者あり」と有り此信實ある招待  
 狀を讀み終りて梅花郎が失望の稍や回復し「是ほどよ言ふから行かぬも悪からるか  
 ど口の内よて吐きながら猶ほ此手紙を捻り廻す中卓子は載せたる狀箋の下猶ほ  
 何やら手帳の如き者あり何心なく取上げ見れば果して一冊の最小き手帳なり通例  
 の手帳よりあらで貴婦人令嬢が舞踏などの時我と共に躍る可き男子の名刺を挟み或  
 り其名前を記す者あり表紙より金字よて「S.M」の二字を記しあり「S」の小枝嬢の  
 頭文字「M」の村津の頭文字なり村津小枝嬢の手帳より非ざるか斯く心附くと同時く  
 自ら制し得ぬ程の嬉しさを感じ顔も嬉し氣なる笑を現し先づ其中を開き見るよ最初  
 のページよ「七月十九日の夜迎賓館よて」と記しあり七月の十九日の梅花郎猶ほ忘  
 れもせず初めて小枝嬢と手を携へて舞踏せし夜あり其下よ「梅花郎」と記せり今疑  
 ふ可くもあらず即ち小枝嬢の手帳なり一枚開きて次を見れば「七月廿三日の夜」と  
 有り廿三日の梅花郎が二度目躍りたる夜あれば茲も我名前を記しあるかと眼よ

一際いちげんの力ちからを入いる、又また茲こゝよ「梅花郎」と記しさずして「あの人」と記しあり「あの人」と誰たれぞ我わが事ことあり小枝嬢こゑぢやうの心こころの中うちで我われを「あの人」と定さだめたるか「あの人」と記しせし心こころの譯わけ分わからぬと梅花郎うめがらうの此この三個さんごうの文字もじを見て天てん上のほる心地こころちしたり又また其次そのつぎを開ひらき見みれ「九月十一日」とあり九月十一日しゅうがつじゅういちにちの即すなはち今日けふも「あの人」と記しせるやと見みるよ「あの人」といあらざ「ペリゴ」へ來きたれ來きたて妾めかけを救すくひ給たまへ」と記したり梅花郎うめがらうの一目めに讀よみ盡つくして思おもはず嬉うれしきで飛と立たたりア、小枝嬢こゑぢやうの我われを力ちからと頼たのむ者ものなり今いまの其その姉あね初音嬢はつねぢやうの計はかり事ことは落おちんとし身みの危あやしきを知しりて我われを救すくひを請こふ者ものあり「來きたれ來きたて妾めかけを救すくへ」とい言葉ことば短みじかけれと其その心こころの長ながき村津伯むらつぱくの手紙てがみより毛切せつなり千金せんを擲なつとも此この短みじかき言葉ことばの買かひ難がたし梅花郎うめがらうの今いままでの失しつ望ぼう打うて代かり「行くとも行いかなくて直すぐ行くぞ」と我われ知らず三言さんごん重かさねて獨言ひとりごたり

第 十 六 回

小枝嬢こゑぢやうより招まねきを受けて梅花郎うめがらうの喜よろこびは堪たへず直たちペリゴへ行いく事ことは決けつ心しんし其その夜よの中うちは大旅館たいりやくわんを立出たちいでつ一先まづ我郷里わがきやうり歸かへり都合ごうごは由よれ小枝嬢こゑぢやうを送おくりて巴里ぱりの都みやこまで

も行く積つりと爲なし充分じゅうぶんの旅費りよひを調ていへ之これをペリゴ及び巴里ぱりの銀行ぎんかよて受取うけとる可べき爲か替せ組ぐみ翌日よくじつペリゴへ急いそぎたりペリゴの田舎いなかに在ある一都會いっごわいよして固まより巴里ぱりよ較くらぶ可べくも非あらざれど其その繁華はんかなる亦田舎またいなかとして賤いやしむ可べき非あらず俱樂部くらぶも有あり芝居しばも有あり奢おごりを極まむるの道みちとして備そなはらざるあし梅花郎うめがらうが此この町まちに着つきたるは凡ひる日の暮くる頃ころなりしが村津伯むらつぱくの別荘べつさうの町まちより二里にりばかり離はなれたるメシナクと云いふ所ところに在あり初はじめて梅花郎うめがらうを伯爵はくしやく引合ひきあせたる小西男爵こにしだんしやくの別荘べつさうも亦また其所そのところに在ある由より梅花郎うめがらうの先まづ小西こにしと逢あひ小西こにしと共ともに伯はくが家いに到いたる爲ため直たちメシナクへ行いかんかと思おもひたれど兼かねて小西こにしの毎夜まいやの如ごとく俱樂部くらぶへのみ入いり込こむ人ひとあれば其その別荘べつさうへ行いくより俱樂部くらぶへ行いくこゝ近道ちかみちあれと斯かく思案しあんを決けつしたれば直たち俱樂部くらぶへ入いり行いきたり梅花郎うめがらうのポルドーの人ひと云いへ兼かねて此地このちへ屢々しばしば往來おうらいし其その俱樂部くらぶの地方會員ちほうかいゐんよして今猶いまなほ怠おこたらず會費かいぎを納納め居いる事ことあれば遠慮えんりよも無なく其その館内くわんないに入り行いきて其その許ところと見渡みわたせど小西こにしの影かげの見みへぬ故ゆ切きの未いまだ宵よひあるより彼かれ未いまだ來きたらざるか然さらば夫おとれ迄いたの所ところ先まづ歌牌室かぱいしつに入りて待まちんと其その室むろへ入いり行いくよ茲こゝの數多あまたの紳士達しんし卓子たけこを取圍とりかこみて勝敗しょうばい餘念よねんなし中なかより

梅花郎の顔を見て黙禮するもあれも俱樂部とい一種の無禮講よして来る者も去る者も挨拶せざる常なれば梅花郎も別々會釋する所無く無作法に卓子の傍に進みたり見れば人々の争うふの歌牌よ非ずして賽の目あり歌牌よての手緩しとて斯くの賽を弄りぶかる可し其堂親を誰かと思れば梅花郎が今まで逢ひし事なき紳士よして年正は三十ある可く色白く鼻高くして口の上見事なる八字の髭を蓄はふるおと一廉の好男子なれど梅花郎の何となく憎々しと思ふ氣を生じたり去れど已れも素より好まざる道よ非ねば梅花郎の人々の後ろより手を差延べ幾等の金を張りたるは此時堂親の傍に在りたる一人の紳士の梅花郎の顔を見て打ち驚き「イヤ梅花が好い所へ来た君一ツ堂を取りたまへ先ほどから遣て居るけれど僕に負て了ない堂が續れば運も替るだらふ」と云ふ其傍より「夫が好らふ」と賛成する人も有り現は今堂親を務むる彼の好男子も「爾したまへ」と云ひながら賽を出したれば梅花郎拒む心も無く人々の間へ割て入り彼の賽を受取りたり西洋の賽遊びの堂親の傍はらゝ賽取りと云へる者あり賽取先づ賽を取り上げ之れを箱に入れて堂親は渡し堂親又之を振て卓子の

上は振出すあり帝皿よて伏る者とい同じからず梅花郎の賽を受取り式の如く賽取りよ渡し賽取之を箱に入れ又梅花郎も返したれば梅花郎の受取りて將に振出さんとするよ傍ある一人聲を掛け「サア初めてだから能く振直して〜」と言ふ梅花郎の其意は随ひ荒く振りて振出せし一ツの賽の卓子の上よて一點を示し一ツの卓子の外よ出たり斯ある時の勝負さし故賽取り早くも俯向きて落たる賽を拾ひ上げ「オヤ是も一點を示して居るせ一點と一點の重一だ重一の親の儲だから最少しで險香所さ」と云ひたり西洋の法よて重一の親の得と爲しあるより此人即ち斯の云ひたるなり梅花郎の念の爲とて二ツの賽を我が掌中よ載せ人々の前よて振り見るよ不思議や此賽幾度振るとも必ず重一にして其外の目に出ず梅花郎の益々怪み「コレは不思議だ」と云ふよ前の堂親問谷め「夫は俱樂部の賽だから悪計の有る筈が無い併し怪しいと思へば取替るが善らふ」梅、イヤ取替へるだけで了ません二ツよ引分つて試験します一同の今まで熱心よ勝負を争ふ折なれば斯る問答よ時を費やすを無益と思ひ「イヤ其様を暇に無い早く賽を取替るが善らふ」と云ふも有れば「イヤ賽を止めて歌

牌は仕よう」と云ふも有り梅花郎の一同を制し「イヤ之を試験すると云ッても直ぐ  
 は此場での出来ませんから皆様の外の賽でも歌牌でも今までの通り勝負を為さい賽  
 を検査するよ夫々の規則が有りますから今夜の此賽を封じて仕舞ひ其封目へ書記  
 の印を捺せ規則通り私しが預ります夫で明日でも明後日でも七人の委員を撰び委員  
 立合の上で鏢割ませう」と云ひながら其賽を包まんとするよ今まで堂親を務めたる  
 彼の好男子の少し怒りを帯び「夫の失敬だ僕を疑ふのだ」「君の僕を以て不正の賽を  
 使ふ者と云ひますか 梅「ハイ此賽を疑ひます」「好男子の梅花郎を輕蔑する如くよ  
 セ、ラ笑ひ「宜しい疑ふとあらば僕も男子だ明晩の二人の友達を撰んで君の來るの  
 を待ち受けやう」と云ひたり二人の友達を撰ぶとの暗に決闘せんと促す者あれば決  
 闘を以て名を知られし佛蘭西人の風として梅花郎も後への引かず「宜しい夫の僕  
 も早速介添人を拵へよう」と云ひつゝ、賽を我衣囊に入ると、よ一同の左までよ此賽を  
 疑ひず又前の堂親を疑ひぬ者と見へ梅花郎の肩を持たんとせず「先ア其様お事の  
 後よして早く勝負を初めやうで無いか」とて又も孰れよりが賽轉を取來り平氣よ

て勝負を初めたり梅花郎の我れを助けんとする者なきを見て不平堪へず賽を衣囊  
 に入れたる儘よて此所を立出で更に新聞室に入り行けば我が尋ねる小西男爵何時の  
 間よか茲よ來りし者と見へ餘念も無く毎夕新聞を讀み居たりア、梅花郎の如何よ決  
 闘するや又其相手ある彼の好男子とい何者あるや

第十七回

圖らぬ事より決闘の種を播きたる彼の梅花郎の新聞室よ入りきて小西男爵に逢ひた  
 れバ之よ介添を頼まん者と其傍らに近附くよ小西の早くも梅花郎の顔を見て讀掛け  
 し新聞を下よ置き「イヤ梅花君能く來たナ實の最り來るだらうと今朝も村津伯と囃  
 をした誠よ宜い所へ來たよ明日の伯爵が其所有の山林で鹿獵を催ほすので僕も案内  
 を受けて居るのだ君が來れば早速明朝同道して獵場で伯爵よ逢ふ事よ仕様ナニ獵  
 の整束の僕の甥の品が一組不用よあつて居る甥と君との丁度背恰好も同じ事だ能く  
 似合ふよ極つて居るから好都合だ夫で明夜のメンナリの伯爵が別荘で泊るとして  
 ナニサ二人の令嬢も君を待て居たよ爾さ一寸と君の様子が好きから直よ思ひ附れる



所の感心だ若い中よの爾無くて了さいテ僕の様は最う四十八も成ての令嬢と思ひ附れやうと云ふよの仲々骨が折る何しろ明夜の伯爵の別荘泊るのさ 梅「イヤ男爵僕の明夜是非此俱樂部へ歸らねばあらぬ事が有ります 小西「ナニ此俱樂部へ歸る一歸ッて又歌牌でもする積りだナ歌牌よりの令嬢と談話でもするが面白ひぜ 梅「イヤ爾じや有りません唯今歌牌室で容易ならぬ事を初めまして 小「ナニ容易からぬどの分つた旅費を負て仕舞たナ旅費位僕が何ふでもする何だハ男子が其様な詰らぬ事を僕ぞの君の親爺が生て居る時十萬圓の借金した事が有るハ負たから借て置け借て置け夫が出来なきや勝負事を好て仕舞へ 梅「イヤ其様も事での有りません賽の争ひから決闘の約束をしましたで」小西「驚き」ナニ決闘を一來る早々から早や決闘か夫の餘り氣が早過るじや無いか全躰相手の誰だ 梅「知らぬ人で 小「馬鹿々々しい知らぬ人と決闘をする奴が有るか名前も聞かぬのか 梅「未だ聞きません 小「併し君と決闘を仕やうと云ふの誰だナ何の様な人だ 梅「立派な人で今歌牌室に居ます 小「ドレ何の人だ僕が見て遣る一緒に來たまへ」と云ひ

ながら早や坐を立て歌牌室に進み行くよぞ梅花郎も後に從ひ其入口まで行きて私「アノ人です」と先程の好男子を差し示すよ小西「夫の大變だ」と云ひぬばかり又色を變へ無言の儘よ復の新聞室に歸り來り「止るく此決闘ハ非常ハ不利益だから止る 梅「イヤ武術一通りの何でも心得て居ますから決して不利益で有りません 小「ナニサ僕が不利益と云ふのハ勝負又付ての事での無い成る程君の専だから負いすまいが勝た所が君の爲よならぬ 梅「どハ又何故よ 小「イヤ彼れの村津伯の客人だ君が彼れと決闘したと有ての村津伯の家へも行き難く成るよアレハ巴里の貴族で森川子爵と云ふ人だ」森川子爵と聞き梅花郎の猶更ハ驚きたりア、森川子爵とい先ハ初音嬢の言葉よ聞きし巴里の放蕩貴族あり放蕩よ身を顧し世よも人よも捨られて今ハ初音嬢の悪計よ由り我思ふ小枝嬢の婿と爲らんとする人あり小枝嬢の生涯を誤らせんとする人あり梅花郎既ハ小枝嬢を救んとて來りし身の如何で此森川子爵を許さる可き 梅「アレが森川か森川とならば猶ほ決闘せねばならぬ假令ハ村津伯の不興を受やうとモアノ様な奴を殺して仕舞へば返ッて村津家の爲よある」小西

此言葉を怪み君は今森川と知ぬと言たが 梅「イヤ直接の知らぬが噂の聞て知  
て居る彼奴の非常な放蕩者で今の身を立する事も出来ず彼の様は村津伯を満着て小枝  
嬢の婿となる積で居る僕の僕の小枝嬢の爲めよも彼れと決闘せねばならぬ小西の聞きて  
噴出し「之の可笑い君の何を聞いて左様な間違ひを云ふのだ成る程森川の放蕩者で身  
代限りとするばかりよ爲り今で村津伯の外に交際する者も無い程だが併し小枝嬢  
の婿もあるとどの後方も無い噺言だ 梅「イヤ噺言で無い僕の確かよ先日初音嬢  
から聞いた初音嬢も丁度似合しい夫婦だから父よ勸めて是非婚姻させると云って居た  
「小西の益々怪み「ナニ其様を答へ無い君が夢でも見たのだらう 梅「決して夢よ  
非ずサ現は先日山の中で初音嬢と逢った時嬢の幾度も繰返して其事を言たのだ 小  
夫で初音嬢が自分で賛成して居る様も言葉を吐たのか 梅「大吐サ夫だから僕が不  
安心に思ふのだ君能く考へ給へ初音嬢と小枝嬢の姉妹と云ふ者の非常な仲が悪いの  
だぜ 小「爾サ夫の最も隠れも無い事實だ 梅「夫でアノ森川と云ふ奴の今まで初  
音嬢と譯の有る様に思ひ居たのたぜ 小「爾とも思ひ居た所での無い實際

全く譯が有て彼れが交際よ使ふ費用の大概初音嬢から貢で居た夫の己も知て居る  
梅「ソレ其初音嬢が今アノ森川を妹の小枝嬢に推附やうとするから不思議じやない  
かイヤサ不思議より第一恐ろしいで無いか「小西の暫し考へ「爾も若し初音嬢が  
自分の口から其様を言たのならば實に不思議だ 梅「夫で君の何と思ふ森川と小  
枝嬢との縁組を似合しい者と思ふか 小「夫の決して似合しく無いのサ固より森川  
の様を婿よすれば小枝嬢の直も身代を使ひ盡され其揚句は振捨られるよ極って  
居るサ 梅「サア其様を爲めならぬ恐ろしい縁組を初音嬢が小枝嬢に推附やうと  
計んで居るから尋常で無いじや無いか「小西の驚きて又怪む如く暫し眉を蹙めた  
るが猶ほ梅花郎が言葉を信せぬ如く併し全く初音嬢が其事を君よ告げたのよ相違な  
いか 梅「元より相違ない「小西の益々顔色を以て「成る程夫の聞捨て成  
らぬ己も素より森川の様を奴も出入を許すの村津家の不爲と知て内々伯爵を諷諫  
した事も有れど眞逆夫れ程の事と思ひ又伯爵とても万更森川の不品行を知ぬで  
も無いから豈や我娘の婿よにする様を事有る無と思つたが併し伯爵の年の寄るよ

従ひ唯最ふ娘を愛する一方と爲り今の何事でも姉嬢初音嬢の言あり次第とする様な  
 風が有るから初音嬢も其様を計が有れば伯爵も終りの承知せぬとも限らぬ夫も猶ほ  
 深く考へて見れば初音嬢の既森川は飽き何時までも此様な者を近けての自分の身  
 代を潰す故今の中は妹も推附け第一の我身の爲を計り續いての憎しと思ふ妹小枝  
 の破滅を計るのかも知れぬて」梅花郎の嬉しげに「夫サ、夫だから僕が小枝嬢の  
 爲は彼奴と決闘すると云ふのサ。小」併し君が他人の身で何れも其様は小枝嬢の肩を  
 持つ筈も有る舞い君の小枝嬢を譯でも有るのか」此問は梅花郎の耳までも紅くせし  
 が思ひ切て「他人だけれども僕も唯小枝嬢を思ひ初めたのさ」小西の又も肩を握め  
 「夫で小枝嬢の君が夫ほどよ思つて居る事を知て居るのか。梅」万更ら知らぬでも  
 無い。小」好々夫で分つた小枝嬢が絶へず君の事を言ふに不思議だと思つたが爾す  
 れば君よの全く望みが無いで無い小枝嬢の心が落着いて居るから愈々君を想ふ様よ  
 あれパー後々望みが有る一併し夫で見れば決闘の猶更ら止し給へイヤサ止せとい  
 云いぬが今少し待たまへ森川の決闘の名人だから今君も万一の事が有てのあらぬ夫

第十八回

よ好んば君が勝つとして今するのの無益だ氣永く待つ中よ初音嬢の計略が段々  
 熱く確か証據が出来て来る其時になり證據を握つた上で決闘し彼れに勝つ決闘の  
 譯も分り村津伯も君の手柄を有難く思ふよ由り益々君の都合が好い此決闘の森川が  
 君よ辱かしめられたから起つたので何れも君から挑む筈の無い君の方で黙つて其意を  
 持て居れば彼れに厚皮を奴だから明日よなれば必ず知らぬ顔で済して仕舞ふ今其意  
 を密へて置けば後に至つて何かの證據よなる事も有るから爾したまへ其意を俱樂  
 部の書記よ封じさせ其を以て時節を待つ事よ一悪い事言ひぬ僕の忠告よ聞きたま  
 へ」と道理を迫めて説きたれば梅花郎も其氣よあり是より彼の意を封せしめ尙ほ明  
 日村津伯も獵場で逢ふ可き手筈を打合せて此夜の互に分れたり

決闘の恥を受けたる人より言出す者なり梅花郎が森川子爵を疑ひて悪計の案を使ふ  
 と云ひし即ち森川子爵を辱しめたる者なれば此決闘の森川子爵が申込人よして梅  
 花郎の唯其申込みも應ずる迄なり素より梅花郎より催促す可き者よ非ねば梅花郎の

小西男爵の言語は從ひ終は彼れより言來る迄は無言の儘にて待つ可しと約束し是より  
 て小西男爵は分れを告げ我定宿へと歸りたるが翌日の朝未だ明睡ぬ中小西男爵より  
 約束の獵の裝束と乘馬一匹を贈り越したれば早速其の裝束を着け其馬を乗りメシナ  
 クなる村津伯の別荘に至りし朝も猶ほ七時頃あり此別荘より我れを救ひを求むる  
 小枝嬢の住む所なれば迫て其侍牌の撫子となりと一目遇ひたき者ありと馬の上よ  
 り眼を配るは此時門は臨みし二階の窓を開き下を見降す人こり有れ仰ぎ見れば小枝  
 嬢あり嬢は既に梅花郎の當地に着きしを聞き今朝は此下を通るならんと心待て待居  
 たる者と見へ梅花郎の顔を見て嬉し氣は黙禮したり紫より言葉を交す可きも非ねば  
 梅花郎も同じく黙禮したれど相思人同士は眼を以て其心を通じ得べし小枝嬢の眼  
 の中より「妾は御身を待居たり今宵は必ず此家まで逢ふ」との意を含み梅花郎が眼  
 より「我れ御身を救はんとて來りしぞ御身が斯くまでも深く我れを愛し給ふを嬉し  
 どの情を籠めたり斯る所へ此隣家ある小西男爵既に仕度を整へて出來りしかば嬢は  
 残り惜しき窓を閉ぢ梅花郎は男爵を從ひて獵場へと進み行けり獵馬と云へるは村津

伯の所有する山林にして其入口に到るまで此所より猶ほ二里ほどあり二人は馬を走  
 らせて僅は四十分ばかりにして其所に着けるに茲は既に伯爵を初めとし招かれた  
 る一同の客集ひ居るよぞ梅花郎は先づ伯爵に打向ひ丁寧なる挨拶を爲すよ伯爵の歡  
 び一方ならず暫しが程に握りたる梅花郎の手を放しも得やらず繰返しくて永く別  
 荘は逗留せよと勧めたり是より一同の客仁へ夫々の挨拶も済み梅花郎は四邊を見る  
 る人々より二十間ばかり離れたる所に初音嬢の獵裝束もて凛々しくも馬は跨り女持  
 の獵銃を腰に着けたる様其心の銃さを思ひ遣らる嬢は梅花郎の姿を見て早くも其傍  
 よ進み來り言葉を盡して今まで一同は待焦れたる事を述べたれば梅花郎も然る可く挨拶  
 せし一言二言其裝束の美事あるを賞立たり其中一同は此所より猶ほ一里ほどある與  
 まで進む事と爲りたれば梅花郎と小西男爵は村津伯を中として三人馬を並べ話しか  
 ながら歩み行けり一人初音嬢は特と人々より一助ばかり後より屢々振向きて後を眺  
 むる様子あるは是ぞ心の中にて彼の森川子爵の來るを待つものなる可し人々の斯く  
 とも知らず既に二三丁も進みし頃遙か背より馬を急がせて走來る一人の紳士の即は

ち是れ昨夜梅花郎と決闘の約束をせし森川子爵ある故初音嬢の歩を止めて殊更子爵と馬を並べたり子爵の諂らふ如き調子よて「何うも嬢様一貴嬢も餘程酷ふございますせー三月ほどフェレットの別荘に在りして一度のお便りもなさらぬどいー私くしの最ふ氣が揉めて成りませんから飛で行ふかと思ひましたかでも貴方が立の節決して後追て來ての了ぬと仰有つたからヤツとの辛抱で待て居ました」初音嬢の充分は賤みの様子を含みて「爾さ子昔の昔し今の今だもの行先々へお前は從て來られて堪る者か子お前は從繼はれての氣保養も出來やしない 森「其仰せの酷いコリヤ何ふも恐れ入りやした 初「ナニ酷い者か當前だよ今度お前を呼寄せたも顔が見度何のど云ふ浮た事での無い眞目を用事が有るのだから其積りで居ゐての當が違ふよ 森「眞面お用事ツて貴方一貴方と私しの身も取て戀ほど眞面お用事の有ません 初「エ、戀の何のど人聞の悪い好てお呉れよ夫りや最ふ過た昔の事だらふじや無いお私しの疾くは忘れて仕舞つたよ 森「又御笑談仰しやツて私しは氣をお揉せなさる 初「ア、笑談じや無いと云ふのは蒼蠅い人だ子ー私しの最ふ忘れて仕舞つ

たど云ふ事よお前の様お男を何時まで想ツて居る者か能く物も積ツて見るが好いたのですか 初「先ア爾思ツて居りやア間違ひが無いのサ 森「夫の酷い嬢様夫じや約束が違ひませう 初「ナニ約束私しやア何も約束など仕た覺へ無いよ年の行ぬ時分よお前の様な口先の好い男よ乘られて浮々と多舌つた事を一々約束と思ひれて堪る者か 森「ヘエ今まで仰しやツた事の約束で無いと仰せやりますか交際ふ者の無から初「夫と私が毎も一お前の威を眞受けて絶す責いで居ればこりお前も不自由をせぬと云ふ者私しは捨られ、バ明から小使ひも困るだらうお前夫でも未だ私しの言葉お負く氣かエ」今までの初音嬢を威して財布の底を作りたる森川子爵今返つて初音嬢を威し附けられ空しく馬上は首を垂れ返事さへも頼みの出ず初音嬢の猶も言葉を續け「ソレ御覽な私しと阿父さんよ捨られ、バ明日から世を渡る事も出來ぬたら夫より今私しの言ふ通りよあツて居れば生涯何の不自由も知らず立派な貴族で世渡りが出來ると云ふ者何ふだお前手を切るが嫌とあらば私しから切

て仕舞ふ手を切て他人より其上で私しの言ふ通り使ひれて呉れれば一生立派に送らせて遣るサア何ふじや好とも否とも返事をお仕な」退引させず問詰めたる此終局の猶ほ長し次回に於て説分けん

第十九回

通例の男ならんよ今森川子爵が初音嬢に言ひる、如く頭碎しよ言ひれての借と怒りを催ふす可き森川の我身の既世に捨られしを知り今村津伯は出入を停られて世間の誰一人我を信する者なく其上初音嬢に捨られなべ殆ど寄る邊さへ無き身と爲るを知れば腹立しくも口よの出されず何と言ひ好からんかと返事し兼て黙然たり初音嬢の其様子を見て取りつ「ソレ御覽ナ阿父さんよ告るく」と言だけれと告る事が出来や仕無い最私しの事の無い者と思つてお呉れ」森川子の顔を上げ思つてお呉れと仰しやつても私しに思はれませぬ貴嬢夫でハフェレットよ居らッしや中外よ好のが」と皆まで言せず叱り留め「外よ出来やうと出来まいとお前の知た事での無い其様を恐ろしい顔をせず私の云ふ事を皆まで聞好かへ其代お前私

の云ふ通りよ成て居れば一生困らぬ様よ又今よりも一層出世する様よ仕て遣るから森「貴嬢の言ふ事の少しも分りませぬ 初「お前も餘ほど悟りが悪いよお前が何とも言でも私の方で最ふ飽たのだから駄目だよ夫よりの断念めて私の言ふ通りよあッて居ればお前より好い妻を拵らへて遣ると云ふ事一サ持参金も有り位も有る立派な女を 森「何の様な女でも貴方よの替られませぬ 初「替られないと言たて無益だよ私の方で真平だからお前も又最少し地金を出してモ好じやア無いか何んだね初めから私しは惚ても居無い癖よ一金さへ呉るから何の様な女でも好のだから最ふお前が幾等其様よ惚た振をしてモ其手よの掛らさいよ 森「夫で何ふすれば好のです 初「ソフ其所が相談だ私しの代りよお前妹と婚禮してお呉れ」森川の驚きし如く「エ、妹どの 初「極つて居るじや無いか小枝の事さね小枝あら亡なッた母から貰つた身代も有り阿父さんも今の身代を私と小枝へ半分くよ分ると云ふからお前小枝の亭主よ成て御覽な一生困る事無い其上よ何れほどお前の名譽よなるか知れ無ワ」世よ捨られし森川の身よ取りて小枝嬢を妻よせんとし思ひも及ばぬ事あれ

「アレ彼の様を御笑談を」初「ナニ笑談も言者か其爲も前を呼寄せたのだものを、森」ダツて貴嬢小枝嬢が何ふして私しの妻とよ一夫りやア駄目ですよ父上も承知しません 初「ナニ阿父さんの私の口先で何ふでもなるよ 森」夫も小枝嬢も承知しやア仕ません貴嬢と隣の有る事を内々知ツて居ますもの 初「承知し無くとも好よ無理な婚させせるの世間も幾等もある事だから一お前さへ其氣も有り私しの言ふ通りよ成て居れば後私しが好やうよして無理往生も往生させるワチ」妹の生涯を誤らせんとする此恐しき計を開き通例の人ならば身震ひして打ち驚ろく所ろなれど森川子爵の悪事の數々仕盡せし奸物ある上殊も初音嬢の日頃の心柄を知る者みれば今早やうの氣も成り心の中より福徳の三年目と私か又喜びながらも其色の顔も出さず「ソリや最ふ貴嬢が斯うしろと云ふ事なら仕合ひでも有りませんが迎も無益だらふと思ひます全休何ふなさるお積りです 初「ナニ別は驛い無いくとさお前が承知なら今夜の中よ遣つて仕舞ふ 森」承知も不承知も其手續きを聞かなければ」 初「斯さね今夜お前が別荘泊り人の寐鎮つた頃を計り小枝の

寐間へ忍び込むの若し小枝が目覺して聲を出すと面倒だから目を覺させぬ様も少し忍び込んでサ好かへ」と言ふが互馬と馬を寄せ暫し小聲にて細語たる未ださへ度胸を据て居て呉れ、ば必と旨く行くから 森」でも貴嬢若し旨く行かぬ時私の私しが伯爵も出入を留られます 初「ナニお前さへ度胸を据へてズー」しく構へて居れば萬一ツも仕損じの無いよ後の私しが引受けるエお前世間も幾等もある事だワチ厭がる娘に親の思ふ婚を取せよとする時よ能く此傳をやるで無いか男が無理な娘の手を取り厭がるのも構はず吸てお居る所へ親が不意に推掛けて其様子を見娘が何と言譯するも聞かず否應答し承知させるのがサ夫と是どの少しばかり違ふけれど物の道理の同じ事だ併し詳しい相談此嬢が仕舞つて別荘へ歸つた後の事よ仕やう」ア、初音嬢が心の中今疑ふ可くも非ず我飽きたる森川をば我が憎しと思ふ妹小枝の婿と爲し小枝が一身を誤らせ且小枝と梅花郎との間を割き梅花郎を我方へ引寄せんと計むあり森川の早くも其心を察したれば鼻屈の男との云

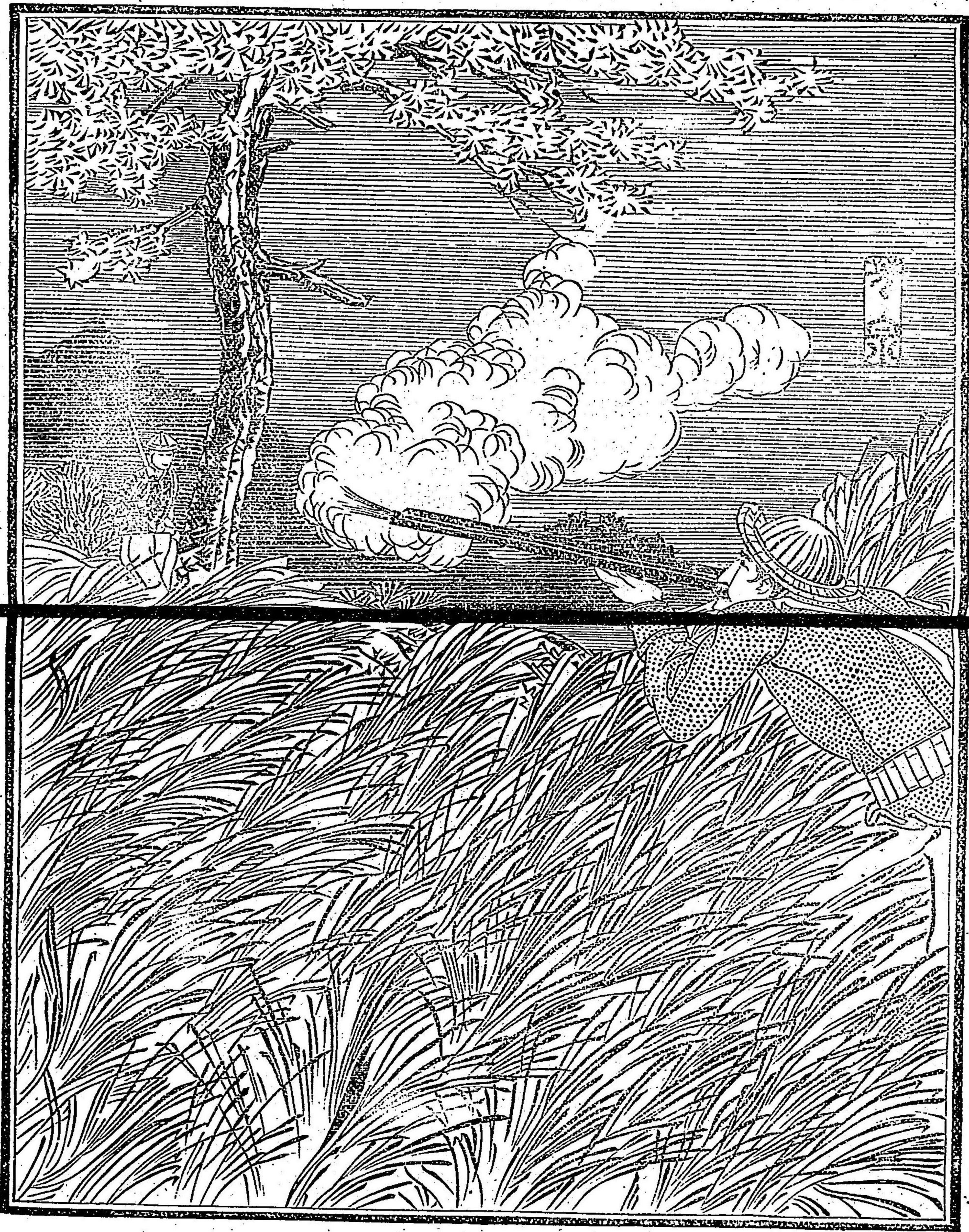
へ心の中に猶ほ面白からず初音嬢が今我が手合のぬ事を爲り我を振捨てんとするを恨み唯暖味の返事を爲すのみ小枝を我妻とするの固より願ふても無き事なれど若し初音嬢の計略外れて其事の破ぶるゝ曉に伯爵又出入を留られ其上初音嬢も振捨られ我身の不爲此上なし斯る危き業を計まんよりの何と加して初音嬢の心を昔の如く我方へ引付け置んと空しく思ひ悩むある可し其中馬の漸く獵場の奥深く進み入り村津伯と梅花郎を始め其他一同の傍まで進みたれば初音嬢の話を替へ何氣なき面を作りて「お前アノ阿父さんと話をして居る人を未だ知るまい 森他分此邊に住む田舎紳士かと思ひますが 初「ナニ爾じや無いよ見てみ分り相者じや無いかアレハポルドーの豪家の息子で阿父さんの大の氣に入さ」森川の早くも様子を知り彼の男こそ初音嬢が我を替へて思ひ初めし情夫あらんと思ひ「オヤ伯爵ばかりがアノ人を氣よ入って居るのですか 初「ソリヤお前アノ様立派な方だもの誰だッて氣よ入るワテ私しも何んだか好た人と思つて居るよ」森川の嘲ける如く「オヤ是ハ御免下さい爾との存じませず」と云ひたり是より梅花郎と森川子爵の間初

音嬢と小枝嬢の間湧出る様々の波風の間を追ふて分説く可し

第二十回

初音嬢が森川子爵に向ひて斯く梅花郎の事を告る折しも梅花郎の何心なく此方へと振向きたれば森川の初めて其顔を見思はずも「オヤ彼奴の事か彼奴又茲で逢はふと思はなんだ」と呟け初音嬢の之を開答め「何だどエ夫でハ前梅花郎さんを知つて居るのか 森「知つて居ると云ふ程でも有りませんが昨夜俱樂部で初逢ひ彼奴餘り失敬な事を云ふから懲しめの爲め決闘をする筈です」初音嬢の驚きて「ナニ決闘！夫の了ない梅花さんと決闘などするに聞かないよ 森「ナニ貴方の私しが彼奴を殺すたらふと思ひ心配して爾仰しやるのでせうけれど其御心配より及びません唯懲しめの爲めだから少し位の怪我だけで済みます 初「でも了ないお前私しが停めるのを聞かず決闘するのへするならお仕合其代り私しのお前を敵と思ひ其儘に置ないよ」我れを慕ひし初音嬢今我を振捨て、我憎む梅花郎を愛するかと思へば森川の快よからず去ればとて初音嬢又逆ふの極めて我身の不爲なれば未だ返事も





為さぬ中彼方又在りたる村津伯の早くも森川の来るを見認め「コレ森川何をグエグ  
ッして居るのだ一同が斯してお前を待て居るでい無かー夜前も亦歌牌で夜を明し夫  
で此様遅くおつたのだらふ」と云へば森川の「イエ歌牌ばかりでい有ません夜前  
の森の目で」と云ひながら梅花郎の顔を横目で見ると暗に決闘の事を思ひ出さんと  
の心する可し梅花郎の面憎しと思へども昨夜小西男爵より諒められたる事も有り  
殊に村津伯の目の前よて言争そふの失禮あれば知らぬ振して有る中森川の又も  
村津伯に向ひ「伯爵此方(梅花郎)の未貴方のお郎でも目掛った事の有ませんか  
後々の爲め何とぞお引達せを願ひます」伯爵の言葉に従ひ「是のホルダーの梅花郎  
と云ふ方だ」として二人を引合すは梅花郎の無言の儘よて辭宜おしたり此間纏べて初  
音嬢の充分の思ひを籠めたる眼よて梅花郎の顔を見詰宛かも梅花郎をバ我が目の中  
よ揉込んと思ふ如く見ゆる程ありしが森川目早く其眼を見て益々嬢の梅花郎は心あ  
るを知り心憎き梅花郎かを我れ彼れを殺さず置け可きやと獨り心よ誓ひたり斯て  
ある中村津伯の人々の配り方を定め剛從ふ者よ夫々命令を傳へて梅花郎をバ獵場の

正面よ置き小西男爵をバ夫より五十歩を隔てし右の方よ森川子爵をば左の方五十歩  
を隔てし所よ初音嬢をば梅花郎の前の極點よ各々斯く一ヶ所づゝの要害を受持らて  
其所よ張番を爲し頓て七八頭の獵犬を林の中よ追入れたたり此當りの猪の多きを以て  
名を知られたる土地よして猪の頗ぶる險呑ある獸あれば極めて鉄砲の術よ詳き者な  
らでい之を獵ると能はず若し一發よて仕留得ざるどきの猪其傷よ怒りを催ふし人を  
傷けんとすると儘あれば通例婦人などを猪獵の仲間に入る者よ非ざれど初音嬢  
の斯る荒くれし業を得手と爲し今まで既よ幾度も猪を射留たる事あるよ由り今日も  
斯の要害の箇所を受持てるなり梅花郎の只管よ小枝の事のみ心よ掛り獵の方よい氣  
も進まねど唯た猪の危険なるを知るが故に油断なく目を配り居る折しも彼方の草叢  
よ波打如き音しつゝ犬よ追れたる大猪の逃來る様子あれば鉄砲を取直す中猪の猛り  
て右の方ある小西男の持場よ突入るよと見へしが手も無く小西男の打出す一發よて  
仕認られたり此時林の所よて鉄砲の音頻なりしが其中の一發の梅花郎の身軀よ近  
く響き殊よその彈丸飛びきたりて梅花郎が横手の樹に中り木の皮飛散りて右の頬を

少し傷つけたれば扱ひ獵するもの、中よかく迄も業は拙なく小西の方へ走りし猪も我方を狙ふ者あるかと怪しみあがらその弾の飛來たりし邊を借と見れば彼の森川子爵周章で草の間は隠れ鐵砲を收めんとする所あり今の弾の間違ひは非ず正しく我を狙ひし者あり梅花郎の其仕打を憎しと思ひ取直す鐵砲を射殺さんかと思ひたれど待暫し今彼を殺すに全く正當の防禦として罪と爲る無き廉の無ければ我の既よ蟬澤を殺せしとの疑ひを受くる身にして世間の人我を疑ふ折あれば射たる後よて我言譯立難く此上よも我名を汚す事あるも知らず彼れ猶ほ懲ずまは狙ひ、狙へ猶ほ確かある證據を得る迄は我より銃を向く可きにやらずと漸く思ひ直したり此時又も正面なる初音嬢の邊りよて二發まで耳を貫く音したれば獲物やあると見渡すよ一頭の大猪初音嬢よ二發まで連射されて猶ほ死せず益々傷の痛みよ怒りて荒れ荒れ狂み狂ひ初音嬢を目掛けて牙噛鳴しつ一直線よ飛掛らんとす初音嬢は込直す暇も無く今一瞬の間よ其牙よ觸れ其蹄よ躍り此世の暇と爲らんとす梅花郎之を見て一刻の猶豫も無く駈出しあがら狙ひを定めて一發撞と發するよ射る彈丸の誤たず狂ふ猪の心臓

を打貫き猪の轉がりて仆れしかば梅花郎の其儘初音嬢の許に到るよ嬢は其心猶ほ落着かず最周章たる様子よて梅花の手と取り「ボンニ梅花さん貴方のお影で助がまし

た私しの命の今日から貴方の物ですよ」と云ひあがら猶ほも梅花を引寄せつ「外の人は恩を被るのには有難くも有ませんが貴方は助けられたの私しの本望です」とて猶ほ其聲を低くし「エ梅花さん私しの本望ですよ私しの疾から貴方を思つて居ますから」と際疾き所よて此厭らしき言葉を聞き梅花の宛も毒蛇よ巻れし思ひを爲し退くよの退かれず返事も出来ず殆ど我彈丸の當りしを後悔し若し彼の彈外れたらんよの嬢の既よ此世の人よ非ず我を口説く暇さへ無き者をと只管當感に呉る、時しも此様子を見し森川の嫉しどや思ひけん息喘切て走り來れり

第二十一回

梅花郎が返事よ困りて唯モサ〜とする内よ初音嬢の早くも梅花郎が右の頬よ微り傷あるを見て「オヤ此傷の何ふなごったのです」明らさまよ今森川子爵よ射られんとせし事を打明く可き所よ非ねば「ナニ是のツイした怪我です」と紛らせたり此時

森川子爵飛ぶが如く走り來たり「イヤ嬢様唯今實は浮雲い所併し先ア梅花さんの狙ひが當つたので定めしお嬉しうござらう」と云ひながら又も梅花郎に向ひ「君の實は上手だよアノ荒狂ふ猪を一發で仕留めるといふ爾さ何ぞ深い目的が在るかから彼ア旨く當つたのだ」と嘲る如く評すれば梅花郎もムツとしたれば「併し君よ及ば無君が先程の一發の随分際疾ひ所へ當たから」と遣返せば初音嬢の早くも其心を悟り梅花郎が頬の傷の森川が梅花郎を殺さんとて狙ひ射し者なりと見て取りたり森川の言紛らせんとて「爾さアノ彈の丁度猪の後足の邊へ行き其所の石へ當つたが何でも反れて君の立て居る傍の木へ飛んだかと思つたよ 梅「爾さ夫ほどまで彈の方行を見届けるの仲々僕さどの及ぬ所だ」斯嘲り逢ふ所へ村津伯も小西男も後前も馳來りて 村「イヤ梅花君唯今君の手並を拜見したが實は感心の外の無い夫よりも先ア初音が爲よの命の親だ是から何ぞ永く拙者の家へ逗留して呉れたまへ」とて梅花郎の手を取り握りべたり小西男爵の既も梅花郎と森川の問柄を知り殊より先程森川が梅花郎を狙ひたる事をさへ見し者なれば此儘置きて如何なる間違ひの有ら

んも知れずと氣轉を利かして村津伯は打向ひ「伯爵最ふ今日の切上と致しませう此上間違ひの無い中よ 村「爾さ既も大猪を三頭まで獲たから餘り草臥れぬ中よ歸らふか」とて是より夫々命令を傳へ荷物などを取方附けて一同別荘へ引上たり梅花郎も伯爵の言葉に従ひメシナクの別荘へ歸り特別に我身へ許されたる一室に入り衣服など着替へながらも小枝嬢が事氣掛り嬢が居間の孰なるか侍婢撫子の今孰れも在るやと空しく心を絞るのみ頓て衣服を改め終りて先づ庭園の様子を見んとて二階の窓を開き見る庭の内よ梅花郎が心を驚かしむる者あり開け外を覗かず其庭は散歩せる二人の人あり一人は森川子爵にして一人は初音嬢あり二人の既も獵の整束を脱捨てつ井ゲニングルスを着替へて何やらん話ながら木の影を散歩せり梅花郎の二人が小枝嬢を苦むるの計略を相談する者と思へば瞬澄もせず見えてあるよ其聲の少しも聞へざれど或時の初音嬢が森川を叱るが如く又た或る時の賺すも似たり梅花郎の密かよ庭へ降りきて樹の影に隠れ二人の談話を忍び聞かんとまでと思へども夫れほどの卑陋なる振舞ひも出來ず徒らと思ひを苦むるのみ此時フト二人が後の方を見遣

れバ低く茂りたる木の影も身を潜めて兩人の話しを偷み聞く一人の女あり誰かと思  
れバ小枝嬢の侍婢撫子あり梅花郎の之を見て喜び堪へず撫子既も兩人の密話を聞  
くからより後よて撫子も問ハバ其様子ハ分るからん撫子如き忠實ある侍婢あるハ小  
枝嬢が身に此上も無き幸ひなりと縁に安心する折しも庭より二人ハ全く相談の調ひ  
し者と見へ笑顔にて領首あひしが頓て初音嬢ハ衣裳より何やら取出して森川ハ渡  
し森川ハ之を受取りて衣裳ハ入れたリ梅花郎ハ其何物あるか見定めんとて空く眼  
よ力を入るれど兩人の仕打早くして見認る暇なしア、短銃ハ懐劔カ但しい又毒藥の  
類あるカ氣の揉る限りなり斯くて二人ハ右と左と立分れ各々家ハ入りたれば梅花郎  
ハ撫子ハ逢ひて今の次第を聞かん者と其儘二階を下り庭園ハ出行けば撫子ハ梅花郎  
の顔を認め嬉しげ又走り寄「貴方先ア嬢様と二人で毎日お噂を申ました併し嬢様の  
アノ森川子爵ハ顔を合せるが厭だとして一室の中ハ籠って居ますから夕方まで無くてハ  
お目ハ掛られますまい 梅「爾さ其通用心をするが善い今も森川ハ初音嬢と共此  
庭を散歩して居たのだから」撫子ハ打驚き「オヤ貴方二階から見て居しつたのです

か夫でハ私しの姿も御覽よりましたでせう 梅「見たから斯して降りて来たのだ  
撫「二人の話しを私しから聞きたるお積りで 梅「爾サお前残らず聞たで有  
ふ 撫「ハイ残らず聞取りましたがナニ貴方より聞せ申されません餘り恐ろしい  
話ですもの 梅「恐ろしい話しとあらバ猶更ら聞せて貰ひるまや一何でも小枝嬢の  
身の上ハ就た話だから 撫「イエ、夫ハ爾ですがナニ貴方より聞せ申てハ益々事を  
荒立るばかりです私し獨で充分に防ぎの付く事ですから貴方より嬢様も知しませ  
ん 梅「でも夫でハ安心が出来ぬ 撫「イエ貴方が手を出す様な事でも無いのです  
から是ばかりの黙って私しよ任せて置て下さいましナニ私しハ油断なく目を附けて  
居るのですから若し手ハ餘る事が有れば直し御相談致します今この恐ろしい計みで  
すけれど私しさへ氣を附けて居れば決して旨くハ行ません」と堅く隠して告げされ  
ば梅花郎も其言葉ハ任せ「夫でハ先づ聞かず置ふが今初音嬢から森川ハ手渡した  
のハ何で有た 撫「オヤ貴方ハアレまで御覽なさつて 梅「見る事ハ見たが何だか  
少しも分らぬので 撫「ナニ御心配よハ及びません私しの胸ハ夫々工夫が有ますか

ら今夫を申上ての必ず事が荒立て嬢様の爲よありません私しから頼申すまで貴方の何とも仰じやらす知らぬ顔して居て下さい」と只管願ふて止されば梅花郎も推しての間はず夫で先づお前を任せて置ふよ」とて撫子も分れ又も二階ある一室へ歸り今宵小枝嬢と逢見るを樂しみよ日の暮れ行くを待ち居たり

第二十二回

ア、庭の中よ初音嬢が森川子爵に語りたるの何事あるや今宵の中よ小枝嬢を深き計みよ陥んとする恐ろしき相談と見て取りしも委細を聞き得ざるの此上も無き遺憾なり侍婢撫子獨り呑み込み我に何事をも語らざれど女の身よして其計を破ると覺束なし何とせば好からんかと梅花郎の唯獨り空しく心を痛めつ、日の暮れ行くを待つ中よ早や午後の七時と爲り村津伯の從者より食堂へ案内せんと通じ來れば扱ひ小枝嬢と逢見るの時刻來りしかと雀躍しつ、外套を着替へ案内へ應じて食堂入り行けは茲より既よ小西男森川子村津伯を初めとして初音嬢も小枝嬢も客と客との間に介れ待遇は餘念も無し人々の今まで梅花郎の手際を評し居たる所とて梅花郎の

姿を見るより其國の輪を作り口々よ褒立れど心此よ非されば敢て嬉しきとも思はず早く人々を切抜けて小枝嬢が傍よ進まんと思ふうち村津伯の小枝嬢が手を引き人々を推退つ、梅花の傍よ漕ぎ來りて「イヤ梅花君是の拙者の娘で初音の妹だ素より君の迎賓館で知り合ても居るだらうが併し前夜の互ひに氣持の悪ひ對面を仕たのだからアノ時の事を忘れて仕舞ふ爲めは拙者から改めて紹介せる」と嬉し氣よ述立るの彼の蟬澤の殺されし夜の一件を打忘れ更隔て無く交り結ばんとの意ある可し梅花の心得て「有難ふみます」と云へば小枝嬢も耻かし氣よ其手を差出すよぞ梅花の之を取りて二度二度握りたり實よや思ひ思ひる、同士よの手の先にも心あり握る中よも無量の情を籠る者なる可し此時まで少し離れし所よ森川子と何事かを語ひ居たる初音嬢の梅花郎が小枝嬢の手を握れるを見て急ぎ來りアレ阿父さん梅花さんん私しの恩人ですから私じよもお禮を云へせて下さらねば了ませんよ」と言ふがら引奪る如くは梅花の手を取り彼方へと連れ去れば兼て打合せし者と見へ森川も進み來り隙さず小枝嬢の手を取りて連れ去りたり梅花郎も小枝嬢も思ひぬ人よ手を取

られて思ふ同士を引分られ本意なきは堪へされと揉掻き去らん禮は非ず宛も針の  
 筈は座る想ひを爲し卓子の兩の端へと腰掛るは様子知らぬ人々梅花郎と初音嬢の  
 並ぶを見て似合しき縁と評するものあれば小枝嬢と森川をべ一對の好夫婦と云ふも  
 わり笑ひ動揺めく中酒も濟し食事も終り客の思ひ思ひに歌牌室に入るも有り吸煙  
 室も赴くも有り或る人の相手を撰びて球突場へ到れば又た或る人の友を呼びて階舞  
 を初むるなど各々歡みを盡す中も梅花郎の毒蛇よりも恐ろしき初音嬢は因寅れて  
 音楽室の片隅へ腰掛けたれば心の中の穩かあらず若し初音嬢より再び挑まる事  
 無きか隙も有ば孰れよありと逃行ん者として只管胸をのみ苦むる中幸ひも村津伯  
 の多年の友にて非職將軍何某と云へる老人嚴めしく初音嬢の次は來り悠々と腰打  
 掛て過し昔しの戰功談を初めたり外の人ならば初音嬢遠慮も無く一言の許し追退く  
 る所あれと譽れ高き老將軍なれば無禮の振舞も亦難く最迷惑げに打聞くのみ幾度  
 か初音嬢の梅花郎が方よ向直らんとすれど其度老將軍の話を聞き五十年以來の戰  
 争と云ふ戰爭を殘らず語出んとする勢ひあれば梅花郎の之を機よ坐を起ちつ初音嬢

を老將軍に任せ置きて後をも見ずは音楽室を出で小枝嬢の孰れに在ると彼方此方を  
 尋ぬる中大廣間の片隅へ小西男爵と村津伯と最親しげに談話せり其間介りて小枝  
 嬢の物思ひしげに腰掛居るにぞ扱ひ嬢も何時しか森川子の虎の口を逃れ安心する  
 父の傍に身を寄せし者あるかと漸く心の重荷を卸したり此より直に嬢が傍に進み行  
 かんかと思ひたれど又も小西男と村津伯は如何なる長談しを聞かんも知れず夫より  
 此廣間の出口に在りて嬢が其居間へ退く時を待つよ如ずと思案を定めて出口の柱  
 よ身を廻し筋違ひ嬢が方を眺めつ、今か〜と待つ中嬢も梅花郎の姿を認めけ  
 ん父と小西は何やらん禮を述べ退く如く身を起して此方へと歩み來れり此時幸ひよ  
 して四邊より人なき故梅花郎の心は歡びながら目を以て嬢を迎かふるは嬢の早くも  
 梅花郎の立てる出口に來り最低き聲にて「貴方色々話も有りますから明朝七時前  
 よ裏庭の生垣の所でお待申します」と言捨て梅花郎の返事も待たず立去りたり梅花  
 郎は此嬉しき言葉を聞き歡び堪へず扱ひ小枝嬢斯る人込の中にて我は語るを危く  
 思ひ殊更ら裏庭に生垣の傍を撰びて我は密會を許せしか此歡ばしき言葉を聞く

からの我も此室よの用事なし早く我室に歸りて明朝を待んものと搔消す如く身を隠して二階なる一室へと歸りたり今までの人込の爲め心ざへも定まらず深く考ふる暇無かりしも一室よ歸りて静に彼れ是れと案じれば今宵の是れ森川が初音嬢の意又従ひ小枝嬢を其計みよ陥んとする宵あり其計みの何事なるや知らざれども我が來りしに全く其計みを破りて嬢を救はん爲めなれば氣を弛して叶はず假令何事あらふとも眠らずよ夜を明し嬢が一夜の番犬と爲る可しとて先づ我室の燭光を消し自ら眠りし如く見せ掛け身を静かよして待居たるに夜の更るよ従ひ追々に客も去り残る人々も各々我室へと退く様子あり是よりして果して如何なる椿事あるや

第二十三回

梅花郎の我室の燈明を消し眠りし振して様子を伺ふよ夜更け客散じたる後よて村津伯初音嬢小西男森川子等各々我室よ退かんとて廊下まで來り廊下よて互に分れを告げ銘々の室よ入り終れり斯くて一時を過ぎ既よ二時よも近からんと思ふ頃廊下よ當りて忍び行く者の足音するよぞ梅花郎の戸を隙して之を見るよ廊下の燈光薄暗く

定かよの分らねど疑ふ可くも無き女の姿なり初音嬢かと思れれば初音嬢よ非ず嬢より長低くして肉肥たり此女拔足して廊下の一方より徐々よ進み來り頓て其中程の壁よ附けて有明よ點火ある燈火の下を過るを見るよ之あん兼て初音嬢に使用る侍婢よて名を棗女と呼び年四十よ近き西班牙産の女あり梅花郎の曾て迎賓館よて一二度見たる事あり此女の顔を知るが故よ扱ひ此女初音嬢の言葉よ従ひ何か彼の恐ろしき計みを手傳ふ者なる可しと猶も様子を見てあるよ棗女の顔よ頓て小枝嬢の寐間の入口よ行き戸よ耳當て暫し内の様子を聞き居たるが内よ小枝嬢早や寐鎮まりて何の音も聞へざる者と見へ棗女の顔よ頓て首きつ又も静かよ其足を引きて森川が室の方へと進みたり之より森川が室の戸よ目を添へ指先よて輕く其戸を叩くと見へしが内より何か合圖でも有りし者か又も身を退き更よ二階より三階よ登る可き階子段を登り掛其中程まで登り行きて足を留宛も見張の番を爲す如く其所の段よ腰掛下の様子を眺め居たり此時森川子が室の戸静よ開と見る間よ寐巻姿の儘よて徐々と立出るの擬もあく子爵森川あり森川の戸の外よて先づ當りの様子を覗し何事をか考へたる上にて充分



度胸を定し如く徐々と小枝嬢が室の方へと進みたり梅花郎の是も至て心の中穩ならず彼等愈々其計を行ふ者なり直に走出て森川を捕へ呉んかと思へども今捕て何の證據も無し返つて彼も言込られ詰らぬ耻を搔く可きも必定あれば兎も角も確を所を認めんと胸を抑へて見て有るに森川の戸を掛て暫らく内の様子を見聞き頼て衣籠より細き鍵を取り出し之を其錠に依めて難なく戸をば開きたり此鍵は是れ晝の間初音嬢が庭に散歩しながら森川に渡したる彼の品は相違なし斯知れば別は怪しき所無ければ梅花郎の彼の品を鍵とい知らねば此有様を見て心益々安からずア森川如何にして彼の鍵を持るやアノ鍵こりの小枝嬢の外は持る者無き筈なるよ森川が之を持るを見れば一扱の小枝嬢早くも森川に心を寄今宵忍び逢んとて彼鍵を渡せし者か左すれば爰も初音嬢が森川と小枝と互ひに愛し逢ふ如く我れも告げしも萬更の偽りよ非ざるか爾どの知らず今まで小枝嬢は心を寄せ夫のみならず我心よて小枝嬢が我を愛する者とのみ思ひ居たる事の鈍ましさよと一時の我を忘れて躍り出さんかとまで身構へたれど漸くよして又思ひ直しア、我誤てり小枝嬢が今

までの様子と云ひ侍婢撫子の言葉と云ひ嬢が森川を嫌へる事の疑ひも無し彼の鍵こそ森川が私に調へし者あらん夫ども小枝嬢若し森川を愛ま彼の鍵を渡せしとならべ個の小枝嬢と森川の艶事あり我れより嫉妬がましく彼れ是れと云ふ可きも非ず彼の鍵若し贖者ならば今暫くする中よ小枝嬢驚き醒めて必ず聲を出すあらん若し聲を出さずば互ひに承知の上忍び逢ふ事必定あれば我口を出す所に非ず我の唯だ小枝嬢を思ひ切り明朝直に我卿里に歸るまでなり孰れよし今暫くの中は我疑ひの定まるならんと空しく心を悩ましつ息さへもせず其様子のみ伺ふも不審議や小枝嬢の室の中今森川が入行きたる儘にして聲も無く音も無し全く思ひ思ひる、人同士忍び逢ひしは異あらず梅花郎が心の中如何よぞや去れど梅花郎が心配の有様は茲に留めて先づ森川が事を記さんよ森川の首尾能く中忍び入り兼て初音嬢と打合せし如く拔足しつ、探り寄るよ此室の奥の方當りスヤ／＼と眠り居る女の息の聞ゆるよぞ茲ありけりと心よ喜び猶ほ奥深く探り行くよ我目の前も當り忽ち寸隙を招り照す者ありクワット目を射る其光りよ森川の飛退り誰かと思れ一人の年若き

女手燭を提げ早くも森川の胸を取りたり此女の小枝嬢の侍婢撫子あれど撫子のフェ  
 レットよて履ひ入れられし者ある故森川の之を知らず意外の事な怪みながら「お前  
 の誰だ」と問ふ撫子の顔は怒りの色を現はし「誰だも無いものだ貴方こそ何方です  
 私くし小枝嬢の召使ひ撫子とす者何用あつて此所へ」と厳しく問ひ詰むる此  
 言葉も室の奥ゆゑ梅花郎が居る所まで聞へざる可し森川の早くも我謀事の外れし  
 を知り少しの金子を興へて女の口を留めん者と我衣籠を探れども固より金銭を以て  
 小枝嬢の愛情を買ひんとて来りし者よあらねば衣籠の金も無し撫子の早く  
 も其様子を見て取り「貴方金あつて私しの口を塞がふとしても駄目ですよ嬢  
 様のお爲の金あつて替られませんサア貴方の何方です何用あつて此室へ這入まし  
 た其譯を言ひあきや直は村津伯の前まで引出します」と言出したる此收話の如何あ  
 らん

第二十四回

小枝嬢が室へ忍び入りたる森川子爵の思ひの外ある侍婢撫子は「何用あつてと問ひ

詰められ暫しが程の答ふる事さへ知らざりしが流石の奸物早くも思案を廻し其言葉  
 を巧みよして「コレサ女中夜中よ斯ふして来るからよ大抵云のすとも分るだらふ  
 お前が此様は美しく生れたが過ちだ先程廊下でお前の後姿をナラと見て振ひ附く  
 ほどよ思つたが晝の中の人目が有て「コレサ其様を邪慳を眞似をせず先ア其手燭を  
 吹消してコレサく」と其場を瞞着んとする汚らひしき言葉を撫子の耳も入れず  
 「丁ません私しよの憚りながら立派な許嫁の男が有ます其男に若し貴方の事を知ら  
 せたら貴方の直は蹴殺されますサアぐずぐずせずとお歸りなさい」と突けど拂へど  
 聞かべこり森川の唯だ一刻も長くは留り我謀事を成就せんとのみ思へるよ由り耻  
 しめられて耻かしと思はず立去る景色更無し去れど森川も撫子も共に小枝嬢の眠  
 りを破らんと恐れ推すも拂ふも口の中劇じき聲を出さぬよ由り外に在る梅花郎の  
 更よ合點行かず今までも森川の出来る様子なく又小枝嬢が驚き叫ぶ聲をも聞かざる  
 の愈々森川兼てより小枝嬢と契りを込し中あるか小枝嬢よして森川を愛せんと今  
 まで思ひも寄らざりしと徒らに心を痛むるのみ此時彼の先は階子段よ身を隠したる

侍婢棗女の時分好しと思ひしか徐々と廊下より降り又も拔足よて小枝嬢が室の戸口より近寄りつ暫し中の様子を打聞き獨り何やら領首きつ今度の前と打て變り足音荒く廊下の上を歩鳴し〜村津伯の寐間の戸口より近づきたり梅花郎の益々合點行かず彼れ何事を爲すやらんと瞬激もせず見て在るよ棗女の最高く聲を揚げ片言交りの西班牙語よて「旦那様〜大變が有ります旦那様早く起きて下さいませ旦那様〜」と村津伯を呼起したり暫くすると村津伯の中より戸を開きて寐巻の儘其身体を半へ現れし棗女の顔を信と見て「何だ失敬な寐て居る己を呼起すと此家は火事でも初まつたのか」と嚴く叱り附くる折しも伯爵が寐間と廊下を隔てし差向ふ初音嬢が居間の戸も同く斜め開くと見る間中より初音嬢周章し振よて飛で出れば棗女の之よ向ひ西班牙語よて何かペラ〜多舌しが初音嬢の父よ向ひ其言葉を翻譯し「阿父さん誰だか男の人が小枝の室へ忍込んだと申ますよ」伯爵の驚くかと思の外火ツと怒て「ナニを云棗女の氣違ひだ其様お事の番人よ雇入れの仕無いから自分の室へ行て寐ると言ッて聞かせ初でも貴方棗女の今夜氣分が悪くて此廊下へ出た所ろ一人の男が小

枝の寐間の戸を開て這入た切り十分間も經つけれど未だ出て來ぬと申ます 伯「何故十分間も黙ッて見て居た爾から爾と直し知らせるが好じや無いか其様な馬鹿な女あら明日直し暇を遣る 初でも貴方實に容易からぬ事柄で有りませんか嘘か誠か貴方小枝の室まで行て見届けて來ッしやるが本統でせう 伯「ナニ嘘じや盗坊でも這入たのあら小枝が今まで黙ッて居る筈が無い 初「イエ阿父さん盗坊だか何だか分りません盗坊より猶ほ痛いの者で有たら貴方の何と云はれます執れよしろ貴方見届て遣らねばなりません」此尤もらしき言葉よ伯爵も負き得ず「夫も爾だ好々己が見届ける若し嘘でいも有ふものなら直し此棗女を遣出すぞ」と言ひつ、廊下より立出て小枝嬢が室の方へと進み行け深き計みの初音嬢も今や其計みを遂る所と心中よて領首きながら其後よ従ひたり斯く伯爵が來るを見て梅花郎の我室の戸を少し斜に閉ぢ掛けて猶も油断なく伺へり頓て伯爵の小枝嬢の寐間の入口より來り見れば其戸よ森川が是見よがしと故と殘し置きたる一つの鏡猶ほ鏡よ挟みたる儘なれば伯爵の斯る事よ氣も附かず其儘入り行く内よりして出來る森川子伯爵の其顔を見て

益々怒り「此悪人め」と云ひながら振上る拳をば森川早くも取留めて「伯爵お待ちなされ斯く認められしからの何をか隠さふ伯爵申譯が有りませぬ其代り此淫奔の世間へ現れぬ中小枝嬢の私しが貰ひ受け」と兼て計み此恐しき倭辨を伯爵の半分聞きて「黙れ悪人其方の小枝の許しを得て此室へ忍び入たと云ふのか 森如何も其通り小枝も一時の淫奔で有りませぬ末の末まで言交した證據より私しからして表向きは貰ひ受け」伯爵黙れ二人とも呆れた奴等だ其所を退け小枝を引摺出して来るから」と云ひながら突進せんとするを初音嬢の姦を遮り留め「阿父さんお腹立の尤ですが貴方又御短氣又其様事為して若し世間へでも聞へて取返しに付きませぬ此儘はソツと收め小枝を更めて森川子爵にお遣りなさい折角思ひ思ひれた仲ですから無理は引分て何の様事なるかも知れませぬ二人を添して遣るが一番隱便の仕方ですう阿父さん此事の私しは預けて下さい」と言葉巧み又父を欺心き我計畧を成就せんとする初音嬢が心の中恐ろしと云ふも勿々あり

第二十五回

「阿父さん此儘小枝を森川さんの妻とするのが一番隱便な仕方ですう」と言葉巧み説勸むる初音嬢が恐ろしき辨舌も怒れる伯爵が耳より入す伯爵の猶も聲荒らく「虚だく小枝に限って其様事決して無い假令其事が誠でも何ふして森川に遣られる者か森川に遣る程なら引出して来て殺して仕舞ふサヤ其所退け」と云ひながら突進せんとする折しも先程より身を控へ居たる撫子の身を現れし「旦那様貴方の何を為されますか嬢様の先程より能くお休みよ成て居ます其様お大聲を爲して吃驚してお目をお醒しよありませう」と聞て伯爵の又驚き「手前撫子全躰何ふしては居る撫子ハ私しハ嬢様の御用を伺ひよ参りましたが嬢様の能くお眠みの御様子ゆゑ歸らうとして居ます所へ」伯爵ナニ小枝の眠って居るとナ 撫子ハお眠みに成て居ます夫で私しが歸らうとして居る所へ此森川とやら云ふ方が拔足でお出なかり私しを押へて厭らしい事ばかり仰しやりましてアノ晝間廊下で私しの姿を見人の寐鎮るを待て忍んで来たから燈光を消して一緒に寐ろとてホンニ私しの困つて居ました其所へ丁度貴方方がお出な成り期して森川さんをお叱り下さった



りたれば飛起きて着物を被替へ後の庭へ出行きて生垣の傍と此邊りなる可きかと  
 獨り朝霧を掻分けて此方彼方を見廻す中庭の將よ盡んとする所よ小枝嬢の我れより  
 早く來りしと見へ人待顔よイずめり梅花郎の嬉しさを浮されて突々と進み寄るに嬢  
 の昨夜も充分よ眠らざりしか色さへも青醒たる顔よて梅花郎の來るを迎へ思ひし  
 よりも打解けたる調子よて「貴方が私しを愛する事又私しが貴方を愛する事の言は  
 ずども最ふ互の心よ通じて居ますゆゑ其様事申ませませんが貴方私しの爲を思ふ  
 ら何ふか一ツのお願ひを叶へて下さい」梅花郎の此隔て無き言葉を聞き殆んど我身  
 を忘るゝまで打喜び「貴嬢が斯ふと仰じやれば私し何の様な事でも目を瞑つて  
 致します」小での貴方何ふか此家を立去て下さいまし」梅花郎の宛も雷よ打た  
 れし程よ打驚き「エ、此家を立去つて」小「ハ、唯今直よ誰も暇告ひをするよ  
 も及びません一直よ去立りを願ひます一日でも玆に居ての貴方アノ人よ殺されま  
 すよ昨日もアノ人が獵場で貴方を狙つた事の下僕から聞きました此家よ居しつて  
 貴方のお身が心配で成りませんノエ最ふ何よも仰じやらず私しよ安心させて下さい

まし」梅花郎の途切りの言葉よて「エ貴嬢夫での最ふお目よの掛られませんか  
 小「ナニ巴里へ行けば又逢れます貴方が巴里よ居つしやれば私し共も後から参りま  
 すですが此別荘よの貴方一刻も居られませんか 梅」でも貴方故々私しを此別荘へお  
 呼寄せ成つて 小「イエアノ時の豈や此様事有る舞いと思ひまして一最ふ彼れ  
 是れ云ふ時の有ませせん貴方直よ去立りを願ひます」身さへ危き小枝嬢を後よ殘じ  
 て此別荘を立去るの後髪を引るゝ心地すれど達て嬢が言葉よも負き難ければ「夫で  
 の無言で立去ります」と云ふ折しも後の方よて人の來る足音したれば二人の右と左  
 よ分れ各々家の中へ馳込みたり二人の姿漸く隠れたる時引違へて初音嬢と森川子  
 手を引連れて現れしが是も亦何事をか示し合ふ者ある可「夫の扱置き梅花郎の我  
 室よ歸り來り早くも手荷物を取纏めて小西男爵の寐間よ行き至急の用事よて是より  
 直よ巴里へ出張するよ付き村津伯を初め其他の人への我よ代りて然る可く暇乞を  
 爲し呉れよと頼み置き其儘此別荘を忍び出で巴里行ききの涼車よ打乗りたり

梅花郎が小枝嬢の言葉も背き兼て勿々メシナクの別荘を立去り巴里行きの旅車に乗りにてより凡そ一週間を経たる頃、村津伯も亦初音嬢小枝嬢を初め召使ひ一同を引連れて巴里の本邸へ歸りたり伯爵の本邸のモンシヨと云公園へ傍へる最廣き一掃へなり或朝の車屋敷の門口を様子あり氣も眺めながら公園地を行きつ歸りつする一人の田舎ものあり此者を誰れぞと問ふ侍婢撫子の許嫁ある松脂取兵太郎なり兵太郎の撫子がメシナクを去りて巴里へ來りしと聞き戀しと思ふ一心にて後より巴里へ出來たりしかど撫子の奉公せる村津伯の本邸孰れの所もあるやを知らず唯モンシヨの公園地に傍へりと聞きたるのみされば公園地の傍へる家々を彼れか是れかと悉く窺き込み今も撫子の姿見ゆるならんと夫のみを當りして毎日玆へ來り空しくイすむと既三日及べど猶ほ撫子の姿を見認得ず去れど田舎者の一轍心更に法む景色も無く今日も朝の間より斯く此所を徘徊するあり此時兵太郎の背後より當り就れよりか歸り來る一人の女あり兵太郎の後姿を怪げ眺め居たるが頓て其前より廻りて「オヤ兵さんかへ」と聲を掛けたり此聲の確かぬ撫子なれどフェレットは居たる頃との違ひ田舎娘の風を捨て、巴里風の服を着け巴里風を覆面をさへ着けたれば兵太郎は怪みて「オヤ」と云ひながら其覆面の中を差除くのみ 撫私したよお前、先ナンドって巴里へ來たのだぞ」と云ひれて初めて心附き「オ、撫子か巳へ又大層立派な着たから何所かの嬢様かと思つたサア先ア此腰掛を掛ろ」と云ひながら撫子が肩より手を掛け過りの腰掛を引据ゑんとするよ 撫「アレ私しは今使ひの歸りだから腰を掛る暇が無いよお前、先ア何しに來た私しの後を追て來て了無いと度々手紙を遣たのよ 兵「爾う叱つて呉れるナ巳へ又手前の顔が見たいので遙々斯くして尋ねて來た 撫「困つた人だチエ尋ねて來たとして自由で逢れる者じや無しお前仕方が無いよ 兵「巴自由で逢れ無くとも好い斯して毎日お前が奉公して居る家の門口を見て居れば氣が済むのだ 撫「ホントは困り者だよ併し先ア來た者の仕方が無いから其様な事を云いずよお前旅費の盡きぬ中よ早くお歸りナ 兵「旅費の三月や四月じや無くお前居る宿が一日十錢で親爺から百圓貰つて來たのだから百圓の聲に撫子の聲が「エ親父から百圓貰つた一嘘お言で無いよお前の親爺よ

る頃との違ひ田舎娘の風を捨て、巴里風の服を着け巴里風を覆面をさへ着けたれば兵太郎は怪みて「オヤ」と云ひながら其覆面の中を差除くのみ 撫私したよお前、先ナンドって巴里へ來たのだぞ」と云ひれて初めて心附き「オ、撫子か巳へ又大層立派な着たから何所かの嬢様かと思つたサア先ア此腰掛を掛ろ」と云ひながら撫子が肩より手を掛け過りの腰掛を引据ゑんとするよ 撫「アレ私しは今使ひの歸りだから腰を掛る暇が無いよお前、先ア何しに來た私しの後を追て來て了無いと度々手紙を遣たのよ 兵「爾う叱つて呉れるナ巳へ又手前の顔が見たいので遙々斯くして尋ねて來た 撫「困つた人だチエ尋ねて來たとして自由で逢れる者じや無しお前仕方が無いよ 兵「巴自由で逢れ無くとも好い斯して毎日お前が奉公して居る家の門口を見て居れば氣が済むのだ 撫「ホントは困り者だよ併し先ア來た者の仕方が無いから其様な事を云いずよお前旅費の盡きぬ中よ早くお歸りナ 兵「旅費の三月や四月じや無くお前居る宿が一日十錢で親爺から百圓貰つて來たのだから百圓の聲に撫子の聲が「エ親父から百圓貰つた一嘘お言で無いよお前の親爺よ

百圓のお錢が有る者かね百圓の扱置き日々の暮しよさへ困て居るじや無か 兵「ナ  
 彼の様も暮しを詰て若い時から少つ溜たお金が二百圓程有るとよ 撫「嘘お言  
 な若し其様お金があるならお前の親父の盗坊でもするのだからアノ山の中で松脂な  
 ど取て居て何ふして其れほどの大金が出来る者か子 兵「已を悪く云ふ分よア幾  
 等でも悪く云ふが好が親爺を盗坊おど、云つて呉れるナ若い時から正直で通つて居  
 るのよ 撫「正直なら正直で好からお前早くお歸りよ二百圓の金が有る二人で立派  
 な世帯が持るじや無いか夫をお前此様を事よ使つて仕舞つての仕方が有る舞い 兵  
 「メツて己ア折角来たのだから獨りの歸へられない手前が奉公を仕舞て歸る時一緒  
 にお歸る手前最ふ暇なるだらふ」撫子「暫し考へ」爾サ明日も暇なるかも知れ  
 ぬが何分よも小枝嬢が御病氣で私しが居無くていお困りだからお暇もあつても小枝  
 嬢の快くある迄無理よも置いて置く積だ今若し私しが居無ればアノ意地悪を姉嬢が又  
 何の様お事をするかも知れず」と兵太郎の半聞きて「爾々初音嬢とか云ふの大層意  
 地が悪いと云つたナア其様よ心配掛るなら己が叩き殺して遣ふ 撫「何を云ふのだ

子エお前の知た事での無いよ」と云ひ掛けて暫し考へしが何か心よ浮ぶ事ありしか  
 更よ言葉の調子を變へて「爾々お前も折角斯ふして来たのだから又何か役に立たさ  
 い者でも無い私が暇もあつて歸る時まで此地に居てお呉れ爾すれば私も亦氣の強い  
 事も有るから」兵太郎の嬉し氣よ「爾々爾思つて遙々来たのだ己が斯して附て居る  
 から何も氣の引る事無い好か當分此地よ逗留するから手前毎日斯ふして顔を見せ  
 て呉れ己の居る宿のアル彼の木の影に見ゆる穢い家だアノ家へさへ言て寄越せば何  
 時でも己が飛で行くから 撫「ナニ飛で来る様お用事無いが居所さへ分つて居れ  
 ば何時でもチヨイく逢れるからお前餘り外へ出ぬ様よしてお呉れ 兵「ウム手前  
 が時々顔さへ見せて呉れりやア何よ外おどへ出やア仕無い手前其言葉を忘れるナ」  
 と云ひながら其手を取り口を當て一吸吸へば 撫「遅くあつて悪いから今日の此  
 で分れたよ」と云ひながら身構して人や在るか邊りを見るに之のしたり僅よ三間  
 ばかり離れし所よ何時の間よりかイみ此様子を眺むる者あり別人ならず森川子爵あ  
 り撫子の子爵よ斯る所を見られ又此問答を聞かれての後々の爲めよ悪ければ我が身



と悟られぬやう手早く覆面を搔卸して其儘飛ぶが如くは伯爵の家へ逃入りたり森川子の奴め何かよ就けて己の邪魔をする之を厭ふ伯爵を煽動たら直も暇が出るだらふと獨り口の中よて咬やきあがら之も同じく村津伯の家へ入りたり

第二十七回

公園地よて撫子と兵太郎との話を立聞き是ぞ邪魔者撫子を追拂ふる屈強の口實ありと領首きながら村津家へ入行きたる森川子爵の案内も乞ひず突々と玄關を上りて喫茶室へと入行くも茲より伯爵と初音嬢相對ひて何事をか談話せり二人りの顔附より察する時初音嬢強ひて其父へ向ひ何事をか勧め居たる者と思ひる伯爵は森川の顔を見るより早く「コレ森川早く已に加勢して初音を説諭して呉れ初音の小枝の侍婢撫子へ暇を遣れとて此已に勸めて困る一己も何は無理な撫子を借度いとい思ひぬけれど今彼れは暇を遣て小枝が困るだらうと思つてナァー撫子の最ふ此上も無い小枝の氣に入だから」初音嬢の父と森川の顔を兩方眺めて「サア此上も無い氣に入

だから猶更ら早く暇を遣らねば了あいと云ふのですホンよ彼の撫子と云ふ奴の侍婢の癖は小枝を自由自在にし手の内で丸めて居ますよ夫だから私しの氣は障って成ません夫よ小枝も彼の撫子が来る迄は私しと中好くして居ましたが此頃でハ撫子が色々悪い智慧を着けると見へ私しを敵か何ぞの嫌は思ひ成るだけ口も交かぬ様よしませ夫でも私しの我妹だと思へばこり其爲よある様は斯して撫子へ暇を遣るが好らふと云ふのです 伯「お前の事柄を餘り大きく考へ過るよ成る程小枝が撫子を愛するよの違ひ無いが夫と云ふもアノ撫子が忠實な能く氣を附けるからの事だ夫よ小枝とて一通りの教育も有り万更の馬鹿でも無いから眞逆撫子よ智慧を附けられると云ふ事も有る無い 初「智慧を附けるドコロでハ有りません悪い眞似をして見せるのです此間も撫子が此森川さんを小枝の寐間へ引入れたでハ有ませんか夫りや森川さんも悪いとした所で矢張撫子も悪いのです根が田舎者で作法と云ふ事を知らぬかアノ様な者を永く置いてハ妹も見やう見ませぬで遂はハ何の様な事をするかも知れません 村「ナニ爾心配する程の事も有るまい夫よアノ事柄なごり小枝の知た事で

も無今急ニ撫子を追出して、譯を知らぬ小枝の心で何の様な思ふかも知らぬ、初  
 何と思つたッて好で有ませんか親が子の爲めある事をするの、何も言譯の要り  
 ませんホント此家での子の了見が親の了見より強いのだよ、村「ナニ子の了見が  
 親より強いなど、其様な事、決して無い素より己が撫子と暇を遣ると云へば小枝の  
 何とも言はず己の言次第に従つて居るけれど、今の丁度小枝が病氣だから、病氣で苦  
 しんで居る時、其氣は叶のぬ事をするの可愛さうだ夫、撫子も又落度でも有るなら  
 兎も角だけれど少しも是と云ふ落度の無し、サ別荘に居る時分、ナヨイ、外へ遊び  
 に出た事も有ツたが、此方へ来てから其様な風、少しも無し、初めて都へ来た女がア  
 ノ様、外へ出ぬの、實は珍しい、今まで無言で聞き居たる森川子の、茲ぞ焼附ける  
 所と思ひし如く、横合より口を出し、「ナニ餘り珍しくも有ませんよ、今も撫子が公園地  
 へ遊んで居る所を見ましたから、伯「ナニ夫の必と小枝から用事を言附つて使ひよ  
 でも行たのだらふ、森「使ひか、も知れませんが、年頃の男と腰掛の傍で狂つて居まし  
 た、初音嬢の益々之よ力を得て、「ソレ御覽をさい、呆れた者だ、病人の使ひよ出て男と狂

つて居るさど、伯「イヤ、森川夫の何かの間違ひで、無いか、森「決して間違ひ  
 での有ません男、手の先を吸ひせて居ました、私が私しの姿を見驚いて、此屋敷へ駈込み  
 ました、「斯く聞きて、伯爵も最早勘辨ならず、「フム、公園地で、以て男、手先を吸せる  
 どの餘り酷い」と云ば、「初音嬢の森川に向ひ、「其男と云ふ、田舎者の風をして居  
 ませんでしたか、森「ハイ、何でもフェレット、邊りの田舎者と見受ました、初「ア、  
 爾だ夫なら、松脂取の息子です、別荘に居る時も、絶えず外へ出て、其者、逢て居ました、此  
 都へ来てからも、矢張り其男が戀しい者だから、手紙を出して、呼寄せたのだ、エ、阿父さん  
 貴方は、是でも未だ撫子を置きますが、エ、此でも、「伯爵の少し、怒りを帯びし様子、  
 夫の實は、聞捨てな、早速、今日中、に暇を遣ふ、小枝が病氣、だけれど、仕方、が無い、森川  
 此時、伯爵、向ひ、「小枝嬢が、病氣、どの何の様な、御容体、です、伯「何、ふも、其容体が、分ら  
 ぬのだ、全体、健康、亦性質、で殊、別荘、から、歸つて、二日、三日、の、極心、持の、好い、様子、で、有つた  
 が、夫が、何、云ふ、譯、か、始め、の、頭痛、が、して、夜、寐、られ、ぬ、と、云ひ、段々、と、衰弱、して、一、醫者、よ  
 り、見せた、が、醫者、の、唯、其の、衰弱、する、と、云ふ、結果、を見る、ばかり、で、原因、を見る、事、が、出来、ぬ

何でも其徴候から云ふ時何と云ふ一種の毒薬で以て徐々殺される病人と同じ事  
 だと云ふけれど夫の何ふも信じられぬ眞逆小枝は毒薬を呑せる者が有る筈も無く又  
 小枝が自分で毒薬を呑む筈の猶ほ更ら無し拙者も實の途方又呉れて居る」と云へ  
 ば森川の此時怪しき目附にて初音嬢の顔を覗みたり此目附を解剖すれば嬢は御身の  
 我を隠して妹を毒害する計みよその心を含みしからん初音の其目附を見ぬ振よて  
 父に向ひ「全休醫者おとど云ふ者の好加減の事を云ふ者です私に其病の原因  
 が悉皆り分つて居ますよ貴方の心次第で随分直らぬ病氣で有りません」伯爵の  
 怪しみて「己れの心次第の 初音嬢を取て遣るのですワチ小枝の貴方世よ云ふ  
 戀病ですのよ夫が貴方よ分らぬの不思議だと思ひますワ 伯ナニ其様を事り無  
 い小枝の幼少時から何も彼も己に打明るのだから若其様な事でも有れば黙つて居  
 る筈の無い夫は婿夫を取るとの口よ云ふの優しいけれど實際ふの仲々の大事だ 初  
 「ナニ大事を事り有ません小枝の婿夫と云は望み手の澤山ありますから其中一人小  
 枝の氣よ叶のを擇せるが好で有りませんか」此言葉を聞き森川の心の中よて痛く

驚き今小枝嬢をして自由な婿夫を撰しめば梅花郎を撰ぶ事必定あり梅花郎の初音嬢  
 も亦自ら思ひを撰くる所なるよ之を妹は撰ばしむるとい如何なる心ぞ曩よの我を小  
 枝嬢は推附けんとし其謀略の成らざるを見て今早や心を變へ我を頼むよ足らざる  
 者と認しか否々初音嬢の奸智よ長けたる女あれば己が憎める小枝嬢は梅花郎を撰ば  
 しむる筈の無い之にの必らず仔細あらんと空しく思案しおがらも夫と無く伯爵の顔  
 色を見るよ伯爵も兩三日前は見たる時とい大に變り肉落精盡きて殆ど老衰せし人の  
 如くあれは森川心の裏に領首さア、初音嬢の巧みの分りたり嬢の妹を毒害し猶ほ其  
 上よ父を迄も毒薬よて殺さんとする者なり去れば今の中よ父の心を言くるめ小枝よ  
 梅花郎を撰ばせて彼れを婿夫の如く我家よ引附け置き其婚禮の濟まざる中よ父と妹  
 を亡き者とし梅花郎を己が手よ入れんとする恐ろしき計器よ極まれり去れど梅花郎  
 の馬鹿正直の男よして小枝嬢を愛するも初音嬢を憎めるとい疑ひも無き所あれは若  
 し小枝嬢死するよ於ての彼れ必ず之は義理を立て初音嬢の言葉よ従はざるの必定な  
 り斯る上よ初音嬢梅花郎を捨られたる腹立しよ彼れは敵する男を撰み而當よ其

男を婿夫とする鏡を掛けて見る如く扱て其男と云ふの差當り我より外に在らざれば今初音嬢の謀事の嬢自ら我れを降参するの手續きを爲す均し我の暫らく身を遠ざけ氣永く其時の來るを待つよ如しと獨り思案を定めたり此時伯爵の初音は向ひて前の話しを續き「爾さナ兎に角撫子よ直に暇を遣る事にして今夜已れが小枝は逢ひ弛々其心の中を問ひ糺して見やう」と云ひたり是よて森川の稍や安心し「フム次第は旨く成て來るぞ何でも暫く旅行して高見で見物するよ限ると腹の中よて咳やきながら暇を告げて立去りしが此翌日直に巴里を出發して英國へ漫遊し赴むさしとあり

第二十八回

話し更つて梅花郎の小枝嬢の言葉は從ひ勿々巴里に來りしより春田町の旅宿に宿を取ら唯小枝嬢の事を思ひ續けて空しく日をも送る中村津伯一家の人々間も無巴里に歸りたれば梅花郎の二度まで其本邸を問ひたれど小枝嬢の病氣を云ひて顔さへ見せず忠實なる撫子も如何よせしか逢見て様子を聞く事さへならざれば二度とも本章

あき思ひを爲して我宿へと歸りたり斯て一日二日と過す中義は彼の蟬澤の殺されたる事件を取扱ひたる代理判事西村氏も官の暇を得て此巴里に來り梅花郎と同居する宿を定めたれば梅花郎の徒然を消すに此上あき友を得たりと喜び屢々相携さへて物見さどよ行きたるが今日しも共々町盡れまで散歩し出で日の暮れてより宿に歸り二たび連立て或料理店に赴きつ庭に陳べし卓子に對ひ座して夜食の料理を命じ酒酌みながら四方八方の話しを爲す中西村の判事の癖とて犯罪の話より又彼の蟬澤が事又説及ぼし何ふもアノ蟬澤を殺した本人が分らぬので僕に絶えず氣を掛つて居たが此頃何だか又怪いと思ふ所が出来て來た實に予一昨日村津伯の許を問ふた所が小枝嬢の病氣で引籠つて居ると云ふし伯爵も少し加減が悪いと云つて「僕も迷ふ事な逢たけれど話しをするさへ大儀の様子で直に一間へ引込んで仕舞つた其後でアノ初音嬢と一時間ほど話をした嬢の最ふ君の事ばかり言て居るよ先づ僕の腕んだ所での君も充分氣が有せシテ見ると僕のアノ初音嬢が幾等か彼の事件に關係の仕て居ないかと思ふのだ梅夫に分らない話しだ僕に氣が有るからとて直に彼の事件に關係すると

の僕よの少も譯が分らぬ西「イヤサ初音嬢が別荘に居頃蟬澤は想ひを掛けたと云ふ世評の有たの君も知て居たらう其後君を見て君よ心が移つた者だから蟬澤を邪魔と思ひ誰れか彼の邊に住で居る若者を欺かして蟬澤を殺させ仕無かと思ふのさ  
 梅「成る程アノ初音嬢と云ふの随分邪慳な女だと云ふ評判の有るけれど眞逆其様を大膽な事なすまい夫は僕も氣が有るなど、の君の想像は止まるのだもの 西「イヤ爾で無い僕も充分に見て取たから是れ最ふ争ふ可からざる事實だ既し嬢の口から憚りも無く僕も向つて所夫を持つから梅花郎の様を男を持たいと分明り云つたもの夫は嬢が最初の色男だと云ふ森川子爵の身の上も調べて見たが彼奴も仲々の悪人だ」  
 森川の事を聞きて梅花郎の思はずも「オヤ君の方でい、既し川よ目を附けて居るか 西「夫れも矢張り蟬澤の事件からして目を附ける事もあるのだ彼奴の管程奸智も丈た奴と見へて村津伯の威光を笠に冠り所々の俱樂部へ入込み如何様の歌牌あど拵らへて夫で人の金を取る様子だ未だ確かな証據の擧げられぬけれど既し彼奴を疑つて居る者の澤山ある 梅「イヤ夫の現し僕も其一人だ先日ベリゴアの俱樂部で既し

賽の争ひから彼奴の僕も決闘を吹掛けたが僕も小西男爵から諫められたから何ふでも外の仕次第に任せて置たところ其翌日甚い奴さ獵場にて僕を征撃した」狙撃の聲に西村の打撃るき「ナニ彼奴が君を狙撃したとナ夫の思つたより悪い奴だ」と云ひながら暫し考へ「フム君を狙ひ撃つ様を奴なら蟬澤を殺したのも彼奴かも知れぬ 梅「イヤ夫の間違ひだ蟬澤の殺された時彼奴の此巴里に居たのだもの 西「イヤ夫の何ふとも知れないテ朝九時巴里を發する急行列車に乗れば此頃で夜の八時過ぎの其流車がフェレットへ着くのだもの夫より山の中へ這入り蟬澤を待受け一時頃彼の罪を犯して翌朝の一番流車で歸つたとすれど誰も怪しむ者も無い夫よ蟬澤の射られた短銃の弾の小形で有るから旅行する者が衣籠の中へ入れて行くよ手順の大きさだ 梅「ダけれど巴里に居ながら其夜果して蟬澤が松の木の下へ忍んで來ると云ふ事を知る筈が無い 西「ナニ夫も前以て初音嬢が蟬澤を約束し幾日の晩よ何所其許まで來いと云つて置いて其事を森川よ知らせて遣つたかも知れぬ爾すれば森川の我が戀の敵を殺すのだから勇み進んで飛で來たのだらふ併し此様を詳しい所

の孰れよしろ兎は角僕の初音嬢が此事件又關係して居る事の明かだと思ふ一尤も此事件の今の最ふ僕の受持で無いから何ふでも好いが君の身も關係の有る事だから僕の意見書を認めて其受持の判事に送る積りだ 梅「其様な事僕に知る所での無いが併し君の意見の通り若し初音嬢を調べるなら一日も早い为好ね此儘捨て置て初音嬢の小枝嬢を何の様目よ合せるかも知れぬ既よメシナジの別荘でも大變な騒ぎよある所を侍婢の働きで漸と防ぎ留めたのだから 西「侍婢どの撫子かへ 梅「爾サ彼の撫子の感心な女だ君若し意見書でも作るなら一應アノ女又運て問ふて見るが好せ 西「夫の問ひも仕ようが併し何ふすれば撫子よ逢れるだらふ 梅「夫の僕も分らぬが併し撫子の僕と共に小枝嬢を保護する筈で若し嬢の身の上は危い事でも有れば直に僕の所へ知らせて来る約束をして有る」と語ふ折しも給仕の者来りて梅花郎は向ひ「旦那兵太郎とか云ふ者が至急貴方よ此手紙を渡して呉れとて此庭の外は待て居ます」兵太郎とい兼て知る松脂取の息子あれと彼れが我れよ手紙を送るとい合點の行かぬ事あれば梅花郎は怪しみをあら其封を切るよ急ぎて認めし者と

見へ女句の極めて短かけれど容易あらぬ事柄あり即ち左の如し

今夜小枝嬢の身の上必死よ迫りし私し今日限り雇ひを解かれしゆゑ貴方さま宜しく御力を盡し被下度い梅花郎様侍婢撫子より

とあり梅花郎の驚き想ふ可し

第二十九回

兵太郎の持来りたる撫子の手紙よ由り小枝嬢の危篤なるを知りて梅花郎思はずも顔の色を變ゆれば傍よある西村判事の怪しみて「全体君何ふしたのか」と問ふ 梅「先づ此手紙を讀み給へ」と差出すを讀み終りて「成る程必死よ迫ると有るから定めし病氣危篤で有ふ併し君が醫者の道を知つて居ると云ふで無し何とも仕方が無いだらふ」梅花郎の暫し考へ「爾は僕が今から馳附けた所ろが小枝嬢の病室まで通られる譯で無し殊に醫學の心得の一向さしサ兎は角兵太郎を呼入れ開て見やう」西村判事の兵太郎の名前を聞答め「ナニ兵太郎とナ夫の君が調を受けた時同じく裁判所へ拘引された松脂取で無いか夫が何ふして巴里へ来た 梅「何ふして来たか僕

も未だ知らぬのだが兎も角呼入れて見やう」と云ふを西村暫しと推留めイヤ呼入れ  
 るあら僕を判事と知らせていりさいせ少こし彼れの様子を見度のためから 梅「イヤ  
 知らせ無くとも君の顔を知て居るだらふ 西「イヤ彼れい専任判事が調べたのだか  
 ら僕の顔を知て居る筈が無い 梅「好々夫でい君の事を判事とい知らさずは呼で來  
 やう」と云ふがら給仕を呼び兵太郎を呼入れよと命じたるも暫らく経て兵太郎のキ  
 ヨロ／＼即ち入來り梅花郎一禮したれば 梅「オ、兵太郎か達者で目で度いな  
 手前よ撫子から何か話しても無かつたか」嬢様が病氣だとか何と云ふ事を」と問  
 へど兵太郎の當り人あるを氣遣ふ様子にて何事をも答へざれば梅花郎の氣を利せ「  
 ナニ心配するより及ばぬ此方己の友達で何も角も打明けて好い人だから」と云ふ  
 兵太郎の漸やく安心せし躰にて「ハイ嬢様の身の上が險者だと申しました其外の  
 悉しく聞く暇も無く此手紙を受取つて直ま参りました夫よ今夜の大變な事が有るか  
 ら村津伯の屋敷の外で夜の明るまで番して居て呉れと云ひました 梅「ハテナ大變  
 な事とい何だらふ 兵「其手紙も書て有ませんか 梅「書てい有が餘り短くて分

らさい夫よ手前よ番しろと云ひ附けた用事此手紙の用事とい別かも知れぬ 兵「  
 イエ別でい無い様です兎も角私しの撫子よ言附かつた通り是から行つて朝まで番し  
 ますから貴方の何とでも貴方の思ふ通りに」此時西村の梅花郎又向ひ「兵太郎殿  
 が番をして呉れるから夫よ越した事の無い若しもの事が有れば兵太郎殿から君の許  
 りまで知らせる事は願ひが好らふ 梅「左様サ爾して貰ひん兵太郎の心得て「宜しい  
 私しの手よ合ぬ事が有れば直ま宿まで駆け附けます一何か此様な事が有りいせぬ  
 かと心配して態々田舎から出て來て好事を仕ました是なら親父の溜た百圓の大金を  
 遣ひ捨ても惜くありません」流石よ西村の職掌だけ早くも百圓の聲よ不審を掛け  
 「ナニ親父が溜めた百圓の大金とい」疑ふ如き言葉を吐く兵太郎の之を失敬と  
 や思ひけん慨然と爲りて「ハイ私しの父の昔しから少しづつ溜めました其證據は  
 父の持て居る金貨ハビカ／＼光つて居ますけれど昔の金貨です 西「昔の金貨  
 とい 兵「昔し癩第十八世王の時鑄た者で残らず癩王の顔が附て居ます」西村の  
 何事をか獨り領首き「フム夫の感心だ癩王の顔の附いた金貨ハ此頃少いので欲しが

る人の所へ持て行けば二割ほど高く買ふせ己も實の欲いと思ふ一人だがお前其中の一枚を一圓五十錢ばかりよ賣て呉れまいか」日頃古銭などを愛せざる西村が何故も斯る事を云ふかと梅花郎獨り怪しむうち兵太郎の西村に向ひ「イヤ其様よ賣らずとも一圓の一圓だから一圓よ引替へても好けれど今夜の今云ふ通り急ぎますから」

と云ひ終りて梅花郎も別れを告げ兵太郎の此所を立去りたり後梅花郎の西村に向ひ「君は何故アノ金貨の事おどろ氣を附ける 西」何故って彼奴の何ふも怪いから 梅「ナニ怪しい事無い此上も無い正直者だ 西」彼奴の親父もかへ 梅「爾とも 西」併し僕に癩十八世の顔を鑄込んだ金貨を聞き何ふも彼れの親父を怪しく思ふよ其譯の村津伯爵の言立よ伯爵の元來王權黨の人間だけ兼てより癩十八世の顔の附た金貨を澤山集めて居た所先頃迎賓館で蟬澤と歌牌をした時其金貨を二百圓ほど出したと云ふ事だから蟬澤が殺された時其衣囊に入れて居た金の大癩癩十八世の顔が附て居るのだ夫が爲めフエレットでの私と海岸の商店へ目を附け若し買物よ來る人の内で其金貨を出す者の無いかと見張って居たけれど遂に其目的を達しな

かつた此事から考へると兵太郎と其親父が怪しいで無いか 梅「併し僕に決してアノ正直な根脂取親子が人殺しおどろしやうと思ひぬ昔から少しづつ溜た金だから其中癩王の時の金が交て居るの當り前の事だもの 西」併し此で争つた所が初まらぬの候に僕だけの意見が有るから此事の此切又仕やう」斯語らふ折しも再び以給前の仕來り梅花郎に向ひて又も一通の手紙を出したれば梅花郎の開き見るよ是も其文極めて短かく「梅花君よ今直ち此馬車よ乗りて村津邸へ來れ何故なるかおどろ怪しむ勿れ怪しむ中より手晚れと爲り悔ゆとも及ばぬ事と爲らん至急よ來れ至急」

「」とのみ認めあり其文字の書きし者とも違ひ又小枝嬢の筆も成り老とも思われぬと兎も角直ち行く外なし此馬車と記せるから此の心す迎ひの馬車來りて門前よ待てる事必然されば梅花郎の其旨を西村に語り飛ぶが如くよ外よ出れば果して一輛の箱馬車あり其馭者梅花郎又向ひて「お早く」と迫立るよ由り梅花郎の夢中よなりて掛け入れの中より柔かよ我手を取る者あり誰れかと打見て梅花郎の震ひ上れり嗚呼此馬車の中よ在るの梅花郎が毒蛇よりも忌嫌へる初音嬢なり小枝嬢の敵



第三十回

なり

毒蛇は同じき初音嬢は思ひ掛るく手を握られ梅花郎は飛退かんと爲したれど馬車の中とて退くも退かれず「オヤ貴方ですか」と其顔を盛むれば 初「ハイ私しですよ初音ですよ是非とも話し申したい事が有るので斯して迎へに來ましたのが悪いのですか」梅花郎の情も無く「御用なら手紙を書てお寄越しなさればお返事を出しますものを 初」でも貴方手紙の書れぬ事柄も有りませよお目も掛って直々お話し致さふと思ひまして 梅「夫で直よ話しなさい成る可く切縮めて用事だけを」愛想も無き此言葉は初音の少し恨みを帯び斜に梅花郎の顔を眺めて「貴方大概お察しが附き相な者ですのよ」 梅「私しは貴方の心おと察するのの大嫌ひですぞ遣込れども嬢は怯ます」で申すは是れまでも幾度か口まで申出ましたけれど毎も「思はぬ人よ妨げられ」夫は貴方此巴里へ來しつてから二度しか宅へ來つしやらす」 梅「夫れから 初」爾は迫るさらずと氣永くお聞願ひます 梅

若し氣が短ければ此儘馬車から飛出します此上氣永くの出來ません 初「其様お事を仰有らずよサ」貴方初めて逢た時を覺へて居ますか 梅「ハイ確か迎賓館の蹈舞の夜かと思ひます 初「ハイ彼の夜貴方の妹小枝と蹈舞をさつて」私しの惚々と貴方の姿ばかり見て居ましたホンよ初めて見て直其時から「獨り想ひを焦しました」梅花郎の宛も手を觸るゝさへ汚らひしと云ふ振よて馬車の隅よ小くあり返事さへせず此時馬車の兼てより嬢の言附を受けし者か人通り最稀れある枝町よ入り極て遅々く歩むのみ嬢の返事さきを見て猶も言葉を續け其後二度ほどお目よ掛りましたが貴方の父と話するばかりで私し共よの口さへお聞なさらぬゆゑ何ふかして思ひの丈をお知せ申したい者と夫のみ心よ附けませうらアノ蟬澤の事件が起り貴方一人が疑はれる事よなりました私しは最ふ日頃の願ひに此時と女の身に有れも無い警察官と言争ひ貴方よ掛る疑ひ解開して上ましたの未だお忘れよ成ますまい 梅「素より罪の無い梅花郎疑ひの晴れるの當り前です 初」今と爲り何と仰有つても彼の時よ誰も貴方を信じませぬ貴方を助け度ばかりよ私しが進み出て曲者の姿を見たあと



と見もせぬ虚を吐たればこり清き女の言葉より警官も勝つゝ勝れずー」梅花郎の嘘  
と云ふ此意外なる言葉を聞き仰天するほど打驚ろき「エー何と仰しやる貴方アノ  
時曲者を見認めなかつたのですか 初「ナニ私しが認ませう警官又對つてハ田舎者  
の様に有たと云ひましたが彼の曲者の田舎者の様に無い事の能く存じて居りました  
けれども爾云のねバ貴方は掛る疑ひが解けぬと知り偽りりと申したてましたエ梅花  
さん貴方の爲めに偽りぐらいハ厭ひません未だ此上の事柄でも貴方が斯しるど仰  
有れば傍目も振らずに致しますエ貴方斯う申せば何とやら思ふ被せる様ですがナニ  
思などよ被せませう貴方とても猪獵又私くしの命を助けて下さつたのです者を貴方  
と私しのお互ひに助け合ふ縁を生れたのでういませう」梅花郎ハ此の恐ろしき言葉  
又擲まれ今ハ唯だ彼の大猪を射留めしを悔めるのみ初音嬢ハ猶ほも情は迫れる聲を  
振るハせ「斯あるからハ身の耻まで打明けて心の誠を見せませう私しが男を愛する  
のハ今が初めでハ有ません貴方の前ハ命までもと思ふ男が有ましたが今ハ最ふ又  
と無い悪人と分り寐ても醒ても憎さ悔しさ堪へません其男の行ハ罪と云ふ罪ハ

犯さぬ事あく盗みもすれば騙もしー其上よー 梅「私しを殺さふとまで仕たのでせ  
う 初「ハイ貴方を殺さふとした其森川子爵です初め私しが森川ハ逢つた頃の年端  
も行かねバ世間も知らず浮々と其口先に乗せられて彼れの言ハ次第はありました父  
よも彼れを紹介して無理に我家へ出入させ其上貢で遣た金も少しの事での有ません  
其中次第又世間も見彼れの汚い心も分り遂に愛想が盡ました夫ゆる綺麗は手を  
切る爲め先日メシナクハ別荘まで彼れを呼び其事を告ましたところ彼れハ早くも私し  
の心を知り貴方を愛する事までも見て取つてー 梅「夫で私しを狙つたのでせう  
初「ハイー爾思つて見れば私しの爲めに貴方の浮雲い目ハ逢ました夫でもアノ時萬  
が一貴方の身ハ怪我でも有れば私しハ決して森川を赦しません其場で直ハ鉄砲を取  
り射殺して貴方の仇を復ますすハイ私しハ此通りの女でも無禮を受けてハ黙つて居  
ません必ず其仇を復します」と眼ハ怒れる光りを帯び梅花郎が顔を見る様ハ其心の  
鏡さを察す可し 初「夫からして森川の私しハ捨られた腹癒に妹小枝を手ハ入れん  
ど様々の事をしましたが夫も思ふ様ハ成らぬ所から又も私しを怨み初め此巴里へ歸

ツてからと云ふ者の毎日の様又私しを苦しめ参ります彼れの心での何ふあつても私しを妻とする氣ですが私しの最ふ彼れの汚らひしを見抜たからよ死でも彼れが望みよの従ひませせん今の所での彼れと私しの敵同士も同じ事です夫も父伯爵が今までの通り達者で居れば又相談も有りますが父の病氣で日は増し衰へるばかりです父よ若しもの事が有れば私しの身の守つて呉れる者も無し爾なれば又森川よ何の様か目よ逢されるかと夫が今から苦勞です何ふか貴方が切ての私しの思ふ半分でも私しを愛して下されば何れ程嬉しい事ですや貴方唯た一言愛するを仰しやつて下さいまし貴方」と口説たつれど梅花郎返事を爲さねば嬢の殆ど腸を断つ悲き聲よて「貴方は捨られての此世に樂しみも有ません」と言ひながら梅花郎が首よ手を掛け其身を梅花郎よ投げ掛けて残る言葉の涙を爲り梅花郎が身を漂ひせるばかりあり梅花郎若し木石よ非ずんば此所を切抜んと難しと云ふ可し

第三十一回

我が首つたまは噛り附く女の拳固を以て拂ひ難しと云へる語あり梅花郎の今實よ其

語の境よ迫る者なり暫し持餘してありたるも争で汚はしと思ふ初音嬢を愛す可き漸やくよ心を勵し辭し其の手を取りて推退けながら「了ません私しの貴女を愛する氣は有ません何と仰しやつても愛する心が起りません何時までお待ちさつても決して貴女を愛する時無いのです早く思ひ切てお止ささい」と最男らしき言葉よて明かに言切りたり初音嬢の宛も毒蜂よ螫されし如く此言葉を聞きて飛返ると見る間よ今まで涙よ漂ひたる目の忽ち乾き眼よ毒々しき怨みの光を放ち信と身を構へ直して「貴方の女よ怨みがあると云ふ事を御存じですか一女の身よ此上耻の搔せやうが有りますか」梅花郎の何の答へも無く嬢の顔は口惜さよ堪へざる如く「覺へて居つしやい期と此怨の復しますから一必ず後悔させますから一」梅花郎の充分落着きたる聲よて「貴女の怨みの固より覺悟です早く貴女の同類森川子爵よ爾云つて私しを狙ひせよと暗撃よさせると一私しも其方が結構です 初「ナニ私しが怨を復すの其様な軽い事では有ません他人の手などの假ません貴方の命も貴方の名譽も私しの手の中よ在るのです女の口より斯くも恐しき言葉を吐くの怨の爲めと云ひながら其心

の逞しきを察す可し梅花郎の嘲笑ひ良心は恥る様も悪事をした事の無い梅花郎です  
 私しの名譽の汚れません 初「爾思ふから間違ひます何から何まで知て居る此初音が  
 が前で其様を大奇口が利れずか初音が嘘を言立て判事を迷ひしたればこそ斯ふ助  
 かつて居る貴方です初音の心一ツで明日も貴方の牢の中は投込まれ首切臺に載せ  
 られます 梅「どの又怪しからん事を」 初「怪しがるか怪しからぬか心よ問へば  
 分りませう貴方が蟬澤を殺す所を初音の窓から見て居ました 梅「是は益々怪しか  
 らん其様な事を言ても誰れが夫を信じませう 初「ハイ誰でも信じます現は私しが  
 見た者を信じぬ人の有りません 梅「貴方の何を見て左様な事を 初「何を見てと  
 の嘘々しい畫も優る月の明りも貴方が蟬澤を殺す所をハイ此初音が見て居ました  
 愈々出て愈々恐しき此詭険ある初音嬢が言葉は梅花郎の火ツと怒らんと爲したるも  
 今の怒る可き時は非ずと早くも心を取直し充分調子を落着て「ナニ貴女と言争ふの  
 無益です前よの曲者を見たと言後よのまた梅花郎を曲者と云其様も後先捕ひぬ事を  
 言へ前の言立が嘘となり偽誓の罪の逃ません 初「初めの梅花郎を憐んで成る可く

彼れを助けんとて偽りを言ひたれど今の法官を欺きたる其後悔は堪へぬゆゑ斯く更  
 めて眞實を申立ると斯ふ云へば偽誓よの成りません後の言立が通ります假令は偽誓  
 の罪は落されても此言立が採用され貴方が人殺しの罪は落れば私しの怨みの晴れま  
 すから夫で最ふ本望です 梅「何とでも言立るが宜まひ私しは又我身と辨護するだ  
 けの舌が有ります 初「夫で最ふ何ふしても私しと敵同士よあると仰有るか 梅  
 「仕方が有ません何と仰有つても私しは最う貴方を愛する氣が無いから併し此上期  
 ふして一緒に居ても無益です私しは是で分れます」と云ひつゝ、早や馬車の戸を開か  
 んとするよ初音嬢の遮りて「イヤ未だ降る事の出来ません念を推す事が有ますから」  
 梅花郎の又席より復り「念と推すとの何の事を 初「貴方の妹小枝を愛し其愛に心を  
 引れて夫で私しを振捨てたのです 梅「イヤ唯貴方を愛する心が無いから振捨て  
 した一併し素より小枝嬢を愛します」小枝嬢を愛すと聞き初音の益々狂り狂ひて「  
 エ、悔しいアノ小枝めーアノ妹めー」と暫しが唇の齒を嚙切め雨の拳を握り詰めて  
 眼を見張るのみありしが又も劍の舌を弄して「幸ひ小枝も死掛て居ますから宜まひ

小枝が未だ息の根の有る中、貴方を判事、引渡します貴方が首切臺小載せられたと云ふ事を臨終の小枝に聞かせます爾すればアノ小枝も貴方は愛想を盡して死なす貴方の仕打は驚いて苦しみ死なす死なすは是が私しの腹癒ですイヤ臨終まで待つよ、及べぬ是から歸つて直小枝の頭許へ行き梅花郎の殺人の罪が露見して愈々首切臺に載られたと欺け、夜明までよ、悲みながら死で仕舞ふ爾だ是がナニより近道だ妹への恨みの是で晴れる」と言ひながら最嬉れしげにニコリと笑を含みし其心の底の知れざる悪計は梅花郎も此時ここの顔色の變るまで、驚きたり初音の氣味好しと云ふ面持よてサア梅花さん最ふ用事有ません孰れ判事の前よ出るまで、是切りでもならべです」と言ひつゝ、車馬の戸を開きたれば沈着たる梅花郎も踏む足さへ定まらず踰眼きながら大地に降りたり

第三十一回

馬車の中よて初音嬢が言ひたる恐ろしき彼の言葉の感しの爲めか但し又誠其心よて吐きたるか嬢が日頃の鬼々しき心よ合せて考へ見れば感しとのみも思はれぬ

梅花郎の氣も落着かず此儘に捨置て、我思ふ小枝嬢今宵の中よも初音嬢は如何なる責苦を受けんも知れず去りてて救ひ出す手便の無し如何にせば好らんかと思案さへ定まらねど立去るよも立去られず切めて、小枝嬢が病に臥る其室の窓の下よ行き餘所ながら様子を伺はんものどて眼を窓よのみ注ぎて其方へ進むうち向ふより我身よ潑と突當る男有り何者かと驚きて公園地の常夜燈よ其顔を透し見る隙さへ無く彼方より早くも聲掛け「オヤ梅花さん梅、オ、爾云ふ、兵太郎か兵、貴方何しよ此所へ」梅「お前こそ何故よ」兵「私し先程申した通り朝まで茲に居て呉れと撫子よ願まれて」梅「已に小枝嬢を氣遣ふて當も無く斯して來たのだお前と茲で夜を明さふ」とて其當りの腰掛けよ其腰を仰しつゝ、只管小枝嬢が寐間の窓をのみ眺め居たり、〇話し更つて茲に又小枝嬢が寐間の内なり嬢の先つ頃巴里に歸りしより名も知れぬ病に罹り日よ、衰ろへ行くのみよて殊に此二三日の寐床よ打臥せし儘眠りも遣らず醒もせず忠實なる撫子よ介抱せられて戀しと思ふ梅花郎の話を聞くのみ今、自ら我身の臨終に近づきたると知り切めて、我心の確なる中よ梅花郎の訪來よ

かして祈れども夫すら頼む當も無く空しく我呼吸を數へて其盡るを待墓む最も憐れある身の上といありぬ殊も今宵の程は父伯爵より撫子より暇遣りしとの事を聞き今へ忠實ある顔をさへ見ると叶はず妹の如く使ひたる女なれば我息の根の在中は暇乞より來るならんと其のみ樂みは待ち居れど意地悪き姉の爲めは堰留られてか夫とも直は追出されしか今十二時又近けれど入來る様子亦し心を慰むる者もなをど鈴を鳴し人を呼べ姉の侍婢ある恐しき來女來り却て我心を苦しむる種なれば枕許は消殘る燈を友として寂けれど人を呼ばず朱唇乾けど水を求めず思ひ遣るさへ堪難き一間の裏に唯一人皮ばかりある睫を開きて今ぞ此世の見收めと空しく此方の壁彼方の天井と眺め廻すは怪しや次の室と此室の堺ある後の中程は當りて氣味悪く光さす者こりあれ能々見れば怒りよ輝やく眼又似たり襖の半腹は人の眼の在る筈無く扱ひ我心の迷るかと猶も眸を定むれど迷ふあらで眼あり力無き身の震へるまでよ恐ろしき堪難けれど逃去る身の叶ふ可くもあらねば何人か我身を氣遣ひ我夢を破らしとて節穴より窺くもや在らんと幾度か心を鎖むれど是れまで窺く可き穴の

無き襖かれは其事更は合點行かず猶ほ怪しみながら見て居るうち眼は掻消す如く消へ失せて跡は指ほどの穴を殘せり今疑ふ所も無し誰れか特々彼の所は穴を開けて何時よりか我様子を窺ふあり斯も卑怯の振舞を爲すは誰れぞ小枝の之を推量し得ぬよあらねば斯る事を推量して人を疑ふも及ばぬ次第唯彼の穴を塞ぎ置か夫て事ハ濟む譯ありと瘦たる腕を杖として影より薄き身を起し漸くは寐臺を這降りつ虫より細き息を繼ぎて辛も襖よと寄添ひたれど手を揚げて其穴を探り試る氣力亦く熱の退きたる頬を當るに穴の所より入來る冷たき風宛も死人の呼吸の如く微かに其頬に當るよぞ愈々我心の迷ふ非ず確は穴を開けし者なりと總身の力を絞りて手拭を穴に當て指もて之を突入れつ次の間より窺き得ぬ事と爲し又も徐々と身を引摺りて寐臺の上は歸りたり寐返りさへ太儀なる此衰へし身軀をば無理に動したる事あれば忽ち總身は熱を發し一方あらぬ苦しみ覺ふる上痛く渴きを催したれば兼て醫者の差圖を受け斯る時よと備へたる枕頭の水薬を取り儘は唇頭を濕ほすよ不思議や藥の功見へしか今まで幾夜と無く快き眠りを得ぬよ引換へ暫しの内は眼氣さし凹みたる目を塞

さて何時開く可しとも思ひれずア、小枝嬢の眠れるうちに如何なる事も逢ふ可きや知らぬ事として是非も無し是より二十分間も過しかと思ひる、頃拔足して階下段を登り来る者あり別人ならず初音嬢あり嬢の衣囊の裏は何やら小さな薬瓶を隠し持ち傍目も振らず小枝嬢が居間の入口より進み寄り一方の衣囊より合鍵を取り出し難なく其中に進み入りしが此時は是れ夜の一時あり村津家の邸内より初音嬢より外へ起居る者の有りとしも思ひれず小枝嬢が身の上の今風前の燈光ある可し

第三十三回

初音嬢が侍婢東女と云へるの素西班國の醫者何某の女なり何某の人を救ふの術と云ひる、醫師の業を営むは似ず心の正しからぬ者よて或藥種屋と仲間を組み世の悪人は頼まれて私に毒藥を盛り與へ非常の謝金を食りて不義の富貴を極むるうち其事終つて現れて詮議の上死刑と爲りたり東女の其娘よして父が死刑と爲りし折り身代までも没取せられ世間の人よ見捨られ身を寄する所さへ無かりしを今世も無き初音嬢の母君憐れみて救ひ上げ娘初音の侍婢と爲したり斯る次第なれば東女の心好か

らぬ女あれど初音嬢が言葉よの従ひぬと云ふ事あく殊よ父の業とせし毒藥の事さへ心得居りて其上曾て父と組合を作り居たる悪しき藥種屋のうち今巴里より來りて藥舖業を営める者も有るよ由り東女の初音嬢の差圖よ從ひ其藥舖より様々の毒藥を取寄せて小枝嬢を苦むるあり小枝嬢が疾と爲りしも之れが爲めと知る可し夫の置き初音嬢の梅花郎よ耻しめられ其恨よ堪へ兼て今一思ひよ小枝嬢を無き者よせんと決心せり今までの唯だ醫師よ見破らるゝを恐れ弱き毒藥よて徐々と殺す事を計みたれど今宵の其手便を變へ一呑よて命を絶つ可き最強き毒藥を瓶よ入れ之を隠し持ちて小枝が寐問へと忍ひ入りしに小枝の先程呑たる水藥の内よ東女が混ぜ置きたる阿片丁幾の効驗よて前後も知らず眠れるよと初音の仕濟したりと其寐臺よ身を寄せて暫し寐息を伺ひしが獨りニツコと領首きて衣囊より彼の小瓶を取り出し一滴も外へ溢れぬ様よと先づ硝燈の心を掻立て小枝が顔の上よ俯伏し掛り左りの手よて瓶の口を抜き右の手よ其瓶を持ち小枝が口へと差附けたり差附けながら其手先の霞へる景色さへあさい女に似氣あき其度胸の逞ましさを知る可しア、小枝が命の今瞬とする



間をも保ち難し此毒薬と一口吞まば息を繼ぐ暇も無く聲も得出さで死する可し危し  
と云ふも仲々あり初音が手の益々延び瓶の愈々小枝嬢の乾きたる唇頰に近づきて早  
や其間一髪を容ざる時と爲れり此時何者か横合より初音が手を確と取りたり初音  
の驚きて振放さんとするも力強くして離さばこそ去れど初音の度胸の定りし女あれ  
ば取れぬがらも騒ぐ色なく彼の薬瓶を左の手で持返へて之を衣籠に隠し終り静後  
を振向き見れば小枝の侍婢撫子あり忠實ある撫子あり抑も撫子が如何よしして此所  
來たるぞと問ふは宵の中村津伯より暇と出され直此家を引取れと言附られしも撫  
子の承知せず此家を出されては今宵泊る可き宿も無き身なるを如何よし主人あれはど  
て又如何は暇を出したればとて直引取れとの非道あり何ふありても夜の明るまで  
の出去るとおらずとて堅く伯爵と言争ひ終り明朝まで此家に留置れる事と爲れり去  
れども邪慳ある初音嬢の直撫子を一間の中閉籠めつ外より固く錠を叩いて小枝  
に暇乞するともへも禁じ置きたるは撫子の初音の計略を知るが故に小枝嬢の身を氣  
遣ひ如何よししてか其室を拔出で今此所に入り來りて斯くの初音の手を取り留めたるを

り初音が怒りて叱り附けんとする口と撫子の早くも手よて塞ぎ無言の儘よて静か  
次の間引摺り行けば初音の瞋れる目皆を見張き「コレ何をす侍婢の身分で」  
前ハアノ室を出る事成らぬと固く言附けて錠まで叩いて置たのよー 撫黙れ暇  
を貰ったから最ふ侍婢でも無ければ主人でも無い閉籠られて居られぬから兼て用  
意の合鍵で戸を開たのよ不審儀の有る舞いコレ悪女コレ鬼娘め先程から三時間ほど  
垂幕の後忍んで居て手前の仕打を見て居たぞ今まで氣永く待て居たのよ充分の證  
據を認め其場で取て押へる爲だコレ言譯が有るか」初音嬢の益々怒り「侍婢の身分  
で何をす 撫何をすのか云て聞かせる手前の毒薬で小枝嬢を殺さうとした事  
を忘れたか其證據の手前の左の衣籠に入居る夫ばかりで言拔をすと思ひ未だ  
證據を蓄へて有る手前が昨日小枝嬢を勧めた薬を半分わけて直は化学師とやらの  
店へ持て行き昨日の中分折を願った所アルセニツと云ふ毒薬の分子を含んで  
居るとして詳しく書附は仕て呉れたから其化学師を證人は頼み警察へ訴へるばかりの  
手続きを附けて有る是でも此撫子が欺されると思ふのか」絶体絶命の場合に迫れど

初音の怯む色もなく「盗人猛々しいと手前の事若し昨日の薬の中は毒薬が交つて居たらば夫の手前が入れた證據手前の誰か頼まれて妹小枝を殺す積で、最ふ斯ふ分れば捨置れぬ父の前へ引出すからサ来いサア」とアベコベは撫子を引立んとする此收りの如何わらん

第三十四回

「父の前へ引出すサ来い」とアベコベは手を取りて引立んとする初音嬢を事どもせず撫子の鋭き聲よて父の前でも誰の前でも撫子の恐れいせぬが夫より前よ云て聞せる事が有る時でも出せば此通り短銃を持って居るぞ」と云ひつゝ、小形の短銃を差示しつゝ「其上此窓の外よ兵太郎も梅花郎も待て居るゆゑ此窓を開けて短銃を放ちさへすれば夫を合圍ふ助けに來る逃れぬ所と斷念めてサア静よ開けコレ悪女手前のナ此巴里へ歸つてから小枝様を殺さんどて侍婢賚女を手先よ使ひ様々の毒薬を拵へた覺へが有ふ此撫子の宵の中賚女の室へも忍び入り殺らざ毒薬の入物を取て置た是から巡查を呼んで來て證據と共に賚女と手前を引渡すから爾思へ手前が兼て小枝様を

憎む事梅花郎が証人だ手前のコレ伯爵の娘よ生れながら非人よも劣た魂性アノ森川子爵と同じ事だ此前森川が小枝様の寐間へ忍び込だも皆手前のさせた業是より伯爵の前へ出れば皆其證據を伯爵よ見せて遣る」と言ひ責れども初音も去る若騒ぐ色あくせ、ラ笑つて「云ひして置けば放圖も無い手前の頼む梅花郎も兵太郎も森川よ上越す悪人フェレットの別荘の前で蟬澤を殺したのが梅花郎で其金を奪つたのが兵太郎夫で二人の手先よ使ひれ蟬澤を呼寄せた手前だ何も角も能く知て證據まで持て居る此初音が一言巡查よ多言たら手前等三人の命が無いぞ自分の事を柵よ上げ巡查を呼ぶこの片腹痛いへん他人の事いぬが好らふ」と飽までも毒々しき此言葉をも聞も終らず撫子の打笑ひ「人を威すよ事を欠き作り事よも程が有る蟬澤の事なら此方から言て聞せる別荘よ居る内よ手前こり蟬澤よ思ひを掛け様々の文を遣り彼れを別荘まで呼寄せながら其文の一通が撫子の手よ入て居るのを知らぬとハ淺蕙ナコレナ蟬澤が夜半よアノ松の木の下へ行たのも全く手前の文を探す爲めだ手前ハ兼て蟬澤と約束しアノ松の樹の節よ在る凹んだ所を手紙入とし手前が日の暮よア

ノ中へ手紙を入れ、一夜の蟬澤が忍び来て其返事を入れて置く其翌朝の又手前が散歩し事寄せ松の木の手紙へ行き其手紙を取出した幾度と敷知れず此撫子の窓の中から毎も蟬澤が同じ刻は松の木の手紙へ忍び来て両手を擧げて節穴を探るのを不審と思ひ或夜宵の中先へ廻りて節穴を探して見れば手前の手紙が入て有た今でも松脂の匂が有から其手紙が何より證據此の蟬澤の殺される直前夜だ其文句を聞きふか一昨日の御目も掛りしも心迫ま言残せし事あり明夜の父も迎賓館へ行き其歸り遅き筈ゆゑ是非々々御出被下度話し度き事山々なれど御目もじの節と言残し候一と有る此れで見れば蟬澤の手前が呼寄たもの疑がひ無い手前ハ梅花郎を見染めてから蟬澤は愛想を盡かし人を雇ふて殺させる爲め此様を厭らしい手紙を認め夫を撫子が先へ廻りアノ節穴から出したの蟬澤ハ爾とも知らず今夜も茲に在る筈だと暫く探して居る内アノ通り射られたのだコレでも言抜る言葉が有るかコレ悪女鬼嬢め一」と證據を擧げて言責れば毒蛇又均しき初音嬢も今の逃るゝ其道をく言返さん言葉も出ず漸く枯れたる聲を絞りて「其様お作り事ハ聞き度くあり早く出で行け撫

「出で行けとて出で行く者か今撫子が居無くなれば手前ハ又懲りずまよ小枝様を何の様な目も合すも知れぬ窓より此短銃で合圖をすれば兵太郎と梅花郎ハ直交番へ掛附けて四人の巡査を呼んで来る約束ゆゑ手前を巡査引渡し其上で出て行て遣る」と云ひながら早や窓の戸を推開かんとす初音も今の一生懸命力を以て手前ハ撫子よ短銃あり叶ふ可き筈も無く口を以て言込るも撫子よ證據あり證據ハ勝つと思ひも寄らず必死の工夫を廻らせて心を迷はず外なしとや思ひけん忽ち言葉の調子を替へ「コレお待よコレ撫子お待と云へば相談が有のだから」と云へど撫子返事せず初音ハ猶も聲を柔げ「撫子お前も近々に兵太郎と婚禮する筈で無いか今五千圓も有て御覽な何れほど樂よ世が送れるかも知れあいなナサ私ハ幸ひ金と云ッてハ不自由の無い身だから其證據物を賣てお呉れ其手紙唯一ツを五千圓よ一其上で音無し此家を立退き一生他言をせぬとならハ其立退料よ五千圓都合で一萬圓のお金を遣るからナ嘘などハ言あいな差當り私の居間よ二千圓の有のだから手附として夫れを遣りお前が故郷へ歸た時其土地の銀行へ婚禮の費用として三千圓送て遣

る併し故郷と此の巴里との餘り道程が近過て又も私しを威しに來ると了るいから其  
 事の無い證據よ米國へ行ても呉れ爾すれば残る五千圓の米國の銀行で受取る様今か  
 ら米國へ送つて置くエお前合せて一萬圓といふ太したお金だよ前と兵太郎と一生稼  
 いでも出來ないよエ撫子爾お仕事爾してお呉れるエ後生だから」と密より甘き言葉  
 よて口説立つれば實よや金ほど強き者の無し怒り狂ひし撫子も怒れる顔何時しか寛  
 みて「エ初音様一萬圓と仰有りますが貴方の身代で一萬圓の安過ぎます 初」で  
 の思ひ切つて一萬五千圓此上の最ふ出せぬウンとお云ひお夫がお前の身の爲だよ」  
 荒れ荒れたる涙風も今の事あく治まり行く様子見へたり

第三十五回

一萬五千圓といふ大金あり誰か心を動さざる撫子の之を聞き初めの様子と打て變り「  
 でも米國まで行くの遠いから」と云ひながら思案顔なり 初「何だ子米國位が  
 撫」だつて私しが彼方へ行き着かぬ先よ小枝様のお命が無なつて仕舞ひます 初  
 「夫りやお前が此方よ居たとても小枝の何ふせ最ふ助ら無いのだ」 撫「詰り貴方

のお積りの斯きんでせう私しが邪魔よ成るので金を遣て追拂ひ其間よ望み通り妹御  
 を亡き者にすると仰有るのでせう」初音嬢の物凄き笑を含み「本統よお前の分りが  
 早いよ早く云へば其通りサチ好じや無いかウンとお言ふ 撫「爾ですチ積り他人の  
 命を一萬五千圓よ賣る様者で」 初「賣あくても何ふせ死ぬるのだもの賣たから  
 とて何もお前が殺したと云ふ譯でい無しサア早く詰とお言ふ其中よ又小枝が目を覺  
 すと面倒だから 撫「ナニ未だ目を覺し仕ませんよ先程呑だ藥の中へ毒女が阿片  
 丁幾を入れて有から朝までの大丈夫ですが一萬五千圓から上へい行きませんか」初  
 音の早や我謀事の成りたる思ひを爲し「爾さ是から上の一文も出せぬいよ併しお前  
 アノ手紙を今持て居るのかエ 撫「ハイ持て居ますとも 初「夫でい直よ賣買しや  
 う私い是から居間へ行て手附けの二千圓を持て來る好かエ直よ引替だよ」と云ひつ  
 立去らんとするを撫子の暫しと止め「イヤ夫の無益です未だ此室を出る事の出來  
 ません」初音の驚き「オヤお前の何を云ふ承知して置きながら」撫子の顔よ嘲り  
 の笑を含みて「ナニ未だ承知のしませぬよ實の節穴よ有たアノ手紙よ貴方の名前

も蟬澤の宛名も無いから其所の念を推す爲め貴方の心を引たのです是で最ふ貴方が自分で書た事に分りました自分で書た者で無ければ何も其様は恐しがって一万圓を買ふると云ふ筈の無いのですから一 初「イヤ其様は無駄口の聞きたく無いサアお前の今云つた事を承知かへ承知で無いかへ夫だけ言て呉れ、は能いのだ」撫子の火と怒り又も言葉の調子を換へて「コレ悪女撫子が其様を相談に乗ると思ふのか金も目が呉れ小枝様の命を賣ると思ふのか兎娘其様を汚らうしい相談の手前の愛する森川よするが善い森川も金よ目が呉れ金と聞か手前の親迄殺すたらふ親も殺し妹も殺し世よ邪魔者が無あつた上で森川と夫婦よあれ悪人同士の似た者夫婦だ其代り手前と森川の當前の坐敷で婚禮の出來ぬから覺て居る首と首とが無成た上で夫婦よあれ此撫子が有中の何しても手前と首切臺へ載るから今の中は覺悟を仕るサア」と前よ優し撫子の勢よ初音の敵する力も無く係蹄よ取られし狼の逃端を求むるよ異あらず撫子の少し言葉を低くし「今の斯ふして敵同士でも素い主人の片端だから一爾だ首切臺よ乗るが否あら約束を定めて逃して遣る手前は今も言つた通り二千圓の金を持つて居るから夫を旅費よ今直と侍婢輩女を引連れて此家を掛落し先程手前が此撫子よ言た通り亡命して米國へ逃て行き生涯此國への歸つて來るナ爾すれば其後で此撫子が伯爵よ説勸め此家の身代を半分送つて遣る其上よ若玄願と爲らば手前の愛する森川子爵も後を追て米國まで行く様よ撫子が計らつて遣る未だ今夜の二時だから今此家を立出れの外に兵太郎が待て居る故此撫子が兵太郎よ言合め手前と棗女を夜の明けぬうち港場まで連れて行き誰れの目よも掛らぬ様無しよ船へ乗せるからサア早く返事をしる警察へ引渡すか但し生涯米國へ逃て行くか一米國の遠いけれど此撫子よ頼めたから自分も行くのが厭で有る舞いサア何ふだ早く返事をしろ一夫から未だ言ふ事がある一旦米國へ行た上で又引返して來て成らぬから其事の出來ぬ様よ手前等が無事よ米國へ着た時分に此撫子から手前の罪を警察へ届けて置く爾すれば歸り次第よ捕まるから一生歸る事の出來ないサア其爲よ手前の衣袋よ入て居る其毒藥も此方へ渡せ之を警察へ届けるからサア何ふだ米國へ逃るか此儘警察へ突出されるか返事の無いの米國へ逃る覺悟と見える好々其毒藥を受取らふサ

も蟬澤の宛名も無いから其所の念を推す爲め貴方の心を引たのです是で最ふ貴方が自分で書た事に分りました自分で書た者で無ければ何も其様は恐しがって一万圓を買ふると云ふ筈の無いのですから一 初「イヤ其様は無駄口の聞きたく無いサアお前の今云つた事を承知かへ承知で無いかへ夫だけ言て呉れ、は能いのだ」撫子の火と怒り又も言葉の調子を換へて「コレ悪女撫子が其様を相談に乗ると思ふのか金も目が呉れ小枝様の命を賣ると思ふのか兎娘其様を汚らうしい相談の手前の愛する森川よするが善い森川も金よ目が呉れ金と聞か手前の親迄殺すたらふ親も殺し妹も殺し世よ邪魔者が無あつた上で森川と夫婦よあれ悪人同士の似た者夫婦だ其代り手前と森川の當前の坐敷で婚禮の出來ぬから覺て居る首と首とが無成た上で夫婦よあれ此撫子が有中の何しても手前と首切臺へ載るから今の中は覺悟を仕るサア」と前よ優し撫子の勢よ初音の敵する力も無く係蹄よ取られし狼の逃端を求むるよ異あらず撫子の少し言葉を低くし「今の斯ふして敵同士でも素い主人の片端だから一爾だ首切臺よ乗るが否あら約束を定めて逃して遣る手前は今も言つた通り二千圓の金を持つて居るから夫を旅費よ今直と侍婢輩女を引連れて此家を掛落し先程手前が此撫子よ言た通り亡命して米國へ逃て行き生涯此國への歸つて來るナ爾すれば其後で此撫子が伯爵よ説勸め此家の身代を半分送つて遣る其上よ若玄願と爲らば手前の愛する森川子爵も後を追て米國まで行く様よ撫子が計らつて遣る未だ今夜の二時だから今此家を立出れの外に兵太郎が待て居る故此撫子が兵太郎よ言合め手前と棗女を夜の明けぬうち港場まで連れて行き誰れの目よも掛らぬ様無しよ船へ乗せるからサア早く返事をしる警察へ引渡すか但し生涯米國へ逃て行くか一米國の遠いけれど此撫子よ頼めたから自分も行くのが厭で有る舞いサア何ふだ早く返事をしろ一夫から未だ言ふ事がある一旦米國へ行た上で又引返して來て成らぬから其事の出來ぬ様よ手前等が無事よ米國へ着た時分に此撫子から手前の罪を警察へ届けて置く爾すれば歸り次第よ捕まるから一生歸る事の出來ないサア其爲よ手前の衣袋よ入て居る其毒藥も此方へ渡せ之を警察へ届けるからサア何ふだ米國へ逃るか此儘警察へ突出されるか返事の無いの米國へ逃る覺悟と見える好々其毒藥を受取らふサ

ア渡せ渡さぬかサア」と詰り寄する劍幕も今の逃れぬ所と諦めしか初音の怒ら怒を催ふし「侍婢の分限で優しく出れば附上り最ふ勘辨の出来ぬから手前も一層此毒藥で殺して仕舞ふサア欲くば見事取て見よ口へ當れば夫切りで命の絶へる此毒藥呑で初音の足許へ倒ほれるか證據の手紙を此方へ渡すか」と云つひ、小瓶を取出し其口を抜去りて近寄らば振掛けん身構へたる勢ひの女の業を思ひぬれず撫子の之を事どもせず手短銃を持ちし儘よて一足詰り寄せつ「最ふ斯ふなれば會釋の無い窓を明けて合圖をし兵太郎は巡査を呼ばせるから邪魔せずと其所退け」とて窓に進むを此方の推留め推留らるゝを振拂ひ行んとする遣じと争さふ推しつ推されつするうち初音の長き髪を踏み仆れんと踰越くよぞ撫子其隙を得て早くも彼の毒藥を奪ひ取らんとするよ此時早く彼の時遅し初音の逃がれぬ所と知り忽ち其小瓶を我口に當て餘滴をも殆さす唯一息にグイと呑干したれば何かの堪る事の有る可き液劑の効め誤たず夥だしき血を吐いて其儘仰向様も仆れたり是れ毒々しき初音嬢が終なり倒れし儘にて死果たり是より撫子小枝梅花郎森川等の身の上猶ほ如何なる物語りある

第三十六回

心柄どの云ひながら初音嬢の妹小枝を殺さんが爲め用意せし毒藥を侍婢撫子に見破られ自ら呑みて死了れり翌朝よ到りて其死骸を認し者あり家内の騒ぎ一方ならず早速醫者をも呼びたれど全く己れと毒藥を呑み自害せし者よ相違なければ之が爲め疑ひを受くる人も無く數日の中は葬儀も済みたり是よりして又と小枝嬢を苦むる者も無ければ今まで運毒藥よて一日くは衰へたる嬢が身も一日くは病愈え未だ幾日も経ぬ中も寐床を離るゝまでと爲れり又彼の侍婢撫子も一旦ハ服を出されしかど初音が死せし爲め伯爵の我家の急な寂しくありしを患ひ一人よても家内の多き事を願ふよ由り之をも又以前の如く雇ひ繼ぎて小枝嬢も侍婢置けり去れば小枝嬢も今ハ我身の敵とて無く唯だ一人恐しき森川子爵のみあれと子爵の英國へ旅行して何時歸るとも分らねば是も亦當分の我を苦しむる氣遣ひあらじ斯く思へば俄よ世界の廣々と晴れ渡りし心地すれど醫師の診断ハ此上猶空氣の清き山舎に行き氣保養を

爲すと大事ありと云ふより小枝の父伯爵は連れられて撫子と共に再びフェレットの別荘へ赴く事と爲れり去れど此別荘の夏を消す爲めは設けし者よて今の早や秋と爲り時候は適せぬ所もあるよぞ海岸ある大旅館の二階をば幾間か借受けて一同茲に逗留せり此時同じく此大旅館に逗留せる人々の判事西村小西男爵梅花郎の三人あり彼の森川子爵が此中に加へらぬの人々を取りて此上無き幸なる可し。〇茲は是れ海岸の大旅館なり秋の日の早や西へ傾き猶ほ稍や暑さを覺ふれど海より吹來る微風洗ふよりも涼しく人の身体を爽かます此二階の縁側より立出て遠見の景色を指しつ親しげに語り逢ふ二人の年若き男女あり是なん梅花郎と小枝嬢なり梅花郎の隠さんとすれど現はるゝ我心を制し兼て「貴嬢が斯く早く能く成りおさらうどの思ひませんでした。小」是と云ふのも次第は二人の望み通り成て安心が出来るからです父も此頃では大層貴方を褒めて居ます」梅花郎の嬉しさを堪へぬ如く「本統ですか小」本統ですとも昨日も貴方のお噂を致し初めて見た時より餘ほど頼もしい男だと云つて居ました。梅」で若し一昨日もお話しやした通り小西男爵は頼み表向き縁

談を申込んで何ふでせふ。小」夫の未だ早過ぎます父のあの通りの昔し氣質で伯爵とか何とか肩書の有る者で無くて婿夫よせぬと云つて居ますから。梅花郎の顔の色を替へ「夫で何時まで待ても。小」ナニ氣永く待つ内は私しが段々と父の心を柔らげます夫よ最ふ小西男爵もあの通り骨を折り既よ昨夜なども父よ向ひ今時の伯爵だの公爵だのと云ふ肩書の何よもならぬ婿を取るよも肩書などを當よしていたないとて夫と無く貴方の事を賞て居ましたから其上に段々と私しから説教をれば遅かれ早かれ其氣よ成よ極つて居ます貴方其時まで待つ事の出来ませんか。梅」待つ事の幾等でも厭ひませんが其中よ森川子爵でも歸て来れば。小」ナニ大丈夫ですよ昨日も森川から父の所へ手紙が来ました未だ當分の歸る様子が無いと父が爾申して居ました夫よ最ふ森川が来ても私しは決つして逢ひません父よも其事を斷つて置きました。梅」でも貴嬢伯爵の彼の通り森川よ迷つて居つしやるし夫よ森川も既よ貴嬢よ目を附けて居るのですから彼れが歸れば又何の様な事をするかも知れません又私しどの決闘の約束をして未だ其方を附けずよ有ますし。小」ですが

ホンは氣永くお待ささい待つ内よの期と父の心を説柔げますから爾すれば事も無く夫婦ももなられますよ夫に貴方此後何の様な事が有ふとも最ふ決して森川と決別せぬ様にして下さい此はッかりのお願ひですから 梅イヤ外の事を何でも聞ますが夫ばかりの聞かれません素より此方から求める様な事ありませんが若し彼方から言掛られた時又の退くは退くぬ場合もあります」と斯く云ふ折しも村津伯の小西男爵西村判事と共に珠室より出来り「アー今日の拙者が大勝利だ梅花君祝つて呉れたまへ」と云ひながら機嫌よく小枝嬢の手を取りて一同と雑談しながら其方此方と散歩を初めたり梅花郎の毎日々没に到れば海岸よ出て鵜など射あがら一廻り運動するを常とせる故今日も最早や其刻限に近付きたればとて一同に分れて外よ出づれば怪しや旅館より右に當れる入江の岸に腰掛けて頻に吾を招く如き身振りを爲す一人の男あり扱ひ我が知れる人なるかと其顔を眺むれば件の男の雙眼鏡を其目よ當つる故何者あるや知る由なし去れど此邊より我郷里より出来る知人も多き事あれは若しや其内の一人あるか兎に角我れを招くは相違なければ先づ其傍に到らんと

進み行けども其男の猶ほ遠眼鏡を捨てざるの梅花郎をして我顔を推量せしめんどの戯れ爲るか頓て僅よ二三間隔たる所まで進むと件の男の急な海の方より向き其顔を彼方に隠したるゆゑ梅花郎の其腰掛けたる岸まで行けり何ぞ圖らん此男こそ今しも小枝嬢と噂せし我敵の森川子爵さらんとの梅花の打驚き「オヤ」と云ひつゝ其顔を見詰れば森川の最横柄よ「君よ少し用事が有から計略を以て呼寄せたのだ先ア逃すと茲へ腰掛け給へ」梅花郎の其失禮を憤ほれど小枝嬢は誠められし事も有れば漸く怒を鎮めて「ナニ君を恐れる身で無いから逃げもせぬ隠れもせぬが用事と何事だ」と問ひ掛けたり

第三十七回

「用事どの何事だ」と問ひ掛けたる梅花郎を森川子爵の横目に掛け「緩々と話すから先づ僕の様は斯う海へ向て腰かけ給へ若し知た奴は目附つて了ないから」梅花郎の其言葉に従ひて岸に腰掛「サア聞ふ言ひたまへ」森川の悪く落着きて「先づ事の起りから言ねば分らぬが全躰君と僕どの仲能く交際の出来ぬ生れ附だぜ 梅何



も仲能く交際するよも及ばぬ譯サ 森「爾とも初めて逢たとき君の僕に賽轉の事から僕を疑ひ僕と決闘をするばかりよ成た僕も亦君を正當の人物と思はず蟬澤を殺したのも矢張り君の仕業と思ひ人の前でも憚からず其噂をして居るのだ若し初音嬢が生て居れば其証據も有るだらふが流石の君だ早くも撫子を手先よ使ひ初音嬢の毒を呑せた 梅「夫の怪しからん 森「コレサ野暮を云ひ給ふ蛇の道の蛇だ遠く英國へ旅行して居ても君の爲る事の一々僕の胸へ分つて居るナニ僕が此方よ居さへすれば君あどを村津伯の許へ寄附けり仕無いのだが僕の居ぬ間よ君の旨く取入て今でハ小枝嬢を賞ひ受ける積りで居る併し小枝嬢の既ハ僕の方へ貰ふ積りよ内々伯爵へ相談もしてあるから僕ハ能々君の縁談を妨げよ歸つたのだ」此失敬ある言葉を聞き梅花郎の少し怒り「夫でハ僕に喧嘩を吹掛るのだサ 森「爾とも明かハ喧嘩を吹掛るのサ 梅「コリヤ面白い相手よ成ふ 森「併し喧嘩も喧嘩よ由るさ今君が蟬澤を殺した証據を以て其筋へ訴へるハ譯も無いけれど夫でハ手数が掛つて面倒だ僕ハチキバキと方を附け度のだ梅花郎の一步も退かず「何でいも相手よ成ふがチキバ

キと云ふら決闘が好でハ無いが君と僕との既ハ決闘の相談が出来て居るから 森「爾併しハ決闘の賽轉の争いサ今度の決闘ハ小枝嬢の道取りだぜ 梅「承知だ 森「既ハ小枝嬢を目的とすれば二人の中で一人ハ邪魔物だ自た奴が此世よ生て居ての後々まで勝た方ハ心掛りだ 梅「爾々 森「だから何方か一方が全く此世よ居無い者よ成らねば了ぬテ 梅「だから正當の手段を以て死ぬまで戦かへば君も満足だらふ 森「其通りだ其所だ併し能く相談を極めて置かねばならぬと云ふハ我佛蘭西でも此の頃の刑法で以て決闘を禁じて有るぜ夫れだから死ぬまで決闘をするよ云つて誰も介添人よなる人が無い何方か一方よ少しでも傷が附けば最ふ此れで名譽を雪げたからと云つて引分けるのが紋切り形だ斯様よ引分けられてハ面白く無いから介添人無しハ戦かばふ 梅「好からふ介添人と云ふ者のハ必竟暗撃さどよすることの無い爲めよ一々規則を守らせやうとて頼んで来るものだから若し兩方が堅く約束を守り正當の手段で戦ふ時に何も介添人の要らぬ事だ 森「爾とも介添人の無くとも決闘ハ決闘だからして誰れも知らぬ所で戦いふでハ無いが 梅「至極結構併し知

らぬ所どの何の様事所で 森「夫の後で相談するが兎も角君の介添人無して何方かの死ぬるまで戦ふと云ふ事よの異存の無いのだぞ 梅「少しも異存の無い 梅「夫でい詳しく話して聞せるが米國の西の方でい今でも何か二人の者が決闘する様な事が有れば唯其場所と時刻だけを定め醫へば人の通らぬ山道の様事所で決闘をするといふ既よ其場所と時刻さへ極れば兩方とも人よ知らさね様其時刻よ其所へ行き何發でも鐵砲を放合て夫で一方が死さへすれば勝た方知らぬ顔で歸つて來ると云ふ事だ僕に至極此仕方が面白いと思ふのだ 梅「成る程夫の面白い併し此邊よ其様人の通らぬ山道の無い様だぜ 森「爾さ此邊の山よ一番人が有るから勝た方直よ裁判所へ引出され人殺しの罪を受けるから却て迷惑サ其所で僕顔の適當の場所を探して有る君先づ立て此海の先を見給へ彼許よソレ霞の様よ見へる嶋が有るだらふ」梅「花郎の眺め見て「フム有るアレは海の中洲だ 森「爾サ中洲サ彼の中洲が最も適當の場所と思ふが何ふだ 梅「其譯の 森「其譯と云ふ者の至全骸アノ中洲の泥の集つた者で上よの所サよ兼葑などが生て居る夫で潮の退た時ハアノ通り見ゆるけれど

潮が來れば其底へ隠れて仕舞ふ舟おどが若し潮の來て居る時アノ上を通れば必ず泥よ掛つて進む事も退く事も出來ぬのだから誰も彼許へ行く者無いのだ最も彼許で戦いさへすれば誰に見附る氣遣ひも無い夫よ死骸の仕末も極便利だ其儘捨て置けば潮が來て流して仕舞ふし又潮の來ぬ中は最も蟹が出て來て其肉を剪み切て食て仕舞ふから身軀中が滅茶——よあり後で人が見出た所が誰の死骸だか少しも分らぬ是ほど都合の好い事無い 梅「成る程夫の妙だ能く其様を言い所が有た者だ 森「夫で誰でも勝た方が何食ぬ顔をして平氣で歸て行き天下晴れて小枝嬢を我物よするのだぜ 梅「好らふ 森「夫で君の船漕ぐ事を知つて居るかエ 梅「知て居るとも 森「夫で僕が二艘の小船を雇て置くから明朝六時よ必ず茲へ來たまへ茲から一緒に漕出すから 梅「船ハナニ一艘で能らふ 森「爾で無い別々の舟で無くて了さい其譯の足場よ由て大變お違ひが有るから誰でも先へ行て好い足場へ上つた者が何所へでも隠れて居るのだ隠れて居て對手が上陸したと見れば直よ鐵砲を打掛けるのだ 梅「夫も承知だが僕の鐵砲を持て居る 森「イヤ鐵砲から心配よ及ばぬ僕

が同じ銃を二挺持て居るから明朝茲へ持て来て何れでも君の好い方を撰取せる 梅  
 「心得た 森」夫での期と明朝の六時だぜ 梅「好々六時」と斯く言ひ切りて二人  
 の何氣なく右と左りよ立分れたり其振舞ひ大膽とや云いん向ふ見ずとや云いんア、  
 二人が勝負の如何あらん孰れか蟹の餌食と爲るや

第三十八回

世は決闘の數々あれど梅花郎が森川子爵と約束したる如き恐ろしき決闘の又と有る  
 まじ介添人さへ定めずして沖合遙かよ乗出し人の知らざる嶋に於て一方の死ぬる迄  
 の何發でも闘ふとの聞くさへも身震ひせらる梅花郎の此約束を心快く引受けたれど  
 旅館に歸りて情々と考へ見れば實は是れ愚の至りあり彼の森川の耻を知らざる惡漢  
 よて既よ我身を暗射よせんと爲したる事さへ有れば此度とても如何なる謀事を爲し  
 置きたるや知る可からず若し介添人ありて嚴しく決闘の規則を守らせる時の一人と  
 一人の戦ひは負けるとも厭はねど彼れ其心中の臆病あるも似も違らず此度は限りて  
 斯く大膽なる事を言出せしは必條我れを欺し打よする工夫を定めあるは相違なし夫

を知りながら闘ふの見すく彼れの計略は落る者あり世は望みある我が命を以て争  
 でお世間は捨られし汚らばしき彼れが命と取替へよある可きぞ斯く思へば一時の客  
 氣より淨々と彼の約束を爲せしこと返すくも我が相漏あり去れべとて今更此約束  
 を破らる可きよ非ず猶ほ思ひ返す時の彼れ既に世間の人は捨られたりと雖ども未だ  
 村津伯の捨られず彼れを此處に生し置きなば再び伯の許より來り言葉巧みに伯を欺  
 き又もや小枝嬢を苦しむるの必然あり彼れより言出せしこり幸ひ今彼れが命を絶た  
 ずば何時の時よか小枝嬢が爲め悪む可き大敵を亡ぼさんやと又も愈々決闘の事よ  
 心を決したり去れど此決闘の命を賭けての闘ひなり生て再び歸らざる用意あくては  
 叶はずと静かよ一問入り筆取出して一通の書置を認め我が死したる後の之を闘許  
 なる執事よ送りて我財産を然る可く處分し呉る、様其心得の廉々を書遣せり斯くて  
 臥床に入りし夜の十二時過ありしが僅よ五時間ばかり眠りて目を覺せば恰も好き  
 刻限されば起出て窓を開く天の一面は晴れ渡り秋の朝風身よ浸みるばかりよて地  
 上の淺霧は瑣されたり斯る時こり人目を忍ぶ決闘の屈強なれと身早く衣類を着更

め裏門の方へ至るは猶ほ起出たる人無ければ心安しと忍び出つ、約束の場所を指行  
くうち凡う二三町ほど進みし時しも向ふより早足に歩み来る女あり梅花郎が道を譲  
らんとする暇も無く女は早くも梅花郎は挨拶し「オヤ梅花さん大層お早ひで有り  
ませんか」と云ふ侍婢の撫子あり梅花郎の悪い所よて撫子は逢ひし者かなと心の  
内よて悔めども今の逃るゝ道なければ左あらぬ躰は見せ掛けて「お前こそ大層早い  
よ、撫實の子昨夜嬢様から暇を貰って兵太郎と共に父の許まで行きました、梅  
父との長右衛門か、撫「イエ長右衛門の兵太郎の父ですよ私しの父の所へ行って居ま  
した—貴方の何方へ」と問はれて梅花郎の返事困り「私しかエ私しの何さ獵人行  
くのさ」撫子の心敏き女あれば早くも様子を怪しみし如く「オヤ鐵砲も持たずま  
すか、梅「鐵砲—ナニ鐵砲の要ないよ貰ひ昨夜友達が沖台の中洲へ罝を掛たので今  
朝の鴨でも掛って居るだらふから一緒に罝を上げに行くのさ、撫「へ未だ鴨の  
時候で有りませんよ鴨は是れからズット寒くあらねば、梅「ナニ鴨も素走と  
云って早く来る奴も有るのサ、撫「アレ先ア鴨も素走り有りますものですか斯ふ

早く沖合などへ乗出しての風を召します夫も嬢様が氣遣ひます、梅「ナニ朝飯の  
刻限までよい歸って来るから嬢様よ無言で居てお呉れ、撫「夫の無言で居ますが  
デモ私しの氣もあつて成らぬことが有りますよと云ひつゝ一段聲を潜め「アノ森川  
子爵が此地へ来ましたよ昨日兵太郎が停車場で瀛車から降る所を確か見たと云ひ  
ますよ」梅花郎の撫子が早くも此事を知れるは驚き内心よハギヨツとせしかど其色  
を顔も見せず「夫の爾かも知れないが併し未だ大旅館へ遣て来ない、撫「夫だ  
から猶ほ險香ですワチ全躰云へば第一は大旅館へ遣て来る筈ですよ夫が来かいと  
云ふの何でも外に隠れて悪い事を巧んで居るよ遣い無いと思ひます事よ由れば内々  
で貴方を狙って居るかも知れませぬ貴方畏を上に行くのにお好なさい若し貴方よ  
間違ひでもあれば嬢様が困ります夫よ今日の私し嬢様の傍に居る事が出来ません  
から、梅「エ何故出来ぬ、撫「實の子昨夜兵太郎と共に父の所へ居ますうち兵太郎  
の家から迎へが参りました何でも兵太郎の父長右衛門が病氣で死掛って居と申す  
夫で兵太郎の昨夜の中よ直と歸しましたが私しも今日の一日嬢様も暇を頂き看病又行

て遣らねばなりません向でも使ひの口上でい最も死際と見へて色々な事を多舌ッて居ると申ます貴方の事や蟬澤の事なども時々口走るとの事です 梅「夫の奇妙だなア已も序が有れば見舞ても遣りたいが 撫「ホンは見舞ッてお遣りなさい私しの考へでの期と伺んですよ長右衛門のノノ蟬澤の殺された事件は付き色々知て居ますよ夫が氣よさッて成らぬから其様な事を多舌るのですよ」此言葉を聞き梅花郎は先又西村判事が兵太郎の金貨を見て長右衛門を疑ひたる事などを思ひだし如何さま長右衛門ころの蟬澤の事件は付き何事をか心よ包み居るよ相違なく臨終に至りて我れと我が心を迫められ其事を白状せんと思へるならんと斯く思案を定めながら「夫の何しろ可愛想だ私も若し行れたら行ふよ」と曖昧な言葉を番へて撫子よ分れ是より直よ約束の所よ至れば霧の中よ包まれて一個の人影よめり是れぞ疑ふ所も無し我敵の森川子爵あり梅花郎の突々よ其の傍よ進み寄れり

第 卅 九 回

梅花郎のイめる森川子爵の傍よ進み寄れり二人の既に死を決したる者あれば其言葉

さへ自然よ改たまり 梅「大層お待せ申しました 森「イヤ未だ約束の時刻よの後れません昨日申した通り鐵砲を二挺持て参りましたからサア此中で何れでもお撰びを願ひます二挺とも同じ銃で百五十米突よ届きますから是で充分と思ひます弾も此通り二袋ありまして二十四發づゝ包んで有りませう」とて彈鐵砲を二人前陳べたれば梅花郎の其中の一を取り「サア直よ参りませう」と言つゝ海岸よ下り行けば二艘の小舟浮み居るよぞ二人の之よ乗込みたり 森「昨日も申した通り銘々自分の好む所へ上陸し一方が陸へ上れば直よ打掛けて好ど致しませう 梅「心得ました併し一層の事此船の中で戦ふのも一入での有ませんか 森「イヤ夫での砲の音が陸へ聞へますアレ御覽じ既よ大旅館での誰だか二階の縁側へ出て居ます」と云はれ梅花郎も夫方を眺むれば霧よ籠りて誰なるや分らねど小枝嬢の居間の前に當り睨けながら二人の姿あり察する所ろ是れ撫子と小枝嬢なり嬢の今しも撫子より梅花郎が中洲まで罝を上げよ行かんとする事を聞き撫子と同じく其身の上を氣遣ひて斯くの欄干の所まで出來りし者あり斯く思へば梅花郎の撫子よ中洲の事だけ話したる事を悔やみ我

れ若し此儘歸らずバ、曠の直は我死したる事を知り病氣揚りの身を持って如何ほどか悲しむならん今、斯く霧は籠れバ我顔を見分ると難けれど必ず我と知れるならんア、此れが小枝嬢の見取と爲るか、と張詰めたる心さへ、轉と鈍るを覺へたり、斯る中、森川の早や漕出したれバ、梅花郎も先づ櫓を取りたり、小舟の一人乗、後、向ひて漕ぐのみなれば、漕ががら我前なる森川を見る能はず、其内、森川の早や幾何か進み去りしと見え櫓の音さへ聞へずなりたれバ、梅花郎の先づ櫓を留めて、悠々と鉄炮を取出し之よ、彈を込め何時までも放し得る事と爲し置きて、又も其櫓を取上げたり、斯くて凡そ三十分間も漕ぎたりと思ふ頃、最早や此邊ある可しと行手、向きて眺むる、よ彼の、中洲の目の前、在り霧の猶ほ残りたれ、日の登ると共、稍や薄らぎたれバ、其許か、茲かと足場能き所を撰び、我船を繋ぎ置きて、島の上、飛上れば、開きし、違はず、其所の是れ泥の淵、よて地面の柔かある所の深く、人の足を埋む可し去れ、と梅花郎の斯る淵、の慣し身、あれバ、水草の色土の色を見て、堅き所と柔かある所を見分つ、氣を注いで立上り、彼方、此方を眺むれ、と森川の姿、見へず、彼れの我より先、此の島、着きし事、必定、あれバ、徒らよ

立たる儘、彼れより打掛るを待つ、愚かなり、彼れの隠れ場を突留んと風の吹き來る方を指し、徐々と進みたり、風、向つて進む時、我足音後の方へ、聞ゆれ、と前へ、とて、聞え難きゆゑ、敵は悟られぬ秘傳ありと、か斯る折しも、彼方の鐵、よて一發、ドンと聞えしが、之と共、鐵砲の彈飛來りて、我帽子を打落せり、梅花郎の驚きて、彈の來りし方を、信と見れば、遙か離れし霧の中、彼の森川立居るよ、と梅花郎の直は、身を屈め、鐵砲を取直し、て充分、狙を定め、唯一發と、引鐵を引落せり、是、よて森川の微塵ならんと思ひし、よ何ぞ、圖らん、彼れ猶ほ起たる儘、よて微塵ともせざれば、手早く鐵砲を込め直さんとす、其中、よ森川の大膽、よも一足、我方へ進み來れり、進みて最も、狙ひ易き所、よて來たれば、茲ぞ、と又も一發を放掛れ、と森川の事、よもせず、猶ほ突々と進み寄れり、梅花郎の不審、よ堪へず、我彈の中らざる筈、よきよ、森川何故、よ傷つかざるや、と更、よ三發目を込め、返し、充分氣を留めて、放し試るよ、ア、我彈の唯だ音のするのみ、よて森川の傍まで、飛行く力、よ、口を離れて、僅か、一間、ばかりの所に、落たり、今、疑が、ふ所も、無し、森川の計、よ、陥りたり、森川より受取たる、此彈の、唯、目方のみ、重くして、其實、火藥をば、極めて、少く、詰ま者、あり、火

薬の力弱き故弾の飛行力なく筒口を離れてより間も無く其重さよ引落さるゝあり  
 ア、森川の如何よしして斯る偽弾を梅花郎に渡せしぞ此れ他ならず彼れ先刻二袋の弾  
 を出し梅花郎に撰出らせたるも其二袋の共に是れ役立ざる同じ弾あり已れの別に  
 兼てより眞の弾を隠し持ち彼の價弾を捨置きて眞の弾を用ふるあり梅花郎の斯と心  
 附き顔色忽ち朱を注ぎて怒りたれど今の早や詮方なし我命の森川の中よりあり森  
 川の落着きて眞の弾を込め梅花郎を狙たる儘よ一足くは進み寄る其有様梅花郎  
 を翫り殺せんとするに似たり今の僅に四間ばかりの所まで進み來たれば梅花郎の  
 腹立しさに堪へず聲を放つて「コレ悪人コレ人殺し」森川の最横柄に「人殺しで  
 の無い決闘だ悔しくは放て見ろ是から手前の身軀を壁に食ひせ己れの知らぬ顔で歸  
 して行き此口先で言く村津伯を言くるめ小枝嬢を妻にするのだ夫も手前の未だ蟬澤  
 を殺した裁判が済まず在るから其裁判の近くなるを恐れ何所へか逃て身を隠したの  
 だど己から言く披露して遣る」と口を極めて罵れば梅花郎聞くも得堪へず今と爲り  
 ての逃るゝ道なき假令彼れが弾も中るまでも阿々と殺さるゝを待つ可けんや好し我

れ鐵砲の筒を以て彼が頭を叩き割んと早くも心よ思案を定め其儘鐵砲を取直せば森  
 川拔らず其心を悟り「へん手前が起直つて一足でも己の方へ來るが最後直様此引鐵  
 を引落すぞ」と言ひつゝ更に狙ひを定め引鐵の指を掛けグツと其指よ力を入れたり  
 ア、梅花郎が身の上の落來る鐵の下よ置かれたる卵よりも猶ほ危し次回まで生延  
 ると覺束あしと云ふ可し

第 四 十 回

實に梅花郎の一命の鐵の下の卵よりも危ふし此時森川子爵の充分に狙ひ定め今や  
 引鐵を落さんとして一足前よ進みしが生僧く其所の最深き泥よして前ある片足をバ  
 膝の當りまでドブと踏込みたり踏込む拍子よ身軀の釣合を失ひて思はずも鐵砲  
 を投出せり抑も此島と云へるの既よ記せし如く泥よて出來たる中洲よして堅き所と  
 柔かある所あり其柔かある所の泥の深さ何十丈と云ふを知らず殆ど底なきかど疑は  
 るゝばかりあり土地の人の之れを呼びて泥井戸と稱ふるとかや今森川が片足を踏込  
 みし則ち底の知れざる泥の井戸あり森川の其足を抜かんとして又片足を前よ遣

れは其足も亦踏込みたり今雨足とも泥井戸の内は在り抜去る事叶ふ可くもあらず  
 ア、今まで梅花郎の一命を手中に握り居たる森川子今却って我命を梅花郎の手  
 の内握らるゝ事といふれり梅花郎の目の前此有様を見て救ひ得せんかと思へ  
 ども若し其傍に進み寄れば我身も同じ泥井戸に踏込む故今近づく事も叶はず只管  
 ら呆氣を取られしまゝ其様子を眺むるのみなり眺むる中森川は何とあかして抜出ん  
 と頻り其身を揉搔けども揉搔くほど猶身軀の重さよて次第深く沈み入り見る  
 く腰の邊りまで埋まり埋まりあがらも森川へ最早や逃れぬ所と断念め切て口  
 でありと梅花郎を辱かしめんと思ふ如く悔しげある顔附にて「コレ梅花郎手前  
 ナ小枝嬢を愛するけれど嬢の既此森川と夫婦約束までして有のだ之を横取にする  
 さらば手前即ち奸夫だ若し夫婦なされるなら成て見ろコレ奸夫め馬鹿め痴頑  
 め」と斯く罵る中にも泥の宛も徐々と森川を呑込まんとする如く森川が身軀の  
 少しづつ一寸一寸沈み行けり初めの僅く膝の當りまで埋みしも今既腰の邊り  
 を過ぎ又上りて臍の邊り猶登りて乳の邊りより早や肩先までも埋まりて唯だ泥

の上は首ばかり出せるのみ今口までも沈むあらん梅花郎の此恐ろしき死様を見よ  
 得地へ早々其所を立去らんとするよ森川の益々悔しがり「コレ梅花郎暫く待て手  
 前ナ手前」と云ふ中泥の早や口の内に入り一言も發し得ず茲に至りて森川の  
 宛も何ありと手は接る物を握りて其身を引上んとするが如く徒らに兩の手を差上げ  
 て空中を握むのみ握みたりとて手は接る者も無ければ其中は早や口より鼻まで鼻よ  
 り目まで一分く沈み行き終り頭の髪まで隠れしが斯くても猶ほ死切れぬ者と見  
 へ上たる手先を益々忙がしげと動かすのみ去れど之とても長くの續かず頓て手先よ  
 り指の先爪の先までも埋り行けり其後は是れ一面の泥々あり孰れの所も沈みしか其  
 穴さへも後残さずエ、恐ろしき死様よ苦しき冷たき死様よ今泥の底幾十尺の  
 深き所まで人不知られず唯一人其手を差上げて揉搔き居る事ならん梅花郎の斯る  
 恐ろしき所に長居す可きよあらずと身震しあがら舟は歸り早々陸へ漕ぎ附けて逃るが  
 如く大旅館へ立歸れば茲に彼の代理判事西村ありて「イヨ梅君、君は何所から來  
 た」梅花郎の猶ほ震へる聲よて僕僕ハナニ何所から來たのサ彼の何からソレ彼の



泥サく泥から来たのサ」西村の様子を怪み「ナニ泥との何所の事だ今し方撫子も聞けバ君ハ鴨獵へ行たと云ふが鴨獵でハ有る舞い森川子爵と決闘へ行たッラふ」と星を指されて言抜ける言葉も無ければ梅花郎の漸やく心を落着けて今有りし事柄と残らず語るよ西村判事も身震しつ「夫ハ實ハ恐しい死様だ併し君、君ハ未だ其森川が君ハ與へた腰弾を持って居るかへ」と問はれて梅花郎ハ衣囊を探り「ウム此通り持て居る」と差出すを受取て西村ハ其中の一個を破り如何も是ハ腰弾だ火薬が三分で七分ハ砂だ是さへ畜へて置けば他日若し何の様を疑ひを受けても證據ハ立つ夫よ森川の自分で死だも同じ事だから是切り君が黙って居れば誰も森川の死だ事を氣ハ附かぬ素より其筋ハ断へるよ及バぬから 梅爾さ實ハ是ハ天の裁判とでも云ふのだらう森川の様ハ奴ハ到底當前の死様の出来あひよ」と云へバ西村ハ初めて思ひ出せし如く「オ、裁判と云へば今日ハ大變ハ用事ハ有るのだッレ未だ落着せずハ在る蟬澤の一件ハ彼れハ僕の意見の通り裁判所での何ふしても松脂取長右衛門を疑ふので今から僕ハ山の中まで出張する積りだ 梅、フム夫ハ早く行かねば間ハ合

ふまい先程撫子ハ聞たよハ最ふ死掛ッて居ると云ふ事だ 西爾サ夫ハ又頻りハ君の事ハ蟬澤の事と口走ッて居るとて撫子から僕も聞た夫だから君と一緒に行けバ猶更都合が好と思ふが 梅、でハ直ハ同道しやう夫ハ撫子も一緒に行くだらう 西「ナニ撫子の既ハ小枝嬢ハ暇を貰ひ先へ行て仕舞たのだ僕も實ハ其時一緒に行ふかと思つたけれど斯うして故々君の歸るのを待て居たサア直ハ行ふと」二人ハ連立ちて馬ハ乗り山の中なる長右衛門が住家を差し行けり是より長右衛門が臨終の際ハ意外ある言立を爲し蟬澤を殺したる其本人も分りて今まで梅花郎の身ハ掛りし無實の疑ひも晴れ目出度く大團圓と爲る話あり

第四十一回

梅花郎ハ代理判事西村と共に馬ハ鞭撻ち彼の山の中なる松脂取長右衛門が家を指し行きつ頓て其半腹まで達せしころ向ふより急ぎ足よて馳來る女あり見れば侍婢の撫子あり撫子ハ二人の顔を見て嬉しげハ進み寄り「好い所へ來て下さつた最ふ長右衛門が一時間も覺束ないほどハ成りまして死る前ハ是非一度梅花さんのお目に掛り言

遺したい事があると夫ばかり云て居ますから私しが斯うして迎へよ上る所でした」と云ふより、「夫の誠な幸ひな殊な此通り判事も同道して来たからとて「是より三人時まで上り行き松脂取の小屋に入れ長右衛門の早や事切れしかと疑われ疎末なる寐臺の上へ横たひり今の言葉さへ發し得ず其枕邊に兵太郎最と打蕪れし爲躰くよて唯一人看病せり兵太郎の梅花郎と判事を見て丁寧な挨拶し更父が耳よ口を寄せ「阿父さん梅花さんが来ましたよ」と云ひつゝ、氣附薬と思ひるゝ小瓶の口を取りて父の口中へ注ぎ入るれば薬の功能忽ち見え長右衛門の目を開きて頭を擧げ聞くと苦しき聲を絞りて「能く入して下さいます死ぬる際一言貴方よお詫申す事が有りませぬ 梅何事か知らないが能く氣を注いで言ふが好いぞ玆に居るの判事だから」と聞きて長右衛門の息を繼ぎ西村も挨拶しつゝ「判事様と爲ら猶更ら結構です何ふか私しの言葉をお聞下さい」此言葉も西村の領首きつゝ、衣袋より手帳を取り出して其言葉の筆記と初めたり。長「私しの罰が當りました今まで正直長右衛門と人よ知られ曲つた事とて仕た事の無い身で有りましたが何ふした心の間違ひか私しの死掛

て居る蟬澤の衣囊を探り血も染た金貨を盗みました其時梅花さんが私しを見て短銃を射掛ましたが若し其彈が當つたら其場で死で仕舞ふゆゑ斯様を苦しむも逢ひませ舞ひよ彈の反れたが今での懺みです。西「ふ、夫で村津伯の別荘の前なる松の樹の元で蟬澤の金を奪つたの、其方か。長「ハイ此長右衛門めで有ます、悴が巴里へ行きたいと云ひますから其旅費を拵へて過りたいと心掛て居ます、矢先へ蟬澤の殺される所を見たのが運の盡です盗んだ金の二百圓で其の中八十圓は兵太郎の旅費に使用ひ百二十圓は未だ此の寐臺の下に隠して有ります。西「其方何ふして蟬澤が金を持つて居る事を知つた。長「其の死骸の衣囊から翻れて出るのが月明りよ光つて居ました。西「其方蟬澤を殺した短銃は何ふ致した。此の問ひよ長右衛門の驚ろきて「ヤ、ヤ、私くしが蟬澤を殺したと仰しやりますか、今死る身の私くしが何ふして偽りを申しませう殺したの、私くしで有りません私くしのアノ夜兵太郎の歸りが遅いから若し撫子の許までも居るかと思ひ迎へがてらアノ別荘の邊へ行き松の木影よ隠れて居ましたら其所へ蟬澤が来て何故か松の樹を探り初めました其時横合から

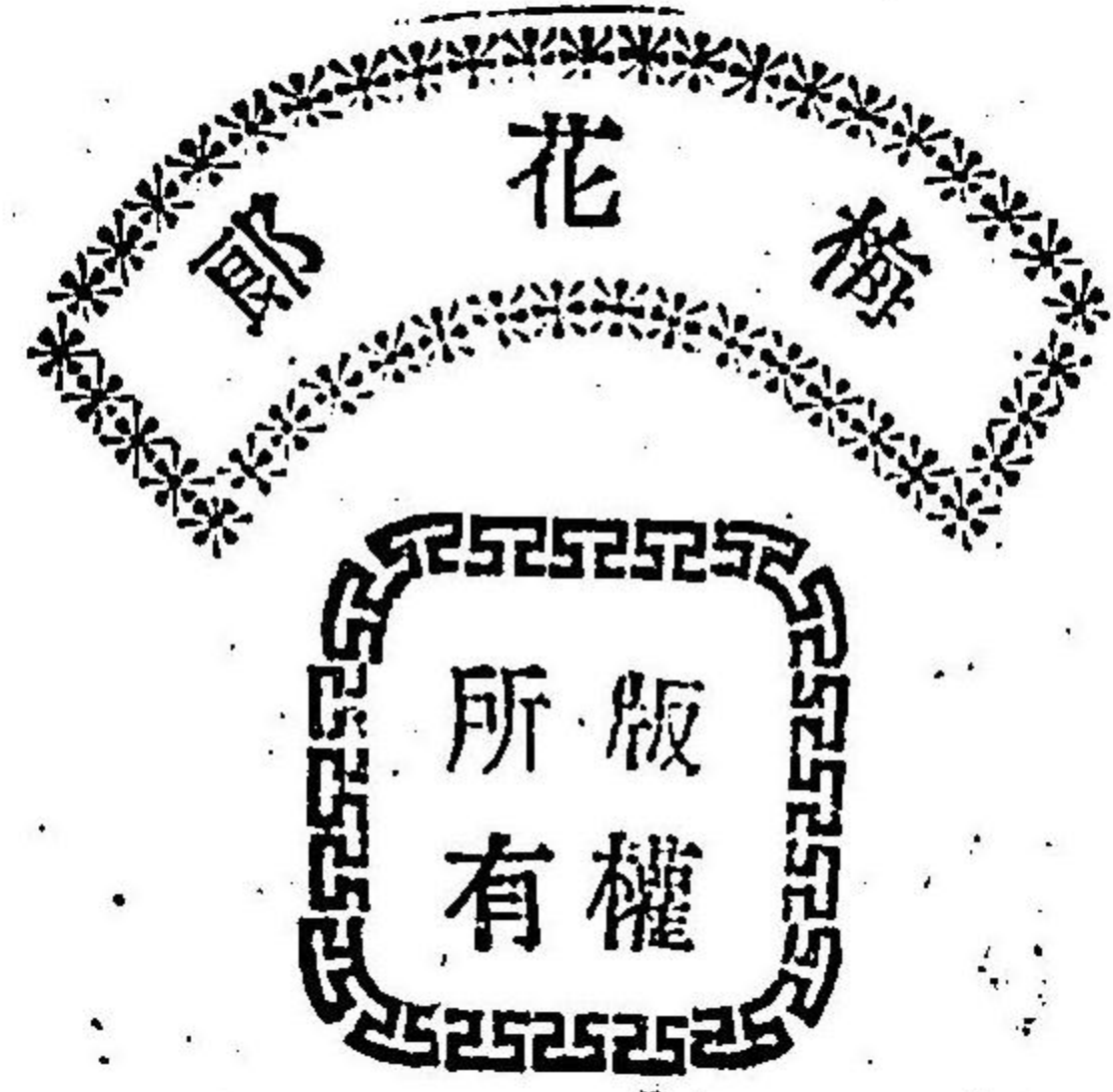
或人が蟬澤を狙撃よしましたので私達の逃出さふかと思ひましたか直跡から梅花さんが来て蟬澤の死骸を介抱する故逃るも逃られず隠れた儘で見つ居ますと梅花さんの別荘を叩起した行きました其時初めて悪心が起り密爾と後へ廻り其金を探り取て立去ふとする折しも再び梅花さんが来ましたから逸足出して逃ましたハイ私しの金を取ただけの事です殺したの或人です」西村の怪をみて「或人とい誰だ 長アノ村津伯の總領女で此程自害したと聞く初音嬢で有ます蟬澤の來る少し前から初音嬢の別荘を出て其塀の隅に隠れて居ましたか緩々と狙ひを定め一發放て家の中へ逃込みました其早い事と云ふ者の犬は追はれる狐の様で有ました」と息も絶や言立しが是れぞ此世の分れ揚げたる頭を領首く如く打垂れて眠るが如く死了り死際の人言葉最早や疑ふ所も無し今まで人々の心の中へ一個の大疑團と爲りて存したる彼の蟬澤死しの本人の恐ろしき初音嬢と分りたり去れど嬢の既に自害せし後おれ其罪も訪ふよ由なく唯今までも保釋の身なりし彼の梅花郎も改めて無罪の宣告を爲す事と爲りし此翌日ありしとか梅花郎既青天白日の身と爲れば村津伯も之を

信ずる事益々厚く終つ彼の小西男爵の勤と小枝嬢の願ひも従ひ梅花郎を小枝嬢の婿と爲し三月の後に出度く婚禮を行はせ伯爵自からの隠居して老後の風月を友とせり是より梅花郎の巴里に移り梅花夫人(小枝嬢)と共に村津伯の舊邸に住み賚女を初め今までの雇人への悉く暇を遣り更兵太郎撫子の夫婦を呼び家事取締りと爲し世の人又羨まる、まで幸福なる生活を爲せり小西男と西村判事の巴里へ行く度梅花郎梅花夫人の家客と爲り過し事を打語りて笑ひさめくを以て此上なき樂しみと爲せり獨り森川子爵の如何とせしや今頃彼の泥井戸の底の底まで其骨までも腐り盡せし事ある可し兎も角にも再び出來りて梅花夫婦を惱まし得ざるの目出度き限りどころ言ふ可けれ

211

明治二十三年一月十一日印刷  
全 年一月十五日出版

版權登錄



編輯者兼  
發行者

富田直次郎  
日本橋區通四丁目七番地

印刷者

瀧川三代太郎  
日本橋區新和泉町一番地

發兌

明進堂  
日本橋區通四丁目七番地